

**コリアンコミュニティにおける高齢居住者の
生活と住まいからみた地域再生の課題：**

西成区在日コリアン多住地域を中心として

The Task of Area Regeneration:

**Based on the Survey of Livelihood and Housing Environment
of the Elderly Ethnic-Korean Residents in Nishinari Ward**

**こりあんコミュニティ研究会・西成在日コリアン高齢者の
生活と居住サポート研究部会 / 社会包摂ユニット編**

Edited by the task force for the Survey of Livelihood
and Housing Support of the Elderly Ethnic-Korean
Residents in Nishinari of the Research Society for the
Regeneration of the Korean Community (KOCO-KEN)/
URP Social Inclusion Unit

目次

刊行にあたって	1
序章 研究の概要	5
第Ⅰ章 調査対象者の基本属性	21
第Ⅱ章 世帯収入の現状	34
第Ⅲ章 西成地区コリアンコミュニティの形成と変容	37
第Ⅴ章 介護の現状とニーズ	54
第Ⅵ章 「住まいの現状と改修へのニーズ」	65
第Ⅶ章 地元コミュニティ（民団西成）の取り組みと地域再生の課題	77
第Ⅷ章 地域再生に向けた課題	85
【参考文献】	89
付 録	91
1. 調査協力をお願い(事前調査案内チラシ)	
2. 民団西成支部によって会員名簿上に記載されている会員に郵送した 調査案内と依頼文	
3. 関連記事の紹介	
4. 質問紙	
5. 単純集計表	
6. 調査員及び研究協力者(敬称略)	
7. こりあんコミュニティ研究会案内	

レポートシリーズ No. 18 の刊行にあたって

大阪市立大学都市研究プラザ
副所長・第3ユニット長 水内 俊雄

大阪市西成区は、都市研究プラザにとって、さまざまなネットワークとの関わりを通じて、足しげく通うフィールドとなっている。その多くは、JR 新今宮駅や地下鉄動物園前駅から直近の西成プラザを拠点に、数多く企画されるフィールドサーヴェイや、さまざまなまちづくりに関連する会議としての場として、重要な役割を果たしている。日雇い労働者の集住する簡易宿所街が大きく変貌を遂げているあいりん地域、その中でも国際集客で注目を浴びている太子地区、あるいは萩之茶屋小学校区でのさまざまなまちづくりの取り組み、そして国道 26 号線より西側の西成区北西地区でのユニークなまちづくり、人づくりの企画で、楽塾の取り組みや、高齢単身で社会的絆の喪失しがちな人々を応援する不動産業者の活動などは、すでに本レポートシリーズでもたびたび取り上げてきている。

西成区北西地区の中でも南西部は、在日コリアンの多住地域であることを知る人は少ないが、西成区で行われてきた調査の中で、この在日コリアンに着目した企画はごくわずかしか存在していなかった。西成プラザを拠点とする調査でも、在日コリアンに関する調査は、今回が最初でありかつ本格的な取り組みであった。

特に西成区北西地区での有力な地域組織と、在日コリアンの地域組織が協働し、高齢者のインタビュー調査を企画し、都市研究プラザの研究員をコアとして、調査を実現したことは画期的であった在日コリアンの高齢者福祉の実態とそのニーズを掘り起こすというクライアント側の意図のもとに調査は組み立てられたが、本調査をバックアップしてきた科学研究費プログラム「ITACO による新しい地誌学の創生と地域の人縁生成に関する試行研究」(代表若松司)の主旨からして、西成区北西区における在日コリアンの地域での生き様、地域に対する思いなども抽出する良質な地域史として見ても、貴重な調査ともなったと自負している。調査にかかわった諸団体や個人のみなさまにあつくお礼申し上げたい。

刊行にあたって

(財)ヒューマンライツ教育財団

理事長 富田 一幸

早いもので、当財団が「西成区在日コリアン人権意識調査」を実施したのが 1997 年から 1998 年だったから、もう 13 年になる。主任研究員は慎和枝さんという若い研究者だった。あの調査は、名称が示す通り「差別」を題材にしたものだったが、今回の調査は、「福祉」を題材にしているが、時代の影響を受けて「排除」を探求するものとなった。民団西成支部や総連西大阪支部に絶大なご協力を得て、全泓奎さんをはじめ大阪市立大学都市研究プラザのみなさんの尽力で報告書を上梓するに至った。感謝申し上げる。

ボクは、西成の住民参加型のまちづくりに渦中に身を置いて 20 年以上になるが、事業の柱の一つが、老朽賃貸住宅の共同建替えであり、コーポラティブ住宅など多様な住宅の供給であった。その中で幾人もの在日コリアンの入居者、地権者に出会ったが、ここかしこに残る生活共同体に興味があった。コリアンだけで集住する時代でもなかりとも思ったが、ただ溶解するに任せるといふのもいがかと考へてきた。介護保険になり、国籍等を理由にした「選別」は違法行為になったが、生活共同体を活かした福祉サービスの余地がないはずはないとも考へてきた。

「差別」を見つめたのが 13 年前だったが、西成区で「排除」あるいは「新しい貧困」が急速に進行し、まちのかたちさえ変貌し始めた。このまちに特有の、部落、在日、釜ヶ崎の社会運動とその組織も様変わりし始めた。どこも高齢化が一番の変化だ。しかし、かつては、それぞれの独自課題に追われていたのか、互いが閉鎖的だったのか、存外に疎遠な関係だったが、最近は随分と親しくなった。老いて穏やかになったのかもしれないが、これは糸口になる。

高齢化と言えば活力がないと言われがちだが、いっそ高齢化をまちの再生の起爆剤にすることはできないだろうか。「差別」「貧困」「排除」、いろいろ経験してきて、このまち特有の社会運動が一度むけて、まちのためにできることは多いはずだと思う。この研究がその手がかりに必ずなると確信している。

西成在日高齢者調査の結果をうけて

在日大韓国民団大阪府西成支部

支団長 尹 善雄

2010年6月より「ヒューマンライツ教育財団」による調査委託を受け、「こりあんコミュニティ研究会」を調査母体とし、「コリアンコミュニティ研究会西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会」が設置され、西成・在日コリアン高齢者（65歳以上）の生活と居住実態に関する調査が始まった。

この調査にさきだって、民団西成支部は65歳以上の調査対象団員への「在日高齢者アンケート調査のお知らせとお願い」を送付して、団員への協力を呼びかけた。調査活動においては支部を拠点として活動し、訪問調査にあつては地域事情をよく知る団員が先頭に立って行動し、比較的問題なく調査活動を行うことが出来た。その結果、既にお亡くなりになっておられる方や移転した方の存在などもわかり、団員の実情を知ることともなり、支部活動としてもおおいに役に立った。さらには、高齢者達が調査内容との関連で、ご自分の生き様を一生懸命に語ってくれて、これまでの在日のおかれた立場を改めて知る機会にもなった。

今回の在日高齢者の生活と居住に関する実態調査データはわれわれ西成支部にとって大きな財産として残った。今後この調査結果をどのように活用していくかについては様々な利用方法があるが、とりわけ我々が2003年より運営している通所介護施設・西成サランバンをどのように発展させることが出来るかにかかっていると考えている。西成・サランバンは今後、地域をつなぐデイサービスとして地域づくりに参加していきたい。

なお今回の調査においては、職業、年齢、文化の違いを超えて共に活動できたことは大変意義のあることであつたと考えている。ありがとうございました。

在 日 本 朝 鮮 人 総 聯 合 会
大阪府西大阪支部常任委員会
委員長 沈 基 鳳

西成・在日コリアン高齢者の生活と居住サポート調査報告書の完成を心からお慶び申し上げます。

こりあんコミュニティ研究会・西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会様においては多文化共生が叫ばれるなか、未だ実態が把握しきれていない在日高齢者、特に独居高齢者の方々の今までの暮らしぶり、これからの生活、居住問題にスポットをあて、より充実した福祉サービスの適用と住環境、および街づくりのため多大な功績を残されたと思います。

今回の調査結果が、西成区にお住まいの在日コリアンと日本の友人との新たな多文化共生への一助になることを期待しております。

最後に今回、調査に関わられたすべての皆様の労をねぎらうとともに活動のさらなるご発展とご活躍を願ってやみません。

序章 研究の概要

ジョン ホンギョ
全 泓奎・四井 恵介

1. 研究の背景及び目的

日本における朝鮮半島をルーツに持つ人々（以下、在日コリアン¹とする）の歴史は、既に100年を超えている。戦前と戦後を生き抜いてきた人々は、民族性や文化的な固有性を持ったコミュニティ、あるいは多住地域を形成し、越境空間を求めて集まってきた同胞の人々と共に持ちつ持たれつの生活空間を形成してきた。時にはホスト社会による、異質性に対する疑心暗鬼の視線や差別、排除を経験しながらも現在まで乗り越えてこられたのは、同郷集団が下支えとなって築き上げられたコミュニティがあったからでもある。

ところで、近年経済のグローバル化によるモノの移動に合わせて、人の移動がさらに進んでいく現象が進行する中、エスニックコミュニティとしてのコリアンコミュニティの外延のみならず、内部の変容もみられるようになった。その中には、民族的アイデンティティそのものが一般の地区に溶解されてしまい、コミュニティとしての運営が形骸化されているところや、新たな地区更新の課題に取り組んでいるところ、または、地区更新後に若年層の流出や人口の高齢化などで活力を失い、陸の孤島と化しているところなどがあり、さまざまな形の困難や課題が浮き彫りにされている。

これまで在日コリアンに関する研究としては、住民の人権や、運動、歴史等については研究の蓄積が多いものの、コミュニティの形成や変容、住民の暮らし、居住環境、当該地域における共生のまちづくりのあり方などコミュニティに視点を絞った研究は十分とは言えない。

一方、近年欧米社会を中心に都市内における特定の地域への「社会的な不利」の集中に焦点が当てられ、特定の地域が貧困や社会的排除に結びついていくメカニズムに対する地域のダイナミックな役割・効果(area effects あるいは、neighbourhoods と言う)に最も大きな関心が集まっている。社会的排除とは、(都市)社会における参加の欠乏に対応するための規範的な概念である。社会的排除は、人々が次第に完全なる市民として享有できるような利益から閉ざされるダイナミックなプロセスに関連して使われてきた(Walker & Walker, 1997)。

一方、はく奪が集中している地域の居住者は、市民的権利から排除される結果に陥りが

¹ 朝鮮半島をルーツとしている人々を称する表現には様々な用語があるが、本稿では一貫して戦前は朝鮮人、戦後は在日コリアンと称することにした。

ちである。その意味で居住における社会的排除の一つの側面として、不利益を被る世帯の空間的な集中に対する問題や、それによる社会参加への制約、社会からの隔離を及ぼす場所の問題、即ち地域が独自に持つ負の効果が見られる。既存の文献の中からは、不利益世帯の空間的な集中が必ずしも問題とはいえないと指摘しているものもある。つまり、不利益世帯のような同質的な社会的集団の集中が機能的役割を果たし、家族とは異なるネットワークを形成・維持する可能性について注目しているのである。しかし、その場合においても公共的なサービスへのアクセスや社会的ネットワークの形成・利用に制限を受けることが、社会的排除を加重させるメカニズムとして機能することも多い。そのため、多次的なはく奪の集中による地域の効果に注目する必要があるのである。

言い換えると、地域が教育、雇用、健康、住環境などに大きな影響を及ぼす要因になる恐れがあることに注目しなければならないと言えよう。地域を通じた様々な不利益への対応は、排除に抗するために欠かすことのできない課題でもある。既に欧米では、地域が貧困や社会的排除に結びつく問題を同定し、それぞれの特定地域にフォーカスを当てた地域再生プログラムが実施されているが、日本ではかつて被差別部落を対象に実施された同和対策事業を除いては、まだそのような実践が乏しい。そこで、本研究ではこれまで日本の都市政策や社会政策から制度的に認知されず、不法占拠や非衛生的な居住生活、無年金状態の中での経済的なはく奪を余議なくされてきた「コリアンコミュニティ」を中心に研究を進めることにした。

本研究で対象としている大阪市西成区は、被差別部落の中に暮らすエスニックコミュニティとして二重に排除され、代表的な地域産業であった皮革産業（靴及びベルト）やナット製造業などのような地域経済基盤が停滞するなどコミュニティの外延の変化に伴う若年層の流出が顕著で、内部的には高齢化の進展や、日本国籍者の増加に伴うコミュニティの質の変容が進んでいる。また、以前は被差別部落に居住していることにより文化的排除も経験したという。この地域もまた、現状に対する明確な実態の把握に基づいた地域再生の課題がことさら問われている。

以上のような問題認識に基づいた本研究の目的は以下のとおりである

第一にそのような在日コリアン集住地の成立過程とその後の展開や変容、そこで暮らしている住民の居住及び生活実態を明らかにする。

第二に在日コリアンコミュニティの現状を把握するため、最も社会的ニーズが高く、今後の地域再生において重点的な配慮が必要と思われる高齢者の生活ニーズと居住実態を把握するための調査を行い、今後同様の地域における多文化福祉のまちづくり²のありかたを

² 既存の文献では似通った表現として「異文化間介護」という表現を使っている場合もある(川村、2007)。それは外国人介護労働者の受け入れに関する議論から始まった社会的関心に端を発するホスト社

提示する。

第三に、以上のような調査内容から得た知見を基に在日コリアンコミュニティに関連した民間団体等関係者を中心にワークショップを開き、地域再生のアクションプランを提案すると共に、それを通じたコミュニティ間の経験交流にも資する。

以上のような目的の下、本研究は日本国内で最も在日コリアンが多く居住しているとされる大阪市、その中で現在もコミュニティとしての営みが認められている多住地区(あるいは、混住地区)として、西成区にある在日コリアンの多住地域を対象に研究を進めることにした。

このような在日コリアン多住地域に着目した研究としては、まず既存統計を用いて在日コリアン集住地区を類型毎に分類して紹介している三輪(1983)を取り上げることができる。三輪は在日コリアンの混住率が10%以上の統計区を抽出し、その立地からみて8つの地区に分類している。分類された各地区の類型は、①「河川沿い」(東京都江東区ない所の集住地区)、②「駅前商業地」(下関市内の集住地区)、③「住工混在地」(大阪市内に17地区、東大阪市内に2地区、神戸市3、東京都1、八尾市・吹田市1の23地区を挙げており、その中でも大阪市東部の内陸家内工業地として生野区に11、平野区1、八尾市1東大阪市2と特に大阪市内に多く分布していることを浮き彫りにしている)、④「臨界大工場隣接地」(大阪市西淀川区神崎川河口部の輪中となっている集住地域、川崎市内の臨海埋立地にある製鉄大工場に隣接した集住地域、姫路の同様の地域)、⑤「部落混在地」(大阪市内の西成区内にある集住地域2、西宮市の集住地域、下関市外れにある集住地域)、⑥「河川沿いの部落混在地」(尼崎市武庫川近くにある集住地域、広島市太田川放水路沿いにある集住地域)、⑦「河川沿いの住工混在地」(東京都足立区にある集住地域)、⑧「部落隣接の住工混在地」(京都市南区にある集住地域、東大阪市にある集住地域)に分けられている。本研究が対象としている西成区は、⑤「部落混在地」として分類されている。三輪は「同地区は総人口の減少に対応して朝鮮人混住率が増加しており、朝鮮人や九州離島、沖縄出身の人々も集住する混住地域であり、皮革二次加工の工場、と場、化製場(獣骨・由油脂処理場)など部落産業や、金属加工などの事業所も多く、住工混在地である」(前掲書 p.64)としている。

福本(2004)は、都市社会地理学という立場から都市におけるエスニック集団の居住地分布を取り上げ、大阪市の在日朝鮮人を対象に、マクロ及びミクロな視点から、朝鮮人が急増する第二次大戦前から帰国によって激減する第二次大戦直後の時期に至るまでの彼らの居住地分布パターンの歴史的変遷とその要因を考察している。その結果、淀川南岸地域の

会からの目線を強く感じざるを得ない。ここでは、主体と客体を想定せずに多体的で互恵的な意味を込めて多文化福祉という表現を使うことにしたい。それには国籍の如何を問わず共生的なまちづくりを共に築いていくことから互いの福利の向上が図られてくることを期待する意味も込めている。

集住地では紡績・ガラス業を中心とする中規模以上の工場の職工が、また、大阪市西南部では職工に加え土木工事・雑役労働者が多かったことがわかり、それが 1930 年代の集住地の拡大期にも就業構造上の特徴として引き継がれていた点を明らかにしている。一方、同時期から社会階層の分化が進み、零細工場の自営業者層の出現は大阪市東南部と西南部にのみ見られたことも指摘し、後に集住地間に定住性の面でも地域差を生み出す背景となったという示唆の富んだ知見を提示している。終戦後、集住地は大阪市東南部と西南部の一部でのみ存続したが、それは当時の大量帰国と空襲被害による生活基盤の喪失に起因しており、逆に集住地残存の要因となったのは帰国時の「持ち出し制限」の影響を受けた自営業者層であったという。残存した集住地はこのような定住性の高い自営業者層の存在と空襲被害の少なさという条件を兼ね備えており、同時期の在日朝鮮人の分布パターンが、今日の大阪市における居住パターンの原型となっていることが指摘されている。

李度潤、2010 は、関東や関西地域にある集住地区を対象に、土地利用権の有無を基準に、「スクォッター」、「飯場」、「一般地区」の三つの類型に分類するとともに、移住期における集住地区の展開及び住民の生活状況について明らかにし、各々の地区における今後の課題について考察を行っている。

以上のように全国、あるいは地域圏を対象に多住地域の特性に基づいた分類を行い、各々の地区の現状と課題を模索した研究の他には、メゾレベルで区単位のコミュニティを対象に研究を行ったものもある。例えば、現在開発が完了し、高層マンションに入れ替わってしまった川崎市の戸手地区のスクォッター地域における住環境運営に関する研究(新井他、2007)、京都市南区東九条にあったスクォッター地域を対象とした住環境整備に関する研究(吉田、1993、韓勝旭、2007)、大阪市生野区における集住地域の居住実態に関する研究(平山、1990、吉田、1995 ; 1996)、神戸市長田区にあった朝鮮人部落の形成と解消過程に関する研究(本岡、2006)等を挙げることができる。以上のような文献は建築学や都市計画学、そして人文地理学の分野からの研究がほとんどであり、主として地区内の住環境や居住実態、さらに当該コミュニティの形成と変容過程に射程を当てたものや、当該地域の住環境改善に着目したものが多い。さらに民俗学的なアプローチを用いながら福岡にある朝鮮系住民集住地域(8 つのバラック集落)に対し研究を行った文献(島村 2010)等を加えることができる。以上、在日コリアン集住地域を対象とした研究は、上記したようにスクォッター地域の住環境整備過程に着目したものや、住工混在地区における集住地域の居住実態を明らかにし今後の計画や整備課題を明らかにするための研究が中心をなしている。

一方、本研究が対象としている地域は、大阪市内にある在日コリアン混住地域の中でも韓国・朝鮮籍の割合が 3 番目に多い地域³であるにもかかわらず、同地域にかかわる先行研

³大阪市の外国人登録者数は、2009 年 8 月現在、121,576 名で、その中で韓国・朝鮮籍は、83,562 名

究があまり見当たらないのが現状である。その中で今回の調査を委託した財団法人ヒューマンライツ教育財団により実施された「西成区在日コリアン人権意識調査報告書」(以下、「人権調査」とする)(主任調査研究員: 慎和枝)は貴重な資料である。調査の趣旨としては、「生野区、東成区に次ぐ在日コリアン集住地区である西成区に住む在日コリアンの人権諸問題に対する考えや意見を探求することを通して、彼らの社会参加の道筋を明らかにし、「人間が人間らしく生きる西成のまちづくり」の実現及び国際人権都市おおさかの発展に寄与するということ」(「人権調査」、p.3)が挙げられている。そのような問題関心からもわかるように、同報告書は、西成区在住の在日コリアンにおける差別経験や地域内での定住、そして部落地域や住民との関係に多くの関心を注いでいることが特徴である。そのため調査方法としては、本研究同様に質問紙調査(有効回収票数 166)と聞き取り調査によって成り立っている。しかし、ここで調査対象である在日コリアンは、民団や総連の名簿に基づいて抽出したものではなく、地元最大の影響力を持っている部落解放同盟西成支部の協力を得て対象者を選定した点が、地元民族団体からの全面的な協力と共同実施体制を組み、その名簿に基づきサンプリングを行った本研究との大きな違いである。また質問項目においても上記のような趣旨や目的によって設計されており、本研究の問題関心とは若干距離を置いている。しかし、一部の項目においては比較可能な内容もあり、それらについては、順次参考にしながらか分析を試みることにした。

(69%)となっている。市内の外国人人口の中で、韓国・朝鮮籍だけを区別に分けると、生野区が最も多く(29,375名、35%)、その次は、東成区で6,611名(8%)となっている。本研究で対象とした西成区は3番目に多く、5,420名(6%)である。(入管協会、2010)

2. 調査実施地区及び調査実施体制

先述したように本研究では、大阪市内の西成区にある在日コリアン多住地域(あるいは混住地域)を対象に調査を進めることにした。同地域を調査の対象としたのは、本研究の委託者である、財団法人ヒューマンライツ教育財団からの依頼及び、当事者組織としての在日大韓民国民団大阪府西成支部と在日本朝鮮人総聯合会大阪府西大阪支部からの協力があったからである。同地域の当事者組織による全面的な協力により、上記各支部が管理している名簿を活用したサンプリングに基づいて調査が行われたということは本調査の最も大きな特徴である。また、全ての調査が面接調査法に基づいて実施されたことにより、調査票以外の点についても気づきの点を拾うことができたことも特記すべきであるといえよう。なお、本研究の遂行にあたり、2009年度財団法人住宅総合研究財団による研究助成「社会的な不利地域における共生型まちづくりに関する研究－在日コリアンコミュニティの地域再生と居住支援－」（研究主査：全泓奎）の一部を活用したことも記しておきたい。

1) 西成区の概要

西成区は1925年(大正14年)4月1日、大阪市の第二次市域拡張に伴い、今宮町、玉出町、津守村および粉浜村の四カ町村を合併し成立した(川端直正、1968)。

西成区は、上町台地の西側から木津川に至る間に位置しており、北に浪速区、東に阿倍野区、南に住之江区、木津川を挟んで西に大正区が隣接している。人口130,414人、世帯数74,525世帯(2007年12月1日現在推計)、面積は7.35km²である⁴。



図1. 西成区の位置

2010年国勢調査速報によると人口の減少数や減少率では西成区が1万747人(同8.1%)減と最も多く、その次は生野区で4,505人(同3.3%)を示している。世帯数でも西成区の減少数及び減少率が最も高い(4,302世帯、5.4%)数値を示している。

⁴ 西成区役所ホームページ <http://www.city.osaka.lg.jp/nishinari/page/0000000788.html> を参照

次に住宅の所有関係における特徴についてみると、西成区は市内の在日コリアンの混住率が高いと知られる他の区に比べ持ち家率が最も低く、その代わりに借家率が最も高い数値を見せている。借家の中ではとりわけ公営借家率が最も高いことが特徴的である。

【表 1】住宅の所有関係

住宅の所有の関係 (5 区分)	総 数	%
大 阪 市		
専 用 住 宅 総 数	1,222,670	
持 ち 家	481,490	
借 家	670,680	
公 営 の 借 家	101,210	
都市再生機構・公社の借家	39,010	
民 営 借 家	510,170	
給 与 住 宅	20,290	
東 成 区		
専 用 住 宅 総 数	34,380	
持 ち 家	14,790	43.0
借 家	17,020	49.5
公 営 の 借 家	-	
都市再生機構・公社の借家	220	0.6
民 営 借 家	16,000	46.5
給 与 住 宅	800	2.3
生 野 区		
専 用 住 宅 総 数	54,980	
持 ち 家	26,250	47.7
借 家	25,930	47.2
公 営 の 借 家	620	1.1
都市再生機構・公社の借家	-	
民 営 借 家	24,840	45.2
給 与 住 宅	480	0.9
西 成 区		
専 用 住 宅 総 数	72,440	
持 ち 家	22,780	31.4
借 家	46,100	63.6
公 営 の 借 家	2,710	3.7
都市再生機構・公社の借家	470	0.6
民 営 借 家	42,800	59.1
給 与 住 宅	110	0.2

注：住宅の所有の関係「不詳」を含む。

資料：平成 20 年住宅・土地統計調査

(総務省統計局) <http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/kekka.htm>

住宅の築年数を見ると下表のとおりである。西成区の場合、1960年以前に建てられた住宅が14.1%となっており、大阪市平均の2倍にも達している。

【表2】建築の時期

建築の時期（8区分）	総数	%
100 大 阪 市		
住 宅 総 数	1,262,120	100.0
1960年以前	91,220	7.2
1961~1970年	97,110	7.7
1971~1980年	203,720	16.1
1981~1990年	280,910	22.3
1991~1995年	107,250	8.5
1996~2000年	150,090	11.9
2001~2005年	166,530	13.2
2006年~2008年9月	73,570	5.8
115 東 成 区		
住 宅 総 数	36,130	100.0
1960年以前	4,840	13.4
1961~1970年	1,540	4.3
1971~1980年	4,030	11.2
1981~1990年	7,810	21.6
1991~1995年	3,100	8.6
1996~2000年	3,590	9.9
2001~2005年	4,430	12.3
2006年~2008年9月	3,360	9.3
116 生 野 区		
住 宅 総 数	59,950	100.0
1960年以前	11,010	18.4
1961~1970年	5,610	9.4
1971~1980年	6,340	10.6
1981~1990年	12,070	20.1
1991~1995年	6,150	10.3
1996~2000年	6,060	10.1
2001~2005年	6,340	10.6
2006年~2008年9月	2,750	4.6
122 西 成 区		
住 宅 総 数	75,920	
1960年以前	10,700	14.1
1961~1970年	7,460	1.0
1971~1980年	13,340	12.5
1981~1990年	16,990	22.8
1991~1995年	7,380	5.5
1996~2000年	5,880	3.5
2001~2005年	6,650	9.0
2006年~2008年9月	2,880	4.9

注建築の時期「不詳」を含む。

資料：平成20年住宅・土地統計調査

(総務省統計局) <http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/kekka.htm>

築年数が高い住宅が多い中で実際に老朽破損住宅はどれほどあるのかについては、下表のデータから確認できる。それを見ると各区において5%前後の住宅が老朽・破損状態にあることが示されているが、そのような状態にいなながらも7割～8割の住宅は増改築や改修工事を行っていないことがデータから読み取ることができる。

【表3】住宅の老朽・破損状態と増改築・改修工事の有無

腐朽・破損の有無	住宅総数	%	増改築・改修工事等をしていない	%
100 大阪市				
持ち家総数	514,050		388,760	75.6
腐朽・破損あり	30,640	6.0	21,850	71.3
腐朽・破損なし	483,410	94.0	366,900	94.4
115 東成区				
持ち家総数	16,250		11,910	73.3
腐朽・破損あり	1,090	6.7	870	79.8
腐朽・破損なし	15,170	93.4	11,050	72.8
116 生野区				
持ち家総数	30,470		22,850	
腐朽・破損あり	1,280	4.2	930	
腐朽・破損なし	29,190	95.8	21,920	
122 西成区				
持ち家総数	25,550		18,670	73.1
腐朽・破損あり	1,370	5.4	950	69.3
腐朽・破損なし	24,180	94.6	17,720	73.3

資料：平成20年住宅・土地統計調査

(総務省統計局) <http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/kekka.htm>

以上のようなデータから読み取れる西成区全体の住宅の現状は、他の区に比べ持ち家率が最も低く、その代わりに借家率が最も高い割合を占めていることや、3割弱の住宅が1980年以前に建てられており築年数が長い住宅が多く、その影響もあって老朽化した住宅が他の区に比べ戸数的には最も多く存在していることが見て取れる。さらに老朽化した状態でありながらも改修工事等が行われていない現状が浮き彫りにされた。

本研究の対象である西成区内の在日コリアン多住地域におけるより詳細な住宅及び居住実態については第VI章にて詳しく述べる。

2) 調査実施体制及び役割

本調査の実施に当たっては、「こりあんコミュニティ研究会」が財団法人ヒューマンライツ教育財団からの調査委託を受け、「西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会」(代表：全泓奎、同研究会運営委員長、大阪市立大学都市研究プラザ・准教授)を設置し、数次に亘る研究会を開催しながら調査方法や調査内容の検討、調査票設計、調査結果の分析等を行った。本調査におけるサンプリングや調査期間中の調査員の管理、そして回収した調査票の統計処理等については、有限会社地域・研究アシスト事務所に担当してもらった。なお、先述したように民団西成支部及び総連西大阪支部による調査協力と同支部員による調査参加により、ほとんど難航することなく調査を進めることができた点は、本調査体制が持つ最も大きな特徴といえよう。下記はこれまで本調査部会が中心となり民団西成事務所等で行なってきた研究会等の概要を示したものである。

【参照】 これまでの研究会の日程

①調査員研修会 (5月24日 19時～ 民団西成支部)

報告者：中山徹 (大阪府立大学教授)



【写真 1】 調査員研修会の様子

②調査中間報告会(7月17日(土)18時～民団西成支部)

報告者：四井恵介(地域研究アシスト代表)

③ライフ・ヒストリー調査打ち合わせ(8月9日(月)19時～民団西成支部)

報告者：全泓奎

④多文化福祉に基づいたコリアンコミュニティの地域再生に関するワークショップ

趣旨：日本の代表的なエスニックコミュニティである在日コリアン集住地域では、人口流出と高齢化、産業の衰退などにより、地域社会の経済社会的な基盤沈下が激しく、それによる脆弱性の深化が危惧されている。そこで、大阪市大都市研究プラザ・第3ユニット(社会包摂ユニット、同ユニット長：水内俊雄)からの協力を得て、この間行われてきた調査をベースに地域再生のWSを開いた。本企画は、当該地区のような社会的不利地域の包摂的な地域再生に資することを目的に据え、大学の持つ学知の地域化を促し新たな公共による地域づくりに貢献できることが期待された。

・主催：こりあんコミュニティ研究会

・後援：日本居住福祉学会・財団法人ヒューマンライツ教育財団・財団法人住宅総合研究財団・大阪市立大学都市研究プラザ

・日時：2010年9月18日(土) 12時30分～20:00／ 場所：大阪市立大学・高原記念館(学友会ホール)

1. 開会のあいさつ(12:30～12:45)

早川和男(日本居住福祉学会会長、神戸大学名誉教授)

富田一幸(株式会社ナイス代表取締役社長)

水内俊雄(大阪市立大学都市研究プラザ副所長、日本居住福祉学会理事、研究会共同代表)

2. 趣旨説明(12:45～13:00)

全泓奎

(大阪市立大学都市研究プラザ准教授、日本居住福祉学会事務局長、研究会運営委員長)

3. 報告(13:00～14:20)

①和歌山コリアンコミュニティの形成と変容(水内俊雄)

②和歌山在住在日コリアンの暮らしと生活課題(全泓奎)

③大阪市西成区北西部コリアンコミュニティの暮らしと生活課題

(川本綾、大阪市立大学文学研究科、同都市研究プラザGCOE特別研究員、研究会会員)

④大阪市西成区北西部在日コリアン高齢者のニーズ調査から

：高齢者の生活ニーズおよび福祉サービスを中心として

(中山徹、大阪府立大学人間社会学部、日本居住福祉学会理事、研究会共同代表)

⑤大阪市西成区北西部在日コリアン高齢者のニーズ調査から：居住実態を中心として

(黒木宏一、大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員、研究会運営委員)

4. 他地区の経験とコメント (14:30~16:00)

①東九条 CAN フォーラムの取り組みと今後の課題

(金周萬、京都外国人高齢者・障がい者生活支援ネットワーク「モア」共同代表、京都・東九条CANフォーラム事務局長)

②生野 KMJ の取り組みと今後の課題

(高敬一、社団法人大阪国際理解教育研究センター (KMJ) 事務局長)

③ウトロ地区の住環境改善に向けた取り組みと今後の課題

(斎藤正樹、ウトロを守る会、日本居住福祉学理事、研究会運営委員)

④民団西成支部の取り組み (金春子、民団西成支部)

⑤民団和歌山中央本部の取り組み (申萬勲、民団和歌山中央本部)

5. ワークショップ (16:10~18:00)



【写真 2】ワークショップの様子

3. 調査の実施方法

1) 質問紙調査

本調査の実施に際しては、民団西成支部が管理する団員名簿（以下、団員名簿とする）の中から、2010年6月現在65歳以上の団員751名を対象として調査を行うこととした。団員名簿には西成区に居住していた、もしくは西成区で仕事をしていた在日コリアンが含まれる。高齢者については名簿に最近の動向が反映されていないため、751名すべてに事前に調査依頼を郵送した上で、転居先不明で返送されたものや既に死亡していると回答があった団員は母数からのぞき、結果706名の団員名簿が対象となった。

西成区には77の町丁目が存在する。団員名簿から確率比例抽出（SPSS15による全ケース5%無作為抽出）によって、25の町丁目を対象とし、対象の町丁目に居住する在日コリアン高齢者438名を対象とした。

対象者について、2010年6月～7月にかけて戸別訪問のうえ面接調査法を用いた質問紙調査を行った。なお不在時には日を変えて2回以上訪問を行っている。

438名のうち、a) 69名が死亡もしくは転居先不明、b) 2名が事前訪問拒否連絡、c) 7名が入院中、d) 152名が訪問時不在、e) 79名が訪問時拒否となり、結果129名の方に回答いただいた。「死亡もしくは転居先不明」を母数から除外すると、結果的に369名が母数となり、回収率は35.0%であった。

調査の実施は、2010年6月～7月の2ヶ月に亘って行った。

調査票内容の概要を示すと下記の通りである（調査票は付録を参照）。

【表4】調査票の概要

地域での暮らし・コミュニティ
健康・医療
介護保険・サービスの利用状況・意志
介護保険サービス以外の利用実態
外国人向けサービスに関する意見
福祉サービスの情報源
学歴
識字状況
世帯収入の現状
家族との関係
暮らし向き
食生活
住まいについて

2) ライフ・ヒストリー調査

ライフ・ヒストリー調査とは調査対象者の「ライフ・ヒストリー（生活史）」を「生活構造」の持続・変容過程として捉える方法である。このような「ライフ・ヒストリー」には、具体的に口述史（オーラル・ヒストリー）、自伝、伝記、日記など様々なものがあるが、最近では口述史の聞き取りが主要な方法となっている。口述史とは、調査者の質問に応える対話形式で調査対象者が生まれてから今日までの歴史を語ってもらうものである。それをICレコーダー等で録音し、その録音した声を逐語的に文字化したものを活用するものである（谷、1996）。

そのようなライフ・ヒストリーの関連用語には、「ライフ・ストーリー」等があるが両方とも現代社会の変容過程における「現代社会の異質化」や「生活世界の多元化」、「ライフ・ヒストリー」の更なる増大、深化の趨勢の中で Bertaux（2003）が「状況のカテゴリー」と呼んでいる社会的なマイノリティに対し、主にフォーカスを当てている。

更に詳述すると、まず上記の「生活構造」とは、「生活主体としての個人が文化体系及び社会構造に接続する、相対的に持続的なパターン」を指し、また生活主体とは、社会の階層構造と地域（コミュニティ）構造とに、家族を通して接続するというパターン」（谷、1996；鈴木、1986）を表している。さらに、生活構造とは、集団参与や社会関係の総体を通して、生活主体が階層構造と地域構造へと、すなわち社会構造へ関与する様式と定義される（谷、1996より再引用）。ライフ・ヒストリー法は、そのような生活主体、つまり本研究ではエスニックマイノリティとしての在日コリアンが社会構造へと関与する様式を捉えるための研究方法である。本研究で対象としているコリアンコミュニティで生活している在日コリアン高齢者の多くは様々な差別や社会的排除を経験しながらも、自らの生活を構築し、同郷者間のネットワークを活かし自らのコミュニティを形成してきた集団である。従って、それらの生活過程が社会的構造と関与するプロセスやメカニズムを説明するのに最もふさわしい研究方法はライフ・ヒストリー法であり、本研究においても調査対象地域の居住者へのインタビュー調査から聞き取ったライフ・ヒストリーを基に分析を進めることにした。調査対象者に対する深層的な聞き取り調査を通じたライフ・ヒストリー法は、調査対象者が生活経験を再構成するナラティブの中で、在日コリアンとしてエスニックコミュニティで生きてきたことがどのような排除につながり、社会参加に影響を及ぼすことになったのか、時間的なパースペクティブやメカニズムの全体関連性を明らかにすることができるのである。なお、調査を行う過程で、現在在日コリアンコミュニティの置かれている大きな不利問題の一つとして、当該コミュニティに居住する居住者の高齢化問題があることを確認できた。現在も無年金問題や貧困に苦しんでいる多くの在日コリアン（1世・2世）が亡くなりつつあるのに加え、3世や4世など若年世帯の地域外への流出も進んでいる。本研究ではそのような現状の問題を踏まえ、高齢化問題と共にコミュニティの瓦解

が進みつつある現状に多くの研究関心を傾倒し、研究を進めることにした。

ライフ・ヒストリー調査は、2010年8月に実施し、その後補足調査として2011年1月～2月に亘って行われた。

調査に応じてくれた方は合計9名で、1人当たり2時間～3時間程度で調査を行った。

ライフ・ヒストリー調査のポイントを示すと下表のとおりである。

【表5】ライフ・ヒストリー調査の質問ポイント

1. 定住化
家族関係、渡日前の生活、移住過程・経路、定住化が始まる時期・定住化のプロセス、土地・住宅購入の契機と動員した資源、自主組織・自助組織など、組織化の経験と経緯、民族団体の形成プロセスとネットワーク、新規流入の有無・その特徴、流出人口の特徴・Uターンは？
2. コミュニティの維持・継続性
教育（調査対象者及び調査対象者の子ども）、民族文化の継承（食事、子どもへのしつけ、規範）、法事・墓（先祖をどのように祀っているか、自分の墓をどこに作ってほしいか、どのように祀ってほしいか）、お祭り、就労・産業（類型・確保経路）、リーダー、規範、自前の自助システム（契＝頼母子講）、解放同盟や他の社会組織とのネットワーク・参加、地元組織への参加（自治会・町内会、その他）
3. 差別経験・防御
渡日時の差別経験（居住、生活等）、就職差別他の差別経験、差別反対集会への参加・連帯、署名運動
4. 祖国との関係
親戚との連絡・往来、帰国
5. 展望

第 I 章 調査対象者の基本属性

全 泓奎

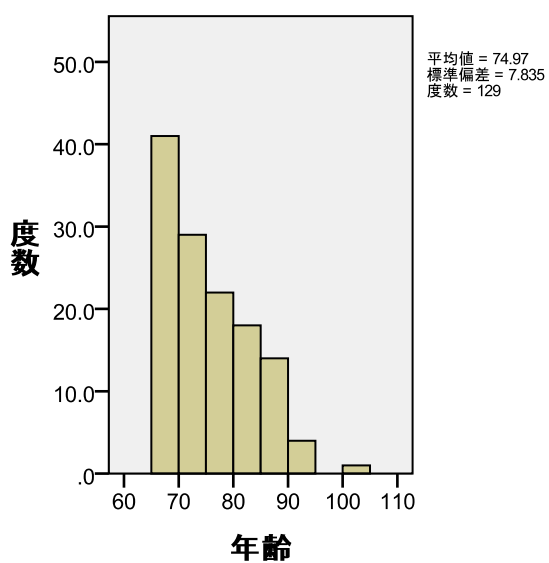
1) 年齢・性別・住所

回答のあった 129 名のうち、男性 53 名 (41.4%)、女性 76 名 (58.6 %)、平均年齢は 74.97 歳である(図 1、2 参照)。

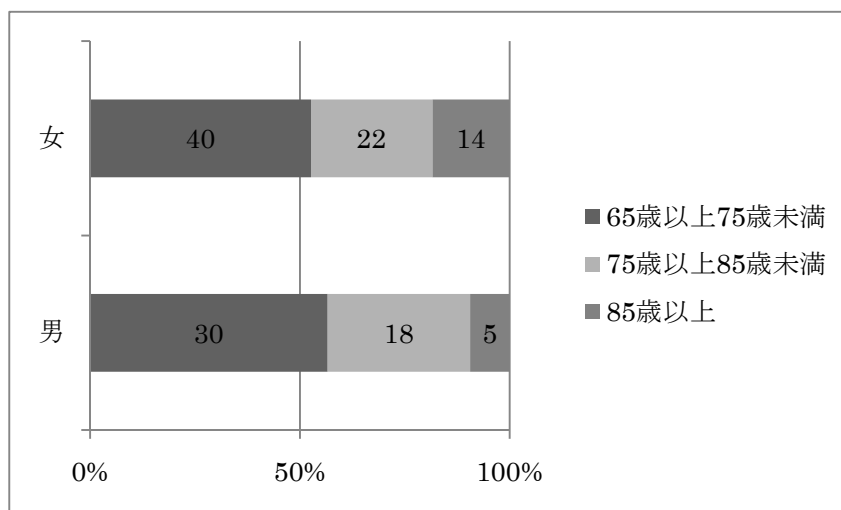
世帯構成は、夫婦ふたり暮らしが最も多く (43 名 (33.4%)) 一人暮らしが 41 名 (31.8%)、子供や孫と同居が 41 名 (31.8%) であった。夫婦ふたり暮らしのうち共に 65 歳を超えるのは 34 名 (26.4%) である(表 1 参照)。

98 年の「人権調査」では男性 75 名 (45.2%)、女性 91 名 (54.8%)、最も多い年齢帯は 40～49 歳代 (39 名 23.5%) であった。一方、2006 年 8 月 21 日～同年 10 月 19 日まで実施された「泉州地域在日高齢者福祉実態調査(以下、泉州調査)⁵では、男性 71 名 (34.1%)、女性 137 名 (65.9%) で、年齢構成は 65 歳～75 歳未満が最も高い年齢帯となっており、本調査と同じような結果を見せている。世帯構成の場合、「泉州調査」では一人暮らしが 75 名 (36.1%)、子供や孫と同居が 71 名 (34.1%)、夫婦二人暮らしで共に 65 歳以上は 49 名 (23.6%) となっている。年齢の相違が見られるのは、年齢のコントロールがされていなかった「人権調査」と異なり、本調査と泉州調査は、65 歳以上の高齢者を中心に行われたためであると推察される。なお、本調査 (31.8%) と泉州調査 (36.1%) では、一人暮らしの高齢者が両方とも全人口の 3 割帯を超えており、当該高齢者の見守り及び安否確認のような支援が必要であると考えられよう。

⁵ 泉州地域の 3 市 1 町(和泉市・大津市・高石市・忠岡町・一部岸和田市を含む)の 65 歳以上の在日コリアン高齢者を対象に実施された調査で、民団泉北支部、総連泉州北支部、民団泉大津支部から提供された名簿を基に行われた。調査対象者数 547 人の中で 207 人から回答を得た。「泉州地域在日高齢者福祉実態調査」実行委員会(社会福祉調査研究会代表中山徹)が調査主体である。



【図 2】 調査対象者の年齢分布



【図 3】 男女別年齢分布区分

【表 6】 調査対象者の世帯構成

	度数	%	有効%	累積%
有効 一人暮らし	41	31.8	31.8	31.8
子供や孫と同居	41	31.8	31.8	63.6
夫婦二人 (どちらも65歳以上)	34	26.4	26.4	89.9
夫婦二人 (どちらかが65歳以上)	9	7.0	7.0	96.9
その他	4	3.1	3.1	100.0
合計	129	100.0	100.0	

【表 7】では、地域別性別年齢分布を示したものである。それによると、65 歳以上が 10% を超えている地域は、3 つあり(旭 3 丁目、長橋 3 丁目、鶴見橋 3 丁目)、中でも鶴見橋 3 丁目 が最も高い割合を見せている。

【表 7】 地域別性別年齢分布

	年齢(階層別)								総計		
	65 歳以上 75 歳未満		75 歳以上 85 歳未満		85 歳以上		合計		度数	%	
	性別		性別		性別		性別				
	男	女	男	女	男	女	男	女			
住 所	旭 3	3	3	1	3	1	2	5	8	13	10.0
	花園南 1	0	0	1	1	0	0	1	1	2	1.5
	橋 3	0	1	0	1	0	1	0	3	3	2.3
	山王 1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0.7
	出城 3	0	2	1	2	0	0	1	4	5	3.8
	松 3	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0.7
	千本北 2	1	2	1	0	0	2	2	4	6	4.6
	中開 3	0	1	1	0	1	1	2	2	4	3.1
	潮路 1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0.8
	長橋 1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0.7
	長橋 3	1	4	3	4	0	1	4	9	13	10.0
	津守 3	2	0	0	0	0	1	2	1	3	2.3
	鶴見 2	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0.7
	鶴見橋 1	3	3	4	2	0	0	7	5	12	9.3
	鶴見橋 2	4	5	1	0	1	0	6	5	11	8.5
	鶴見橋 3	5	2	0	1	1	5	6	8	14	10.8
	天下茶屋 東 1	1	0	0	1	0	0	1	1	2	1.6
	南開 1	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0.7
	南津守 3	1	1	1	1	1	0	3	2	5	3.9
	南津守 4	1	2	1	3	0	0	2	5	7	5.4
	梅南 2	0	2	0	0	0	0	0	2	2	1.6
	梅南 3	4	4	1	1	0	0	5	5	10	7.8
	北開 2	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0.7
	北津守 2	0	2	0	0	0	0	0	2	2	1.6
	北津守 4	3	4	1	0	0	0	4	4	8	6.2
	合計	30	40	18	22	5	14	53	76	129	注

注：小数点以下四捨五入したため総計は必ずしも 100% になるとは限らない。

2) 出身地・渡航年代

出身が日本と回答した方、すなわち在日 2 世は 90 名 (69.8%)、韓国、朝鮮(1 世)と回答した方は 39 名 (30.2%) で、2 世の方が 7 割弱と多くなっている様子が見えてきた。

【表 8】 出身地

	度数	%	有効%	累積%
有効 日本	90	69.8	69.8	69.8
韓国, 朝鮮	39	30.2	30.2	100.0
合計	129	100.0	100.0	

出身地を日本と答えた方の中で、出身都道府県の内訳を詳しく見ると(【表 9】参照)、大阪が 54 名 (41.9%)、兵庫が 8 名 (6.2%)、京都が 4 名 (3.1%) となっている。なかでも大阪市内出身は 47 名と全体の 36.4%である。また、西成区が 16 名、生野区 8 名、浪速区 4 名となっている。そこから類推すると、市内に最も在日コリアン人口の多い生野区、そして西成区と隣接している浪速区の場合、以前より在日コリアン人口の往来があったことが推察できる。

【表 9】 日本国内の出身地(都道府県)

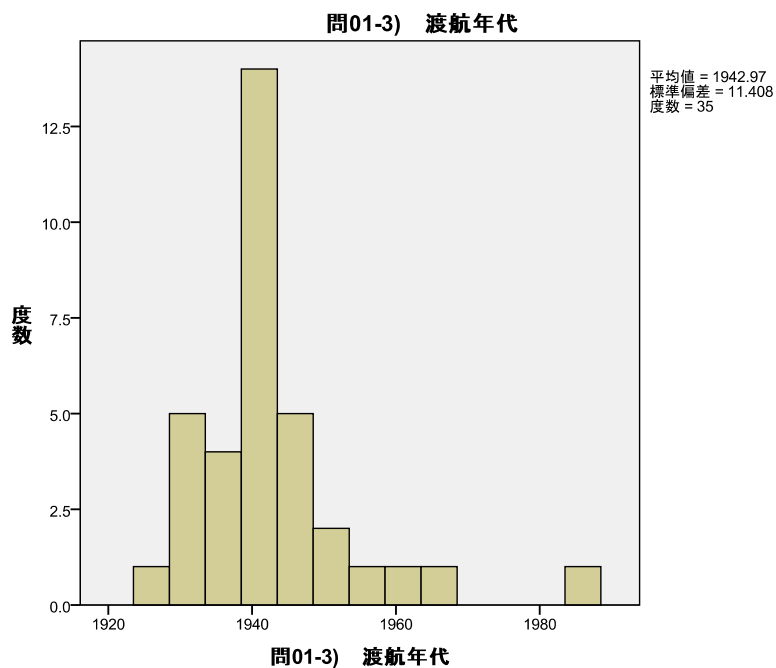
出身地(都道府県)		度数	%	有効%	累積%
有効	大阪	54	41.9	61.4	61.4
	兵庫	8	6.2	9.1	70.5
	京都	4	3.1	4.5	75.0
	広島	3	2.3	3.4	78.4
	東京	3	2.3	3.4	81.8
	愛知	2	1.6	2.3	84.1
	静岡	2	1.6	2.3	86.4
	岡山	1	.8	1.1	87.5
	宮崎	1	.8	1.1	88.6
	埼玉	1	.8	1.1	89.8
	三重	1	.8	1.1	90.9
	山口	1	.8	1.1	92.0
	滋賀	1	.8	1.1	93.2
	秋田	1	.8	1.1	94.3
	新潟	1	.8	1.1	95.5
	奈良	1	.8	1.1	96.6
	福井	1	.8	1.1	97.7
	福岡	1	.8	1.1	98.9
	和歌山	1	.8	1.1	100.0
	合計	88	68.2	100.0	
欠損値	非該当	39	30.2		
	未回答・不正回答	2	1.6		
	合計	41	31.8		
合計		129	100.0		

朝鮮半島出身者の出身地は、済州道が10名で最も多く、慶尚南道、全羅南道、慶尚北道といった内訳となった(【表 10】参照)。

【表 10】 朝鮮半島出身者の出身地

		度数	%	有効%	累積%
有効	京畿道	4	3.1	10.3	10.3
	慶尚南道	8	6.2	20.5	30.8
	慶尚北道	7	5.4	17.9	48.7
	済州道	10	7.8	25.6	74.4
	全羅南道	8	6.2	20.5	94.9
	忠清北道	2	1.6	5.1	100.0
	合計	39	30.2	100.0	
欠損値	非該当	90	69.8		
合計		129	100.0		

次にそれらの人々の渡航年代についてみると、最も早い方で 1926 年に渡航している。1940 年から 1943 年にかけてが最も多く、直近では 1988 年というニューカマーの方が一名いる。



【図 4】 朝鮮半島出身者の渡航年代

【表 11】 渡航年代

	年	度数	%	有効%	累積%
有効	1926-1940年	18	14.0	51.4	51.4
	1941-1945年	10	7.8	28.6	80.0
	1946-1960年	5	3.9	14.3	94.3
	1961年-	2	1.6	5.7	100.0
	合計	35	27.1	100.0	
欠損値	無回答	2	1.6		
	非該当	92	71.3		
	合計	94	72.9		
合計		129	100.0		

3) 学歴(民族教育の有無)

次に教育に関連して尋ねてみると、まず最終学歴は中卒が最も高く 32.8%を占めている(表 7 参照)。その次が高卒(17.2%)、未就学(14.8%)、小学校卒(10.2%)、中学校中退(4.7%)、高校中退・大卒(3.9%)等の順となっている。全体の 42.2%が中卒未満で、厳しい生活状況の中で基礎学歴を身に付けることが非常に困難であったことが推測できる。「人権調査」では、高卒(38.6%)、中卒(28.9%)、大卒(専門学校を含む)(16.2%)、小学校卒(8.4%)、その他(3.6%)の順となっている。「人権調査」の場合、中卒未満は、その他を除き、8.4%であるが、今回の調査と調査項目が異なるため単純比較はできない。

民族教育については、8割強の方が受けたことがないと答えており、日本生まれの2世及び3世が増えていくにつれ、民族教育を受けたことのない層が厚くなっていることが推察できる。

1940年代の後半には子供たちに民族教育を行うため民族学校の活動もあり、現在の2世の中にはそのような教育を受けていたことを考えると大きな変化である(【写真3】参照)。



【写真3】大阪西成第一ウリハッキョ(我が学校)遠足記念(1947年)



【写真 4】 朝鮮人西成小学校卒業記念写真(1949年3月21日と記されている)

一方、「人権調査」では、日本の学校(21.7%)、民族学校(20.5%)、民族団体、教会など(13.3%)、母国の学校(12.0%)、仲間内のサークルなど(5.4%)の順で、独学(9.6%)を除き全体の8割弱(72.9%)が何らかの形で民族教育を経験している。

【表 12】 最終学歴

		度数	%	有効%	累積%
有効	未就学	19	14.7	14.8	14.8
	小学校卒業 (国民学校など小学校に順 ずるような教育機関含む)	13	10.1	10.2	25.0
	小学校中退	16	12.4	12.5	37.5
	中学校	42	32.6	32.8	70.3
	中学校中退	6	4.7	4.7	75.0
	高等学校	22	17.1	17.2	92.2
	高校中退	5	3.9	3.9	96.1
	大学以上 (短大・専門学校・高専含 む)	5	3.9	3.9	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
	欠損値	無回答	1	.8	
合計		129	100.0		

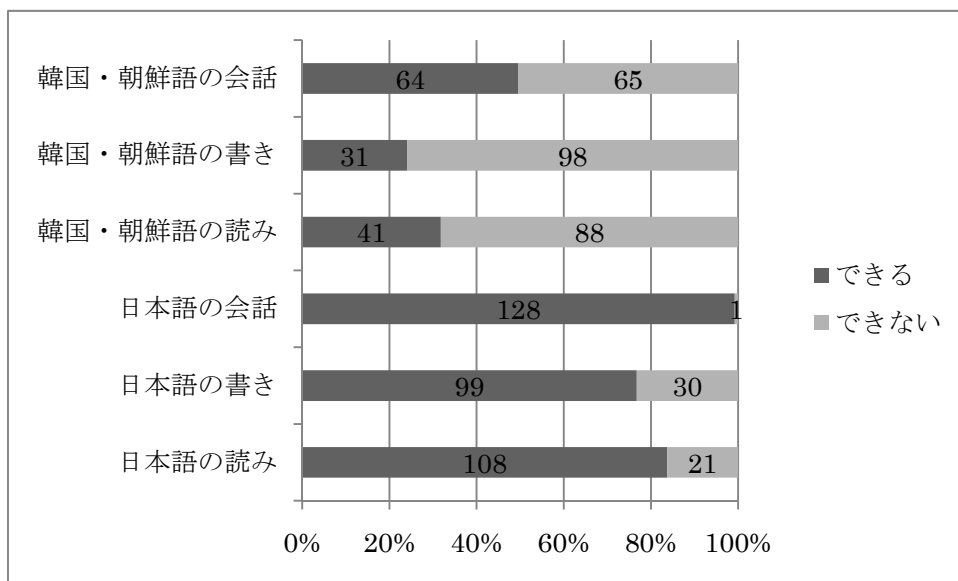
【表 13】 民族教育の有無

		度数	%	有効%	累積%
有効	ある	22	17.1	17.6	17.6
	ない	103	79.8	82.4	100.0
	合計	125	96.9	100.0	
欠損値	無回答	3	2.3		
	非該当	1	.8		
合計	合計	4	3.1		
合計		129	100.0		

4) 識字状況

識字状況に関しては、日本語での会話に関してはほとんどの方(99.2%)が可能であるが「読み」や「書き」ができない方も2割前後を占めており生活関連情報など日本語以外の対応が必要である状況がわかった。(【図5】、【表14・15・16】参照)。日本語の会話ができない方が1名いるが、この方は、前記の渡航年代のところで1988年に来日された方ではないかと推察できる。

その他、韓国・朝鮮語に関しては、読み(31.8%/人権調査12.7%)、書き(24.8%/人権調査10.8%)、会話(49.6%/人権調査10.8%)となっており、高齢ということもあって家庭内やコミュニティの中で韓国語及び韓国文化を継承していたり母国語取得に対する高い関心や意欲により韓国語を勉強してきた状況がうかがえる。まだ多くの方が母国語取得についての意欲を強く持っていることがうかがえる(【表17・18・19】参照)。この結果は、人権調査に比べてもはるかに高い数値を見せている。一方、泉州の調査では、日本語における識字状況を「漢字が読める」(60.6%)と「ひらがなが読める」(24.0%)とで区分して聞いており、どちらも読めない場合も15.4%いると報告している。韓国朝鮮語に関しては、部分的に読めるを含め読める(10.1%)に比べ、読めない(89.9%)の方が高い割合を示している。いずれの調査においても日本語の理解力において2割前後の居住者ができないと訴えており、行政や社会サービスに関する情報へのアクセスにおける言語バリアが無視できない数値となっていることが指摘できよう。



【図5】 識字状況

【表 14】 日本語の読み

	度数	%	有効%	
有効	できる	108	83.7	83.7
	できない	21	16.3	16.3
	合計	129	100.0	100.0

【表 17】 韓国・朝鮮語の読み

	度数	%	有効%	
有効	できる	41	31.8	31.8
	できない	88	68.2	68.2
	合計	129	100.0	100.0

【表 15】 日本語の書き

	度数	%	有効%	
有効	できる	99	76.7	76.7
	できない	30	23.3	23.3
	合計	129	100.0	100.0

【表 18】 韓国・朝鮮語の書き

	度数	%	有効%	
有効	できる	31	24.0	24.0
	できない	98	76.0	76.0
	合計	129	100.0	100.0

【表 16】 日本語の会話

	度数	%	有効%	
有効	できる	128	99.2	99.2
	できない	1	0.8	0.8
	合計	129	100.0	100.0

【表 19】 韓国・朝鮮語の会話

	度数	%	有効%	
有効	できる	64	49.6	49.6
	できない	65	50.4	50.4
	合計	129	100.0	100.0

5) 家族との関係

次に子供との連絡を取っているかの有無について尋ねてみた結果が次の【表 20】である。その結果、84.3%の方々が連絡を取っていると答えている。それは、子供の居住地が大阪府(94.3)が多いという地理的近接さによるものではないかと推測できる。子供と連絡を取っていない・子供がいない世帯(9.4%)も1割弱いることも見逃してはならない数値である。

【表 20】子供と連絡の有無

連絡有無		度数	%	有効%	累積%
有効	とっている	107	82.9	84.3	84.3
	とっていない	6	4.7	4.7	89.0
	子供がいない	6	4.7	4.7	93.7
	別居している子供がいない	8	6.2	6.3	100.0
	合計	127	98.4	100.0	
欠損値	無回答	2	1.6		
	合計	129	100.0		

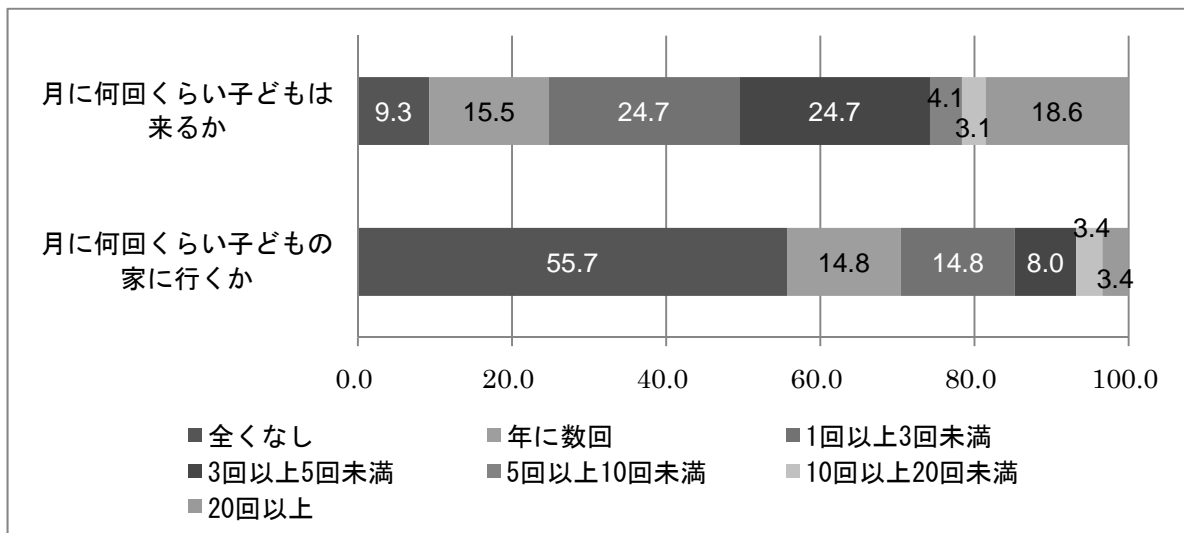
【表 21】子どもの住まい（都道府県）

都道府県	度数	%	有効%	累積%	
有効	山口	1	0.8	0.9	0.9
	神奈川	1	0.8	0.9	1.9
	大阪	100	77.5	94.3	96.2
	東京	1	0.8	0.9	97.2
	富山	1	0.8	0.9	98.1
	兵庫	2	1.6	1.9	100.0
	合計	106	82.2	100.0	
欠損値	-1	2	1.6		
	999	21	16.3		
	合計	23	17.8		
合計	129	100.0			

次に交流の頻度を見てみると、子どもの家に行く頻度で、「全くなし」が55.7%で最も多く、その次に年に数回と月に1回～3回未満が各々14.8%を示した。反対に子どもの訪問頻度を見ると、「1回以上3回未満」と「3回以上5回未満」が24.7%となっており、「全くなし」も1割弱ある等連r区は頻繁にとっけていても、実際に子供が訪ねてくる頻度はそれほど高くないのうかがわれる（【表17】・【図5】参照）。

【表22】 子供世帯との交流頻度

	月に何回くらい子どもの家に行くか		月に何回くらい子どもは来るか	
	件数	割合	件数	割合
全くなし	49	55.7	9	9.3
年に数回	13	14.8	15	15.5
1回以上3回未満	13	14.8	24	24.7
3回以上5回未満	7	8.0	24	24.7
5回以上10回未満	0	0.0	4	4.1
10回以上20回未満	3	3.4	3	3.1
20回以上	3	3.4	18	18.6
合計	88	100.0	97	100.0



【図6】 子供世帯との交流頻度

第Ⅱ章 世帯収入の現状

全 泓奎

世帯収入の現状をみると、一ヶ月の収入が10万円を切る世帯が41名（36.6%）、4割弱と、かなりの割合を占めている（【表23】参照）。「平成21年 国民生活基礎調査の概況」（大臣官房統計情報部社会統計課、2010）によると、2008年の日本の全世帯の1世帯当たり平均所得金額は547万5千円である。その中で、高齢者世帯の1世帯当たり平均所得金額は297万円で、これを月に単純に割ってみると、247,500円で、西成の場合、それにははるかに届かない数値となっていることがわかる。次に、所得の種類別状況をみると、（【表24】）「自分が働いて得ている収入」（29.0%）が最も高い割合を見せており、その次が「自分の公的年金」（24.2%）、「子供や孫からの金銭的支援」（23.4%）の順となっている。また厳しい家計事情を裏付けるように15.3%の方が「生活保護」を受給している。その他に1世の方の中には「在日外国人無年金高齢者に対する給付金」を受けている方も2名（1.6%）いる（【表24】参照）。

【表 23】 の一ヶ月の平均世帯収入

		度数	%	有効%	累積%
有効	5万円未満	14	10.9	12.5	12.5
	5万円以上10万円未満	27	20.9	24.1	36.6
	10万円以上15万円未満	20	15.5	17.9	54.5
	15万円以上20万円未満	20	15.5	17.9	72.3
	20万円以上25万円未満	7	5.4	6.3	78.6
	25万円以上30万円未満	10	7.8	8.9	87.5
	30万円以上40万円未満	1	.8	.9	88.4
	40万円以上50万円未満	2	1.6	1.8	90.2
	50万円以上70万円未満	2	1.6	1.8	92.0
	わからない	9	7.0	8.0	100.0
	合計	112	86.8	100.0	
欠損値	無回答	17	13.2		
合計		129	100.0		

【表24】所得の種類別状況

	度数	%
自分の公的年金	30	24.2%
配偶者の公的年金	14	11.3%
私的年金（郵便局・生命保険など）	5	4.0%
自分の貯蓄や株の配当金	18	14.5%
配偶者の貯蓄や株の配当金	0	.0%
不動産などの財産収入	9	7.3%
自分が働いて得ている収入	36	29.0%
配偶者が働いて得ている収入	9	7.3%
子供や孫からの金銭的支援	29	23.4%
生活保護	19	15.3%
在日外国人無年金高齢者に対する給付金	2	1.6%
その他	3	2.4%

金銭的な所得以外に現在の暮らし向きについて尋ねてみると、「やや良い」を含め「良い」と答えている方が37.1%で、約6割強の方が「苦しい」と答えている等、生活全般が厳しい現状であることがわかる。

【表25】暮らし向き

		度数	%	有効%	累積%
有効	良い	9	7.0	7.3	7.3
	やや良い	37	28.7	29.8	37.1
	やや苦しい	33	25.6	26.6	63.7
	苦しい	45	34.9	36.3	100.0
	合計	124	96.1	100.0	
欠損値	無回答	5	3.9		
合計		129	100.0		

次に現在、最も困っていることは何ですかという質問に対し、本調査が65歳以上の高齢者に対し実施していることから「本人や配偶者の健康のこと」を挙げている方が37.2%と最も多くいることが分かる。その次は、上記の所得の現状を反映しているかのように「経済的なこと」を挙げている(28.9%)。「頼れる人がいないこと」が0.8%と少なくなっているのは、地域内の同胞間の交流を含めた近隣関係や家族との交流等がまだ機能していることを意味しているのではないかと推察される。

【表26】 現在、最も困っていること

		度数	%	有効%	累積%
有効	本人や配偶者の健康のこと	45	34.9	37.2	37.2
	経済的なこと	35	27.1	28.9	66.1
	頼れる人がいないこと	1	.8	0.8	66.9
	何もない	32	24.8	26.4	93.4
	その他	8	6.2	6.6	100.0
	合計	121	93.8	100.0	
欠損値	無回答	8	6.2		
合計		129	100.0		

次に日常的な食生活についてたずねてみると、「自炊」が68.0%と最も高く、「家族に作ってもらっている。」(25.0%)が次に多い項目として挙げられた。その他、7.1%の方は、店で総菜を買ったり外食をすることで食事を済ましていると答えている。

【表 27】 普段の食事はどのようにされていますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	自炊をしている。	87	67.4	68.0	68.0
	店で売っている惣菜を買ってく。	7	5.4	5.5	73.4
	外食をしている。	2	1.6	1.6	75.0
	家族に作ってもらっている。	32	24.8	25.0	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
欠損値	無回答	1	.8		
合計		129	100.0		

第三章 西成地区コリアンコミュニティの形成と変容

川本 綾

1. はじめに

本章では、西成区のコリアンコミュニティ（以下、コミュニティ）の形成と変容過程及びコミュニティにおける在日コリアンの生活構築過程に焦点を当て、定住化にあたってコミュニティがどのような役割を果たしたのかについて考察する。2010年現在、西成区には約5,000人の在日コリアンが生活している。彼ら・彼女らやその家族がなぜ居住地として西成を選び、この地で生活することを決めたのか、また利用できる社会資源が極めて限られていた中で家庭を築き、生活を営む上で、彼ら・彼女らの支えになっていたのは何であったのか、この点に関してはまだ明らかになっていない部分が多い。コミュニティと生活過程の構築について考察し、在日コリアン住民の実像をコミュニティとの関連において捉える視点は、今後当該コミュニティの再活性化を図る上でも欠かせない。

コリアンコミュニティに関連する先行研究として次のものがあげられる。戦前の済州島出身者の移住及び定着過程に関する研究としては金（1985）、杉原（1998）等が、同じく生野区の在日コリアンの民族関係や生活構造に関する研究として谷ほか（2002）が、また、戦前に被差別部落に定住した在日朝鮮人に関する研究として、河（1997）、高野（2009）等が、東アジアの労働市場の構成員として在日朝鮮人を捉えなおした研究として、西成田（1997）等である。

そのうち河（1997）は、韓人移民労働者が京阪地域の産業発展の需要に伴い、低賃金、長時間労働の底辺労働力として吸収され、同じく底辺労働者だった部落民と労働面で競合していく過程について解明した。西成田（1997）、は日本の資本主義の発展と「帝国」主義の拡張に伴い在日朝鮮人の就業構造が変容を遂げていく過程を、主要地域別に明らかにしている。しかし、実際にそのような就業構造が、在日コリアンの受け皿となっていた集住地コミュニティや移住者自身の生活とどのような関係があったのかについては不透明な部分が多い。西成の場合、在日コリアンの従事していた職業は皮革産業とボルト・ナット等金属加工業に大きく二分され、前者の場合は「部落産業」ともかかわりが深い。コリアンコミュニティが形成されていく中で、当時就労や住まい、ネットワークを通じた生活の構築がどのようになされてきたのか、またそれは産業構造の変化によってどのように変容していったのかを明らかにするため、先行研究の分析と同時に、西成区に戦前より居住している在日コリアン住民に対するライフヒストリー調査を行った。ライフヒストリー調査を実施したのは、コミュニティの成り立ちについて経年的な把握が可能である点、異国で定住するという点についての様々な思いをよりくみ取ることが可能な点を重視したため

である。ライフヒストリー調査にあたっては、今回の質問紙調査の回答者の中から、より詳しい聞き取り調査に応じてくれる方を募った。質問紙調査に引き続き民団西成支部の支援を受け、2010年8月から2011年1月の間に、西成に長期間居住して地域の事情に詳しく、皮革産業、ボルト・ナット製造業等の地場産業に携わった経験を持つ9名より話を聞くことができた。9名のうち男性が4名、女性が5名、一世が4名、二世が5名だった。

2. コミュニティの形成と変容過程

1) 1920年代～終戦まで：コミュニティの形成

西成の在日コリアンコミュニティの形成時期についてはまだ調査中であるが、外村（2004）によると、1930年代には西成区北部に朝鮮人経営の工場、商店、各種サービス業が集中しており、1930年にはすでに7,128人が西成区に居住していた。質問紙調査によると、西成に在住する在日コリアンの中で済州島出身者が25.6%と一番多い。1923年の大阪・済州島航路の開設後、在阪朝鮮人数が毎年ほぼ1万人前後ずつ増加している（佐々木,1996:165）点を考慮すると、1930年代以前にはすでに朝鮮人が西成に流入し、コミュニティが形成されていたことがうかがえる。「大阪府警察統計書」によると、1932年には約1万人、1937年には1万7千人を超える朝鮮人が西成に居住しており、西成でも朝鮮人の急激な増加がみられていた。

また、「(西成で朝鮮人がナット業を始めたのは)今からやったら80年程前。」(H氏)、「(徴用で来た朝鮮人の中で軍靴の製造を)軍隊から請け負って、それをやっとなった人が、2、3人ぐらいおったわけですね。それが(朝鮮人が皮革に入った)歴史ですね。」(I氏)という話を考慮すると、皮革産業やナット製造業に朝鮮人が流入し始めたのもこの頃と思われる。どちらの業種も当時朝鮮人が起業したのではなく、地場産業に外部から移住してきた朝鮮人が入っていく形となっている。西成でナット業が興った経緯については、次のような話があった。

「(西成にナット産業ができたきっかけは?)今宮工業の裏に、(日本人で)マツモトという人がおってね、その人が大正の終わりごろドイツに行っってね、ドイツからこの機会を、技術を習うてきて、この機械をもらってきたん。それが一番はじめにはじめた人や。」(Bさん)

【表1】地域別朝鮮人一覧表 (1930年国勢調査)

地域別	人数	人口比割合 (%)
北区	5,184	6.7
此花区	5,619	7.3
東区	2,465	3.2
西区	703	0.9
港区	8,984	11.6
天王寺区	1,645	2.1
南区	1,525	2.0
浪速区	5,128	6.6
西淀川区	4,943	6.4
東淀川区	8,679	11.3
東成区	22,044	28.6
住吉区	3,077	4.0
西成区	7,128	9.2
合計	77,129	100.0

資料：大阪市社会部労働課『朝鮮人労働者の近況』（『在日朝鮮人関係資料集成』第5巻所収）より

ナット等の製造では 1930 年代から 40 年代にかけて大阪は全国生産額の 40%を出しており、軍需産業でもあったため需要が高かった。皮革産業については、河（1997）によると、被差別部落への韓人移住労働者の流入に伴い、部落民と韓人移住労働者が労働をめぐる競合関係にあったという。しかしなぜこの二つの業種に多くの朝鮮人が入っていったのだろうか。その点について、インタビューの中で次のような話があった。

「(ナット製造は) 日本人は、とにかく油でな、真っ黒やし、汚いからな、こんなんやったら満州行って百姓やったほうがええぐらいやいうぐらいな、汚い仕事やし、危険やし、3K の仕事やったから、韓国の人がようさんやったんや。」(B 氏)

「皮を扱うということ自体は、この辺は。それでハングクサラム（韓国人）にしても、チョソンサラム（朝鮮人）にしても生きていくためにね、それしかないんですよ。仕事が。そやからほとんどの人が携わったんですよ。」(D 氏)

上記からは、当時朝鮮人が従事できる仕事が非常に限られていたため、日本人が嫌がる労働条件の悪い業種に入りこみ生活の糧を得ていたことがうかがえた。しかし、西成で特にこの二つの業種に朝鮮人が集中した背景には、次項でみる強い「同郷ネットワーク」があった。

2) 終戦～高度経済成長～1990 年代まで：生活基盤の構築と定住

(1) 移住経路と就労

今回の調査対象者のほとんどが、終戦後から高度経済成長の時期に西成に流入している。

「(西成に全羅道からきた人が) ようけおったんです。親父と同じ村の人がね。20 件ほど」(I 氏)、という話にあるように、移住の経路は大多数が親戚や知人、結婚相手を初めとする「同郷人」を通じてであり、移住の過程で同郷ネットワークが重要な意味を有していたことがわかった。

調査対象者の移住の動機は、女性の場合は婚姻、男性は就業だった。仕事の獲得に関しても、同郷ネットワークが強力に作用していた。その結果、同郷の先住者を頼る形でナット製造業と皮革産業に朝鮮人が多数入りこんでいき、前者は慶尚道出身者が、後者は済州島や全羅道出身者が多いと言われるほど出身地による業種の明確な区分が存在していたことがわかった。

「(ナット業に従事されていた方たちは) 慶尚道サラム（人）が多い。ほんで皮革関係済州島サラムが多

いし、この辺では。せやからそれもつてつてでね。」(B氏)

「(皮革の仕事をして) 独立して、その独立して自分が自信をもったから、こっちの人、(故郷の) うちの親戚の人、汽車賃全部作って呼んで、ようさん働いていました。それで覚えた人よそいく(独立する) しね。」(Fさん)

【表 2】 大阪市長橋小学校児童の朝鮮人父親の就業産業

	皮革産業	重工業	軽工業	建設業	その他
朝鮮人父親の就 く産業	44人 (44.0%)	14人 (14.0%)	なし	3人 (3.0%)	39人 (39%)
日本人父親の就 く産業	97人 (18.9%)	107人 (20.8%)	18人 (3.5%)	43人 (8.3%)	248人 (48.5%)

資料：部落解放同盟大阪府連組織局部落解放研究所編集部,1974

なお、ナット製造業に長年従事していた B 氏によると、「道路を隔てて北側は皮革の人が多く、南側はナットが多い」地域があるという。表 2 は、B 氏が言うところの「北側」が学区に含まれる西成区内の小学校児童の父親の職業を表わしたものである。日本人の父親の職業をみると、皮革産業と重工業がそれぞれ 18.9%、20.8%と一定の数値を示しているが、一つの業種に際立って多くの人に従事しているわけではない。しかし、在日コリアンの父親の場合は皮革産業が 44.0%と全体の中で非常に高い数値を示している。ここからは、もともと皮革産業が日本人の被差別部落住民の地場産業だったにもかかわらず、1970 年代までには朝鮮人がむしろ多く従事するようになっていたこと、また在日コリアンの中で、業種によって居住する地区にまで偏りが出ていたことが推察される。

また、ナット製造業、皮革産業共に、日本の高度経済成長に伴い好景気を迎えている。インタビューによると、ナット業の場合、戦後すぐにナットを製造する会社が 70 件に上り、その後朝鮮特需によって誘発された 1950 年代中盤の神武景気の頃が最盛期だったという。

「日本のねじ関係の 6 割は朝鮮人、韓国人関係がやとった。私の知ってる範囲ではねじ関係は、ナット関係の人は帰ってない、北朝鮮に。日本が高度成長やっていく過程においてね、ねじというのはどないしても産業の一部として必要やからね。せやから帰ってもらったら困るいうん。」(B氏)

「その T さんのところあるやろ、親がナット屋やとって、日本一やってん。日本一の、60 人ぐらいあったのな。その当時の日本の経済力からいうたら 60 人のナットでも、ナット工場というのもね、生産量いうたら日本一やってん。」(B氏)

調査対象者はすべて戦後すぐから高度経済成長期にかけて家庭を持ち、子育てをしている。「外国人」であることで様々な社会保障から排除され、不当な差別や不利益にさらされながらも、男女関係なく必死で働き、子どもを育て、家庭生活を維持してきた様子が見えがえした。下の A 氏は、夫が病に倒れた後、夫の仕事の一部を引き継いだ。

「(イミテーションのわに革) 革は広げてあるからでこぼこでしょ、それをさしをね、4 尺くらいのさしを当てて、体重で押さえて切らなければだめなの。包丁で。(女にはできないって言われたけれど) 私やり遂げたから、びっくりした、自分でも。ちょっとでも動いて狂うたら、もう裁断気にかけてたら、斜めになったらもうだめでしょ。私やり遂げたあとね、階段上がれないし、もう体中の筋肉を使っただけかしらんけど、うち 2 階でしょ、もうすべて上がり下りせないかんに階段ほうて一段ずつあがらな、そんなこと言うてもしかたないから一切口に出さない」(A 氏)

今回の調査対象者で皮革産業に従事していた人の場合、仕事の内容は革のなめし、アイロン、裁断、甲革と比較的多様だった。なめしのエナメル加工を開発した方の子孫や、収入には結びつかなくとも、さまざまな皮革の技法を開発・研究した方もおり、在日コリアンの皮革産業への貢献も見て取れた。

「革のなめしですわ、そのなめしやってるときにね、エナメルって聞いたことあります？エナメルの方法を考えたのがうちの親父という話ですわ。ほんで一躍大金持ちになったんですなあ」(F さん)

「昔はね、うち、主人がね、人ができないことしたの。もう家のこととか、収入考えんと自分研究に没頭してたのよ。よそ働いてたけど、なんとか革に模様入れられないかっていう研究を、ひたすらしてね。で、何にもほかのこと考えられない。もうそれ一筋にして、できるようになったんです。すごい、革に乗せる、塗料、をいかにしてね、模様を作るかとか。で、ミシンで縫うたら手間かかるけど、ミシンのような細工がね、筆、色一本でできないかとかね。」(A さん)

その他に従事していた仕事として、土方の人夫出しや、古鉄業などが見られた。

「またそこでも飯場ね、みな、もう仕事それしかあれへんかったもん。それでもう 7 回ぐらい飯場回したりして、まあいろいろいろいろやってきましたわ。そないしてるうちに。(何人ぐらいいたんですか) もう 30 人ぐらいかな。うん、もういろいろ難波のね、難波のあそこの、あれはスケート場かな、何場かな、あそこもみな仕事行ったよ。早い、仕事ね、飯炊きにも行ったり、もういろんなところ行ってきました。もう長野とか、長野県とか、もう森之宮とか、もう守口とか、奈良とか。いろいろほんまにね。」(C さん)

「戦争がまたあの、あれ何の何かしらんけどね、この鉄とかそんなんが売れるようになりだしたんや。それでこの鉄とか、掘ったら、空いた土地掘るとね、赤い土が出てきたん、昔その土も売れたんよ。そないしているうちにもう鉄とかなんやかんや拾ったりもうなんやいろいろしながら、食べてきたんいうんかな。そんな韓国人仕事あれへん。ほんまに、どないして生きてきたんかな。」(Cさん)

(2) 住まい

時代は前後するが、戦前に下層労働に従事し、日本人より賃金の低かった朝鮮人移住者が、劣悪な住居に密住し、住居費を浮かせることで本国に仕送りしたり、ぎりぎりの生活を営んでいたことが明らかにされている。(河,1997)

今回の調査の中でも、最初はバラックのような住居から始まり、生活が安定し、子どもが増えていく中で、より広い家に住み替えをしたり、リフォームをして居住空間や自分にとって大切な場所を確保しながら自力で住環境の改善を行ってきた様子がうかがえた(【写真5】参照)。

皮革産業に携わっていた人の場合は、家内工業であるため、1階を住居にして、2階を仕事場に行っているケースがほとんどだった。



【写真5】1950年代後半の西成区の様子。右後方にバラック小屋が見える。調査対象者提供

「家もほんま、便所もない、水道もない、表いってかんてき火をおこして、また2階行って、このくらい4畳半ひとつかりて、子ども二人産んで、(住んでいる所は)Nだったんですわ。家賃も一番最低の、まっすぐ建たれへん、その時1000円やから、いっちゃん安いところ。」(G氏)

「はじめ（西成に）嫁に来た時は、どっかの家の韓国人の家だったんですけど、離れを借りて住んでいましたけど、何年かしてから、今息子が仕事して住んでるんですけど、そこを借りて家賃ですけど、2階が空いてるからっていうて。廃材でたてたようなね、家なんですけどそれでも。」（Aさん）

「はじめはね、バラックから。ほんで私らもう人に使ってもらおうと思うたら2階あげたらええ、そこまではうちのお父さんとね。そのときはね、この3階だけやってんや。子ども寝る場所がなくなってきたんよ。今度、ほんでね、もう私がやめる言うたんよ、この（信仰している宗教の）会場を。ほんなら息子がね、やる気があんねんやったらもう一回な、やり直すいうてくれて、ほんで4階あげてくれて」（D氏）

（3）コミュニティ内外でのネットワーク及び民族関係

生活を構築する上で重要なのは、近隣、同業者、同郷者間などコミュニティ内のネットワークと、日本人や日本社会との関係など、コミュニティ外との関係である。また女性の場合は、ジェンダーに基づく様々な制約のため、男性とはまた違うネットワーク関係が存在している。次にそれぞれについて見ていく。

< 同胞同士の関係 >

移住の過程、就労で見たとおり、他人との関係性において「同郷」であることが大きな要素となっていることが確認された。また、結婚相手に関しても、話を聞いたほとんどが同郷の人を親族や知人（同郷人）に紹介されて結ばれている。一方、調査中、「違う国の人」という表現が何度か出てきた。濟州島と本土の人々の確執や差別については濟州島出身者が多い集住地域の形成要因としてよく言われるところであるが、（河、1997）「国」の違いと表現するところから、西成においても特に濟州島出身者と陸地出身者の溝が深いことがわかった。

「私らユクチ（陸地）サラム言うたらわかるでしょ、陸地の人ということ。年寄り（同居していた姑）にはもう依然として、で、濟州島の人ね、向こう言うたら言うたらあれですけど、もうおばあさんたちの意識の中では結婚するんだったら、同じユクチサラムどうしね、そういうね、偏見があったんですよ。」（Dさん）

一方、教会も同胞同士の交流の場として重要である。西成には在日大韓基督教会「大阪西成教会」があり、多くのコリアン住民が通っていた。特に一世の女性の場合、ままならない生活の唯一の心の拠り所でもあったという。また二世にとっても、母親の教会の仲間

を通じて結婚相手を紹介してもらったり、起業の際にノウハウを教えてもらったりと、異国で同胞同士をつなぐ機能を有していた。

「日本で母がクリスチャンになったのは、日本で。せやからつらかったから、逃げ道だったんでしょうね、心の、癒しに、その、口に出せない立場でしょ。昔は嫁、姑いうたらすごいでしょ。皆さん。非人間的な。すごいじゃないですか。かまどでね、母がご飯炊いてるときに、聖書持ってかまどしてたら、父で横しゃがんでね、(文字を) 教えてました。」(A氏)

「(キム子屋をはじめたとき) Mさんいうて市場の中でね、昔からやっておられる。そのお母さんも教会来てはって、(敬虔なクリスチャンだった) お義母さんと親しい人やからね、その人に、はじめこれはこうして作りなさいいうて、ちょっと手ほどきを受けたんですけどね。」(D氏)

同胞間の互助関係に関しては、同業種間では生存競争が厳しく、家族であっても親しく助け合うという雰囲気ではなかったという声はいくつか聞かれたが、事業資金のやりくりや起業に際し、同胞間の信頼関係に頼っている姿も見られた。

「(頼母子があったおかげで) わたしは人に銀行行って頭下げなくても、知り合いの人に行って、お金かしてっていうこともいわずにね、みな協力してくれたおかげで、わたしはほんまに乗り越えられたと思います。」(D氏)

「ここ (F氏) の先代に皆世話になってるねん。工場を始める時に先に前借を借りるわけや。それで仕事をして、金ができたら返済していく。だからしやすかってん。銀行から借りたんじゃ、できへんよ。貸してくれへんもん。」(H氏の友人)

<日本人との関係>

日本人との関係については、漠然とした難しさを感じている人が多かったものの、日本人と全く交流がなかったわけではない。町内の自治、就労、信仰等を通して日本人との結合関係が築かれている様子がうかがえた。特に就労面では、当初は同郷ネットワークによるリクルートがあったものの、定住が進むにつれ、同胞や同郷にこだわらない傾向が見られるようになっている。

「わりかた町会で長いこと 20 何年間やってきましたけどね、もう会長さんは日本の方でまわりをサポートして、実質主人が一生懸命するからその方もあれですが、この西成って、M 地区でね、8 町会いうたらもうすごいみんな評価してくれはってね、そういう点ではほんとうに (夫を) 誇りに思っていますけど。」(D氏)

「(弟子は) 日本人もおるし、韓国人もおるし、いろんな人がおるわ。(韓国人じゃなくても) 誰でもいいねん。生活が苦しかったら、一生懸命早いこと覚えて、早いこと一人でしたら金儲けできると。私はそういう心理だったからね。人はよく来ますわね。「教えてくれ、教えてくれ」と。」(I氏)

<女性とコミュニティ>

今回話を聞いた方は、女性も含めてみな懸命に仕事をしてきた経験を持っているが、定住化過程で女性は男性に比べて生活や行動範囲がコミュニティ内部に制限されている傾向が見られた。皮革産業の場合、零細の家内工業がほとんどで、自宅の2階を仕事場に行っていることが多く、一緒に働いている人も家族か同胞の人であることが多い。また一世の特に女性の中には、文字を知らないためコミュニティの外に出にくいという事情もあった。

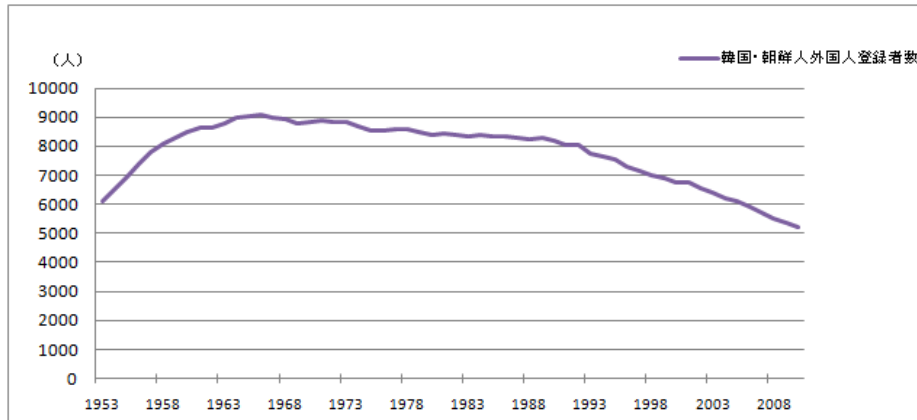
下記のGさんは、識字学級を通して初めて外の世界を知った。Gさんは一世だが、韓国にいた頃から働きづめで、西成に来てからも、子どもが小さい時は背中におぶい、夜中の12頃まで皮を引っ張り裁断していたという。韓国では「女が勉強してどうするか」と言われ、日本に来てからは「仕事仕事」で勉強する時間などなかった。家族を支え、税金も一度も滞ることなく納め、子どもに教育を与えて独立させ、夫を見送ってようやく文字を覚える機会を得た。「人間外に出なんだらあかん」と何度も話してくれたのが印象的だった。

Aさんは、小学校の卒業式まであと何日かという時に大阪大空襲に遭い、卒業証書を受け取れなかった。女性にも教育をという父親の教育方針の下、結婚前は文字に親しむ生活を送ってきたが、結婚後は夫の理解が得られなかったこともあり、新聞を読むことさえ難しかった。夫が病に倒れてからは、「働いて食べるのは当たり前」という気持ちで、皮以外にも様々な仕事をしてきた。近所の人が見かねて生活保護を紹介したが、その時初めて「生活保護」という言葉や制度を知ったという。また、色々な仕事に就き、長期間働いてきたにもかかわらず年金のことを知る機会がなかった。「どっかに働きに行っていたら」という言葉からは、仕事も含めて主にコミュニティの内側で過ごしてきたことがうかがえる。また、貧困や儒教的な考え方により教育を受ける機会を与えられず、結婚後も用事もないのに外出するなど姑から厳しく言われたと話す人もいた。これは、女性が異国に定住するにあたっての複合差別の存在を示唆している。

「(日本社会は) こんな差別ばっかし、してると思ったんですよ、自分は。言葉もわかれへんから、ある人が昔ね、自分の親が「朝鮮人と沖縄人とは絶対友達したらいかん」言われたいうて。やあ、そんだけ差別があるのかなあ思って・・・(読み書きに行き始めて) 外出てみたらそんな差別もないし、日本の国って親切。人間、外に出てみなきやいけません - 中略」(Gさん)

「私年金もね、ないに等しいんですけどね。年金なんか考えてなかったの。どっか働きに行っていたらね、きっと知識が入ったと思うんです。」(Aさん)

3) 産業構造の変化と現在：住民の高齢化とコミュニティの変容



資料：『大阪市統計書』（第41回～第98回）より筆者作成
【図7】西成区の韓国・朝鮮人外国人登録者数の推移

全盛期には70件ほどあったナット製造工場も、中国からの安い製品の流入に打撃を受け、現在は10件を数えるほどに減っている。若年層が3Kの職場を嫌う傾向もあり、後継者にも不足する状況である。一方、皮革産業も安い外国製品の打撃を受け、1990年頃からは斜陽の一途を辿っている。地元での就労の場を失った若年層が地域から流出し、現在は地域産業の停滞とコミュニティの高齢化が進んでいる。それに伴い、コミュニティの役割にも変化が起きている。ナット関係者は会社組織に所属することが多いため年金加入率が比較的高かったが、皮革産業は基本的に零細の自営業であることに加え、国民年金制度の不備もあり、無年金の場合が多い。その場合子どもに生活費を頼るほかないが、近年の不況の影響で仕送りを受けるのも難しく、経済的に逼迫している様子がうかがえた。特に医療費負担が大きいことがわかった。コミュニティとしては、住民の高齢化に対応し、民団西成支部がコミュニティ高齢者を対象にデイケアセンターを運営したり、韓国ドラマのDVDをレンタルしたりと、コミュニティ住民の民族性に考慮したサービスを行っている。

「西成もナット屋少なくなりましたよ。靴屋やってる人も、悪いけどもう戸を閉めたらいいのに、金使って借金だらけの人が多いいんちゃう？朝鮮人で今商売ええやつ何もないんちゃう？焼肉屋もだめでしょ。パチンコ屋もだめでしょ？靴屋もあかん、ナット屋もあかん、弁当屋もあかん。」(I氏)

「なんや、わたしら子ども時代より環境は悪なったこの辺は。もう道でけんかしたりね。一時はもう、鶴見橋通りのシャッターの前で寝泊りしてる人ぎょうさんおったもん。ちょうど、長居公園で泊まってる人、ようもめとったでしょ。そんなんいたりな。長男のほうは家買うてね、(西成を出て)向こう行くね、言うたよ。」(B氏)

3. まとめ

以上を通じ、次の点が確認された。①西成における朝鮮人コミュニティは 1930 年代には既に形成されていた。②同郷ネットワークが発達しており、移住、就労、結婚など、生活の根幹にかかわる移動が、同郷人を介して行われることが多かった。またそれに伴い、特定の業種に特定の出身地の人固まり、空間的にも住み分けがなされるという現象が起きていた。③定住化が進む中、日本人とも地域の自治会、宗教、就労等を通じて交友関係を結んでいることがわかった。また同胞間では経済的な互助関係が存在していた。④女性の場合は特にコミュニティの外部との接触が途絶えがちで、定住化における複合差別の存在がみうけられた。⑤地域産業の地盤沈下が進む中で、在日コリアン住民の高齢化が進み、制度的な不備により年金をもらっていない場合は、特に経済的に非常にひっ迫した状況にあることがうかがえた。

西成に移住してきたコリアンは、日本社会による制度的、民族的な差別の中で、同郷ネットワークを通じて就労し、生活の糧を得て定住への道を歩んできた。コミュニティはコリアンの定住化に大きな資源を提供した一方で、コミュニティ外に接点を持ちにくい女性をコミュニティ内に囲い込み、コミュニティの外に存在する利用可能な資源へのアクセスを遮断してしまうという逆効果をももたらした。この点は、近年急増している定住化する外国人やその集住コミュニティの今後を考える上で大きな示唆点を持つ。住民の高齢化が進む中で、定住にあたってコリアン住民を支えてきたコミュニティがどのような役割を果たしているのか、また住民自身はどのようなコミュニティの在り方を望んでいるのか、今後とも考察を続けていきたい。

第IV章 西成に暮らす在日コリアン高齢者の生活行動

本岡拓哉・平川隆啓

1. はじめに

本章は、西成区に暮らすコリアン高齢者がいかなる生活を送っているか、かれらの外出行動の分析結果の概要である。ここでは西成という地域がいかに高齢者の外出行動や生活に関係しているかという点にも注目している。これまで高齢者の生活行動をめぐっては、加齢による身体的能力の低下、それとともに地域や生活空間との関係性に注目した研究が行われてきた⁶。その成果から考えると、交通手段や様々なインフラ整備が充実している都市のインナーシティに居住する高齢者は、外出行動の面で阻害要因が少ないことが予想される。今回対象とする西成区は大阪市内のインナーシティに位置付けられ、地下鉄やバス交通など至便性は高く、また生活のための様々な施設も充実している地区といえよう。本調査では、調査対象者に「よく行く場所」を聞き取り（複数回答可）、その具体的な場所を地図にプロットしていった。そして「よく行く場所」を具体的に「買物」、「通院」、「コミュニティ」と目的別に分けて分析を行なった。なお、ここでの「よく行く場所」とは、「ほぼ毎日行く場所」として設定している。

2. 目的別訪問箇所について

まず全回答者 129 のうち、「よく行く場所」がある回答者は 122 名で、回答率は 94.6%（全回答数は 370）だった。そして「買物」「通院」「その他」の行動目的別に分けて見ると、「買物」の回答数は 148、回答者数は 84 名（全回答者の 65.1%）、「通院」の回答数は 155 で、回答者数は 112 名（回答率 86.8%）、「その他」の回答数は 67 で、回答者数は 52 名（回答率 40.3%）であった。以上の結果からは、今回の回答者のほとんどが外出行動を日常的に行なっていると言え、そのうち回答者の 8 割以上が通院行動をとっており、続いて「買物」、「コミュニティ」という回答の順番になっている。次に具体的な訪問箇所について行動目的別に見ていこう。

まず、「買物」を目的とした訪問箇所を回答数の多い順に並べると、「越前屋」（回答数 39、所在地：西成区鶴見橋）、「スーパーはやし」（29、西成区鶴見橋）、「スーパー玉出鶴見橋店」（25、西成区鶴見橋）、「イズミヤ花園店」（14、西成区花園南）、「ライフ南津守店」（6、西成区南津守）、「鶴見橋商店街」（13、西成区鶴見橋）となっている。このうち、「越前屋」や「スーパーはやし」、「スーパー玉出鶴見橋店」は西成区の中で最も大きい商店街である「鶴見橋商店街」内に立地しており、回答者はそれらの店舗を複数かけもちで訪れることもあったと思われる。「イズミヤ花園店」や「ライフ南津守店」はそれぞれ大手スー

⁶ たとえば、竹嶋（1995）、工藤ほか（1998）、篠田ほか（2007）がある。

パーマーケットであり、店舗面積が大きく、特にイズミヤは地下鉄花園駅前に立地しているため利便性が高く、ライフも大型駐車場を完備しており、施設内には飲食店が併設されている。この他の回答としては、「フレッシュ天下茶屋店」(3、西成区千本北)、「天下茶屋駅前」(2、西成区岸里)、「ビッグ岸里」(2、西成区千本北)などがあげられ、「島忠ホームズ」(2、西成区南津守)や「コーナン南津守店」(2、西成区南津守)といった大型ホームセンターの回答もあった。さらに、天王寺駅前の「近鉄百貨店」や「あべのベルタ」、そして「難波」や「天神橋筋商店街」など、西成区に隣接する阿倍野区、さらに遠方の繁華街をあげる回答も見られた。一方で、朝鮮料理の食材などを扱う店が集積する猪飼野地域のコリアタウンなどを回答するケースは0であった。なお、西成区域にはコンビニエンスストアが複数の地域で出店しているにもかかわらず、回答数は1つしかなかった。このことから買物行動をまとめると、西成在住コリアン高齢者の多くが鶴見橋商店街近辺をよく利用としていること、そして大型店舗志向が強いことが認識できよう。ただ、こうした結果はおそらく地域の日本人高齢者の行動とほとんど違いはないものであり、また朝鮮料理の食材などの商店への買物行動もほとんど無く、在日コリアン特有の行動とは必ずしも言えないだろう。

次に「通院」行動の訪問箇所を回答の多い順に並べると、大村医院(15、西成区鶴見橋)、富浦医院(12、西成区長橋)、小池外科(12、西成区津守)、浪速生野病院(10、浪速区浪速東)があげられる。ただし、訪問者数が10名を超える病院はこれだけで、このほか回答者数10未満の病院が上記病院以外に58施設あった。このことはすなわち回答者の訪問する病院には多様であることを示している。たとえば診療科目別について見れば、浪速生野病院や大阪市大病院、南大阪病院といった総合病院のほか、内科、外科をはじめ眼科や歯科など多分野にわたっている。また、訪問病院の立地について見ると、西成区域内に分散しているだけでなく、隣接する浪速区(回答数18)、住之江区(回答数11)、天王寺区(回答数9)、阿倍野区(回答数5)、住吉区(回答数3)、大正区(回答数1)のほか、北区や中央区、都島区、さらには大阪府高槻市や東大阪市、兵庫県明石市への訪問のケースも見られた。このように、通院行動の場合は、他の行動よりも地理的に広範囲で行われていると言えるだろう。

最後に「コミュニティ」に分類される訪問箇所を見ていくと、最も多い回答は銭湯であった(回答数20、9ヶ所)。自宅に風呂設備がないため銭湯に通っているだけでなく(別質問で風呂設備がない回答は20となっている)、リフレッシュ目的やさらには集いの場を求めて銭湯を訪れる回答者もいるだろう。このほか、散歩や体操を目的とした公園への訪問(8)、喫茶店(8)、飲食店・居酒屋・カラオケ(回答数4)、スポーツクラブ(回答数4)との回答が見られ、こうした行動は主に関係性を求めたコミュニティ型行動として位置付けることも可能であろう。また少数ではあるが、既存の地域の老人施設である老人憩の家

(回答数 3)、西成区市民交流センター(回答数 1)、障害者会館(回答数 1)といった回答もあった。また、民団西成支部への回答数は 6 となっており、民団に併設されるデイサービスへの訪問は回答数 2 となっている。この他、現時点で仕事や通学をしている回答者もあり、仕事場への訪問(回答数 2)や夜間学校(回答数 1)をあげる回答者もいた。なお、以上のコミュニティを目的とした訪問箇所のうち、隣接する阿倍野区や住之江区の 2 箇所以外すべては西成区域内に存在する施設であった。したがって、「よく行く場所」という問題設定を踏まえた上ではあるが)在日コリアン高齢者がわざわざ区域外にコミュニティ目的の行動を実行するケースはほとんどないということができよう。

3. 外出行動率とその平均移動距離についての分析

次に、それぞれの行動を年齢別および性別に見た場合、どのような差異が見られるのだろうか。表 1 は、性別および年齢別に訪問箇所を答えた回答者の割合(行動率)とその行動に伴う自宅から訪問箇所までの平均移動距離を表したものである。

まず「買物」行動については、女性の 80%が行動しているのに対して男性は 41.3%であり、その平均移動距離も女性が 10,371m と極めて高い数字が出ている一方で、男性の平均移動距離は 669m となっている。これらを年齢別に見た場合、加齢に伴い、行動率も平均距離も減少している。ただし男性の場合は、85 歳以上で行動率 0%という結果が出ているが、65~74 歳よりも 75~84 歳の回答者の方が行動率、平均距離共に高い数字が出ている。一方、女性の場合は行動率が 65~74 歳と 75~84 歳で 80%を超えているが、85 歳以上となると 69.2%まで減少している。また平均移動距離については 65~74 歳で 17,261m と極めて高い数字が出ているが、75~84 歳が 593m、85 歳以上が 533m と、加齢に伴って大きな減少は見られない。

次に「通院」行動については、男性、女性、そしてどの年齢層でも 85%以上が通院行動を行なっている結果となっている。性別で見た場合、男性の行動率 93.5%に対しては、女性は 89.3%であり、平均移動距離も男性の 2,924m に対して、女性は 1,217m と低い数字となっている。上記した買物行動とは違い、通院行動の場合、女性より男性の方が行動率、平均移動距離双方において高い数字が出ていることがわかる。次に年齢別に見ると、男性の場合は 65~74 歳(92.3%)⇒75~84 歳(94.1%)⇒85 歳以上(100%)と年齢層が上がることによって割合も上昇しており、女性の場合も 65~74 歳(85%)⇒75~84 歳(95.5%)⇒85 歳以上(92.3%)と概ね年齢層が上がることによって行動率の割合は高くなっている。平均移動距離については、男性の場合、65~74 歳(2,938m)⇒75~84 歳(2,166m)⇒85 歳以上(953m)と減少しており、女性の場合は 65~74 歳(1,674m)⇒75~84 歳(795m)⇒85 歳以上(485m)とこちらも加齢に伴い減少している。

最後に「コミュニティ」行動については、男性の 50%が行動しているのに対して女性

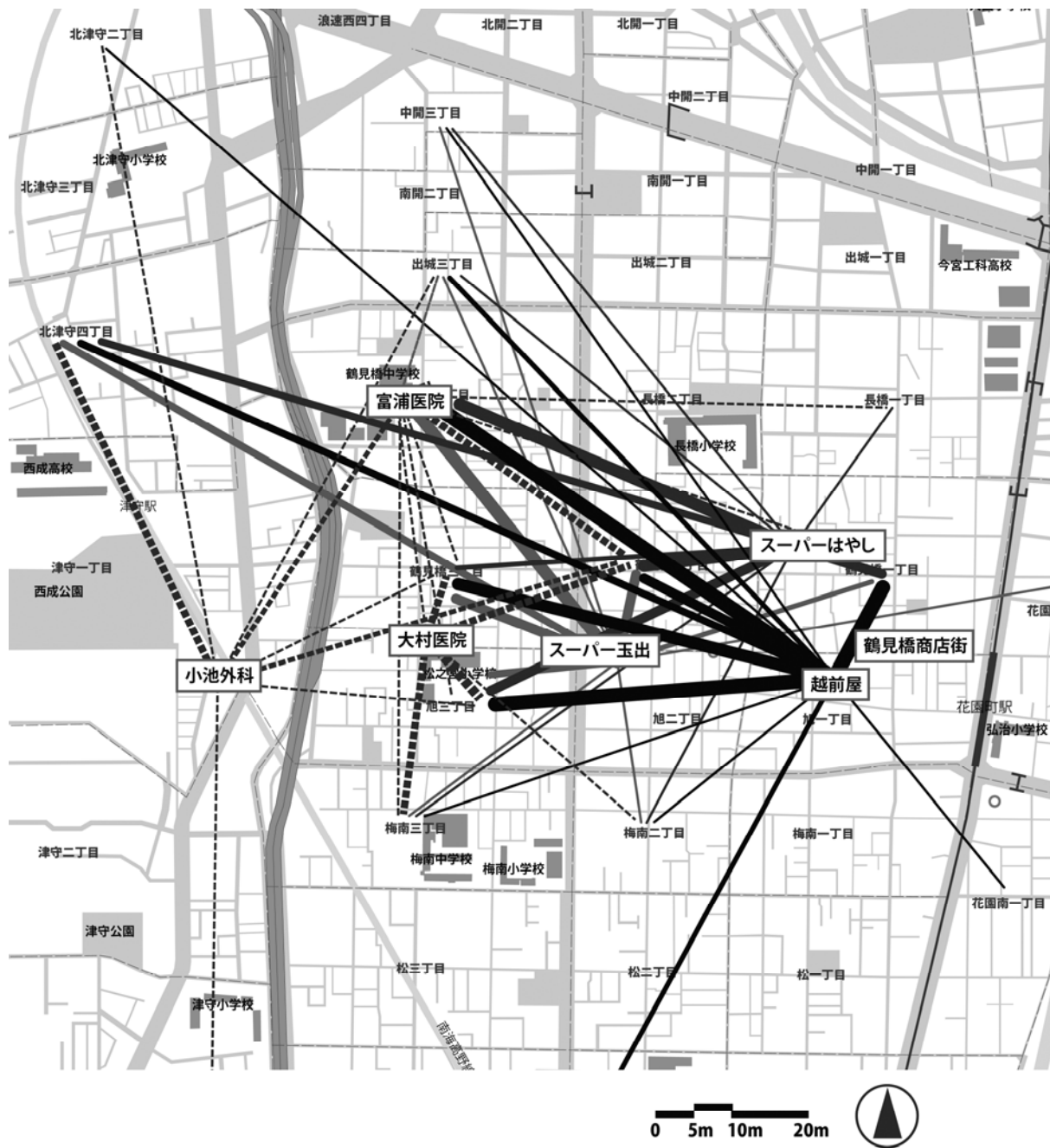
は 37.3%となっている。平均移動距離も男性（559m）の方が女性（435m）よりも若干多い。年齢別に見た場合は、男性の場合は 65～74 歳（46.2%）⇒75～84 歳（52.9%）⇒85 歳以上（66.7%）、女性の場合は 65～74 歳（32.5%）⇒75～84 歳（40.9%）⇒85 歳以上（46.2%）と、通院行動と同じように加齢に伴い行動率の割合は高くなっている。また平均移動距離については、男女双方で加齢に伴って減少する傾向が見られた。

最後に以上の結果を男性／女性別から判断すると、行動率の場合、「通院」行動には大きな差異はないが、「買物」行動は女性のほうが卓越しており、一方で「コミュニティ」行動では男性の方が高い割合を示している。平均距離から見ると、「コミュニティ」行動は男性／女性間で差異はあまりないが、買物行動の場合は女性のほうから長距離で行動するのに対して、通院行動では男性のほうが卓越して遠距離行動を行っていることが認識できよう。

【表 30】 年齢別・性別行動率と平均移動距離

		買物行動	通院行動	コミュニティ活動	総計
男性	65～74歳	38.5% (383m)	92.3% (2938m)	46.2% (593m)	176.9% (1575m)
	75～84歳	52.9% (927m)	94.1% (2166m)	52.9% (523m)	200% (1334m)
	85歳～	0.00%	100% (953m)	66.7% (522m)	166.7% (824m)
男性総計		41.3% (633m)	93.5% (2414m)	50% (559m)	184.8% (1419m)
女性	65～74歳	82.5% (17261m)	85% (1674m)	32.5% (479m)	200% (9087m)
	75～84歳	81.8% (593m)	95.5% (795m)	40.9% (455m)	218.2% (662m)
	85歳～	69.2% (521m)	92.3% (485m)	46.2% (324m)	207.7% (463m)
女性総計		80% (10371m)	89.3% (1217m)	37.3% (435m)	206.7% (5247m)

※平均移動距離については、「ヒュベニの公式」を用いて居住地（町丁目の中心点）と訪問先 2 点間の緯度経度から実際の距離をメートル換算で算出している。



【図 8】居住地と外出先の位置関係

※よく行く場所として、「買物」、「通院」で上げられた上位 3 つまで、地図にその位置関係を示した。実線が買い物による外出、点線が通院による外出を表す。なお、居住地は町丁目別としてまとめ、外出先として挙げられた度数によって、線を太くしている。

4 まとめ

以上の結果を地域との関係性から考察していくと、まず今回の回答者の多くが「よく行く場所」を回答していること、つまり行動率が高いということは、高齢者たちの行動を阻害する要因が地域には少ないという判断に繋がるだろう。また、その行動もそれぞれの目的で多様性が見られていることは、地域内に生活のための必要な施設が多く存在しており、行動の選択肢が充実していると捉えることもできよう。加えて、通院行動で顕著であった遠隔地への外出行動の回答から判断すれば、遠距離移動を成し遂げるための交通手段が整備されているということも指摘できよう。すなわち、一様には言えないが、西成という地域は在日コリアン高齢者にとって生活しやすい、あるいは、かれらが地域の多様な状況をうまく利用していると結論づけられるのではないだろうか。ここでは、加齢に伴う身体的能力の低下があったとしても、西成の地域的特徴がかれらの行動を阻害することはかなり少ないことが想定できる。

ただし、こうした行動が成立しているからといはいえ、西成に暮らす在日コリアン高齢者たちが現状に満足しているとは言い切れない。この点については「望まれる外出行動」を調査していないため、筆者らの勝手な認識なのかもしれないが、地域にある現在の状況から「仕方なく」外出行動を選択せざるを得ない人もいるだろう。また、既存の高齢者施設への行動があまり多く無いように、そうした施設に「行きづらい」「行きたくない」という感情が在日コリアン高齢者たちに存在していることも想起される。もしこのことが真であるならば、行動を阻害する地域的特徴が見えないところで存在している可能性があるだろう。したがってそれらの実態をより詳細な調査で把握する必要があり、そこから何らかの実践的な提言を導出することが望まれよう。

ところで、第7章で岩山春夫・金春子が記述しているように、西成民団支部ではデイサービスに加えて様々な情報の提供や関係性構築のための取組を行っている。しかし、今回の調査結果では民団を日常的に訪れる人は少数であり、実際の所こうした取り組みが効を奏しているとは言えないようである。もちろん、訪問をしないことはそれぞれ個人の事情があるだろうが、一方でそうした取組の情報が在日コリアン高齢者たちに伝わっていないということも理由の一つなのかもしれない。民団の取組だけではなく、西成区では高齢者向けのサービスが多く展開しており、こうした情報を円滑に提供することで高齢者たちの日常生活における選択肢をさらに増加させ、高齢者個々人の生活行動を疎外なく促進し、ひいては問題になりつつある「地域生活の脆弱化」を回避・軽減させるきっかけにもなるかもしれない。

【付記】

本稿の表は四井恵介さんに作成いただいた。ここに記して謝意を表します。

第V章 介護の現状とニーズ

中山 徹・全 泓奎

1. 介護保険・サービスの利用状況・意思

1) 介護について

介護保険制度は、家族の存在とそれが持つ福祉的機能を制度的前提として制度設計されている。介護について、改めて在日高齢者の家族の介護意識についてみたのが、【表31】である。この表は、家族が介護することは当然のことと思いますかという問いに対する答えである。その結果をみると「とてもそう思う」が40人（31.7%）、「ある程度そう思う」が32人（25.4%）、両者で57.1%を占めている。これに対して「あまりそう思わない」32人（25.4%）、「全くそう思わない」は22人（17.5%）と、両者を合わせると42.9%を示しており、6割弱の方は家族介護志向を持っていることが分かる。一方東京都内のある区で65歳以上の在日高齢者を対象とした民族団体会員に対し調査を行った李錦純(2007)によると、同調査では、7割以上の方が家族介護志向を持っており、高齢社会基礎調査による日本人高齢者の約半数が家族介護志向を持ち、それと比較すると在日高齢者の方がより強い傾向がみられる(前掲書：163)と指摘している。今回の西成調査においても同様の傾向性が読み取れる。

【表 31】 家族介護志向

		度数	%	有効%	累積%
有効	とてもそう思う。	40	31.0	31.7	31.7
	ある程度そう思う。	32	24.8	25.4	57.1
	あまりそう思わない。	32	24.8	25.4	82.5
	まったくそう思わない	22	17.1	17.5	100.0
	合計	126	97.7	100.0	
欠損値	無回答	3	2.3		
合計		129	100.0		

次に日本人のヘルパーが介護のため自宅を訪ねてくることについてどのように思うのかを聞いたのが【表32】である。それによると、「まったく気にならない」が61人(43.8%)、「どちらかといえば気にならない」が21人(16.8%)であり、両者で6割を超えている。特に、注目されるのは「気になる」23人(18.4%)を「まったく気にならない」が大きく上回っていることである。これは第I章で指摘しているように、1世に比べて2世の方が7割弱と多いことから日本語や日本の文化への違和感が比較的になくなってきているためではないかと推察される。

【表 32】日本人のヘルパーの訪問に関する意識

		度数	%	有効%	累積%
有効	気になる。	23	17.8	18.4	18.4
	どちらかと言えば気になる。	20	15.5	16.0	34.4
	どちらかと言えば気にならない。	21	16.3	16.8	51.2
	まったく気にならない。	61	47.3	48.8	100.0
	合計	125	96.9	100.0	
欠損値	無回答	4	3.1		
合計		129	100.0		

2) 介護保険

次に介護保険の要介護認定の申請を行なった人について聞いてみると、有効回答者 129 人のうち 34 人 (26.4%) があると答えており、3 割弱という少ない結果となった(【表 33】参照)。東京の調査でも認定申請を行ったのは 21.3% だけで、申請していない場合が 78.7% と非常に高い割合を示している。このような傾向は、泉州調査でも見られ、認定申請をしたのは、29 人(14.0%)に留まっており、「していない」が 178 人(86.0%)とはるかに多くの方が申請をされていない現状を指摘している。泉州調査ではその理由として、利用料など経済的負担を含め、「制度を知らないため」と答えている場合が 2 割強を占めている。これは制度への利用ニーズがあっても経済的負担や制度自体を知らないなどの理由により利用されていないことを示す内容である。

【表 33】 要介護認定申請の有無

		度数	%	有効%	累積%
有効	ない	95	73.6	73.6	73.6
	ある	34	26.4	26.4	100.0
	合計	129	100.0	100.0	

介護保険制度が初めて施行されたのは 2000 年である。しかし、実際の保険料の徴収は同法施行より遅れて実施されたため、実際の申請時期とは若干のずれが生じるが、西成調査でも申請時期について聞いてみると、他年に比べ 2007 年が比較的高い割合を示しているのがわかる(【表 34】参照)。

【表 34】 介護保険の申請時期 (年)

		度数	%	有効%	累積%
有効	2000	3	2.3	9.7	9.7
	2003	2	1.6	6.5	16.1
	2004	1	.8	3.2	19.4
	2005	6	4.7	19.4	38.7
	2006	3	2.3	9.7	48.4
	2007	7	5.4	22.6	71.0
	2008	1	.8	3.2	74.2
	2009	4	3.1	12.9	87.1
	2010	4	3.1	12.9	100.0
	合計	31	24.0	100.0	
欠損値	無回答	3	2.3		
	非該当	95	73.6		
	合計	98	76.0		
合計		129	100.0		

一方、申請を行なった中で、無回答を除いた非該当や、自身の認定結果がわからないという回答が 12 人おり、要介護度が判明したのは 21 人という結果である。要介護認定結果

を当事者が理解できているかどうか、なかなか難しい問題を含んでいる。たとえば、要支援1、要支援2という用語の意味やその違いなど、一般的に十分理解できるものではない。上記の回答は十分あり得るものであり、介護保険に関する理解を高めるためのより一層の努力が求められるであろう。泉州調査(2007)の中からも内容を知らないと答えている場合は、207人の中で68人、32.7%という結果となっており、3割強の方が知らない状態にあることを報告している⁷。

要介護認定結果の内訳は、要介護1、要介護2がそれぞれ6人、要支援1が5人、要介護3が2人、要介護5、要支援2がそれぞれ1人となっている(【表35】参照)。

【表35】 要介護認定の申請結果

		度数	%	有効%	累積%
有効	非該当	2	1.6	7.1	7.1
	要支援1	5	3.9	17.9	25.0
	要支援2	1	.8	3.6	28.6
	要介護1	6	4.7	21.4	50.0
	要介護2	6	4.7	21.4	71.4
	要介護3	2	1.6	7.1	78.6
	要介護5	1	.8	3.6	82.1
	分からない	5	3.9	17.9	100.0
	合計	28	21.7	100.0	
欠損値	無回答	5	3.9		
	非該当	96	74.4		
	合計	101	78.3		
合計	129	100.0			

次に実際に介護保険のサービスを利用したことがあると回答した人は31人中23人(74.2%)であった(【表36】参照)。泉州調査(2007)でも認定を受けた人の介護保険サービスの利用状況は「利用したことがない」(6人、23.1%)に対し「利用したことがある」が20人(76.9%)を占めており、両方の調査から介護保険の申請を行った場合は、ある程度制度への理解もあり、申請を行っていない方に比べて制度への利用度も高いことが見て取れる。

⁷ 福岡市にある在日コリアンコミュニティの調査では、知っている(21人、44%)、知らない(27人、56%)と知らない場合が多く、制度に関する情報が十分に行き渡っていない現状を表している(平野・長友・平木、2008)

【表 36】介護保険での在宅サービス・施設サービス利用経験の有無

		度数	%	有効%	累積%
有効	ある	23	17.8	74.2	74.2
	ない	8	6.2	25.8	100.0
	合計	31	24.0	100.0	
欠損値	非該当	97	75.2		
	無回答	1	.8		
	合計	98	76.0		
合計		129	100.0		

そして、利用したことがある、もしくは利用しているサービスとしてもっとも多いのは、訪問介護（ヘルパー）で17人（63.0%）、次いで、住宅改修費の支給11人（40.7%）、通所介護10人（37.0%）、訪問看護6人（22.2%）となっている（【表 37】参照）。住宅改修費は手すりの設置などであり、どの地域でも相対的に利用は高いと考えられる。

【表 37】介護保険サービスの中で、利用したことがある・利用しているサービス
(複数回答)

	度数	%
—訪問介護	17	63.0%
—訪問入浴介護	0	0.0%
—訪問看護	6	22.2%
—訪問リハビリテーショ	0	0.0%
—通所介護	10	37.0%
—通所リハビリテーション	0	0.0%
—短期入所生活介護	0	0.0%
—短期入所療養介護	0	0.0%
—福祉用具の貸与など	5	18.5%
—住宅改修費の支給	11	40.7%
—居宅療養管理指導	1	3.7%
—その他	0	0.0%

介護サービスについての不満点に関する設問で、泉州調査と比較可能なため、【表38】のように両方の結果を比べてみた。まず、西成調査では不満がない人を除くと、45人（36.6%）がどのようなサービスがあるのかよくわからない、と答えており、高い割合を占めている。その次は「介護保険料が高く感じられる」が13人（10.6%）と、約1割の方が経済的負担を感じていることも注目される（【表38】参照）。一方、泉州調査(2007)でもこのような傾向が同じく指摘されており、前者が64人(31.7%)、後者が51人(25.2%)という数値を示している。両方の結果から介護保険制度そのものの難解さと共に、保険料に負担を感じている方が多いことが浮き彫りとなっており、制度への周知の徹底やその方法の見直し、在日コリアン高齢者の経済的負担の緩和に何らかの制度的支援装置が無い限り、介護保険制度そのものへの在日コリアン高齢者のアクセスが益々困難に陥って行くのではな

いかと憂慮される。

介護保険制度は、創設されてから約10年となる。その間、何度か法改正がなされた⁸。「要支援」が導入されるなど、利用者にとって制度を理解することに難しさがあることは介護現場からも指摘されている。

また、周知のように、介護保険料は、いくつかの段階に分かれている。大阪市の場合、2009年度より10段階に分かれているが、基準の介護保険料の0.5倍、つまり半額である「第1段階」（基準×0.5）は、老齢福祉年金受給者と生活保護受給者だけとなっており、在日高齢者に多い無年金者は対象となっていない点に注目が必要である。

【表 38】西成調査と泉州調査における介護サービスに関する不満点(複数回答)

	度数 (西成)	度数 (泉州)	有効% (西成)	有効% (泉州)
どのようなサービスがあるのかよく分からない。	45	64	36.6%	31.7
サービスの内容が不十分である。	3	8	2.4%	4.0
利用方法がわかりにくい。	6	33	4.9%	16.3
利用料が高く感じられる。	8	23	6.5%	11.4
介護保険料が高く感じられる。	13	51	10.6%	25.2
言葉が通じない。(もしくは通じにくい。)	0	3	0.0%	1.5
事業者や施設の職員との関係がうまくいかない。(もしくはうまくいか不安である。)	2	2	1.6%	1.0
サービス内容が在日コリアン(外国人、泉州調査)に配慮されたものになっていない。	1	6	0.8%	3.0
在日コリアン(外国人、泉州調査)が運営している事業者や施設サービスを利用したい。	7	21	5.7%	10.4
特に不満はない。	53	25	43.1%	12.4

⁸ 介護保険制度は、2006年4月から改正されたが、主要な変更点は、以下のとおりである。

1) 介護予防を重視する仕組みへの変化(①要介護度が軽度の方を対象として、介護予防を重視した「新予防給付」の新設、②「地域支援事業」を新設し、高齢者の生活機能の維持・向上を図るサービスの提供)、2) 地域における新たなサービス体系の確立(①高齢者のニーズや相談に総合的に対応する「地域包括支援センター」の創設、②地域住民の利用を基本とする「地域密着型サービス」の創設、③ケア付き住まいの確保)、3) 介護サービスの質の確保・向上(①介護サービス事業者の情報公表の義務づけ、②事業者に対する指導・監督の強化、③ケアマネジメントを見直し、ケアマネジャーの質の向上)、4) 保険料負担のあり方や制度運営の見直し(①第1号保険料の設定、低所得者へ配慮、②新規の要介護認定調査の見直し、③区市町村の保険者機能としての権限の強化)。

3)介護保険サービス以外の利用実態

高齢者向け福祉等サービスには、介護保険外サービスも幾つか存在している。大阪市では、「緊急通報サービス事業」、「高齢者住宅改修助成事業」「日常生活用具等の給付」など7つのサービスがある。食事に関するサービスとしては、①概ね65歳以上の高齢者を対象に、配食や会食形式により区内14地区14ヶ所で実施されている「ふれあい型食事サービス」や②要支援以上のひとり暮らしの高齢者あるいは高齢者のみの世帯で、心身の障害等により食事の調理が困難な方に対して、食事を配達するとともに安否を確認する「生活支援型食事サービス」がある。

【表39】は、介護保険サービス以外の保健福祉サービスの利用状況をみたものである。利用は、10人(7.8%)と1割を下回っている。具体的には、10人のうち「会食サービス」が7人(87.5%)となっている(【表40】参照)。そして、福祉サービスを利用していない理由(複数回答)としては、「今はサービスを必要としていないため」が85人(78.7%)と圧倒的に多く、「家族や親戚が介護してくれるため」が11人(10.2%)となっている。「利用料支払いに負担を感じるため」という経済的な理由を挙げている場合も5人(4.6%)いた。またサービスがある事をわからない、知らなかったためと回答した場合も7人(6.5%)いる等、まだサービスの内容が十分周知されていない現状も浮き彫りにされた(【表40】参照)。サービス内容が十分に知られていない現実、今後利用したいサービスが「特になし」という答え(117人、91.4%)にも表れていると推測できよう。

【表39】 介護保険サービス以外の保健福祉サービスの経験

		度数	%	有効%	累積%
有効	ない	118	91.5	92.2	92.2
	ある	10	7.8	7.8	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
欠損値	無回答	1	.8		
合計		129	100.0		

【表40】 保健福祉サービスの利用内容

	度数	%
配食サービス	0	0.0%
会食サービス	7	87.5%
その他	1	12.5%

【表 41】 保健福祉サービスを利用しない理由

	度数	%
今はサービスを必要としていないため	85	78.7%
家族や親戚が介護してくれるため	11	10.2%
他人の世話にはなりたくないため	2	1.9%
サービスがある事を知らなかったため	3	2.8%
サービス利用の手続きが分からないため	1	0.9%
サービスの内容が分からないため	3	2.8%
利用料の支払いに負担を感じるため	5	4.6%
近所にサービスを提供する施設がないため	0	0.0%
その他	8	7.4%

【表 42】 今後、利用したい介護保険以外の保健福祉サービス

	度数	%
配食サービス	5	3.9%
会食サービス	6	4.7%
特にない	117	91.4%
その他	3	2.3%

2. 在日外国人向けサービスに関する意見

現在は実施されていないものの、今後在日外国人向けサービス（介護保険サービス・介護保険外サービスいずれも）ができた場合、利用したいサービスについて聞いてみると、最も多く挙げられたのは、「在日高齢者のためのサークル活動（民族舞踊・識字教室・教養講座）」16人(13.0%)であった。その次に「在日高齢者のための催し物（祭り・音楽祭など）」と「配食・会食サービス」が各々15人(12.2%)を示しており、比較的催し物へのニーズが高いことがわかった。一方「配食・会食サービス」に対してもある程度のニーズが存在していることは、第Ⅰ章でも指摘しているように一人暮らしの高齢者が3割強にいる現実を反映しているものと推察できよう(複数回答)。

【表 43】 在日外国人向けサービスの利用ニーズ

	度数	%
配食・会食サービス	15	12.2%
韓国・朝鮮語でも対応可能な緊急通報装置システム	0	0.0%
在日高齢者のための催し物（祭り・音楽祭など）	15	12.2%
在日高齢者のためのサークル活動 （民族舞踊・識字教室・教養講座）	16	13.0%
韓国・朝鮮語がわかるヘルパーの派遣	4	3.3%
韓国・朝鮮語がわかる職員のいる通所・入所施設	8	6.5%
その他	8	6.5%
特になし	84	68.3%

3. 福祉サービスの情報源

では、西成の在日コリアン高齢者は、介護保険をはじめとする高齢者福祉サービスに関する情報を誰（どこ）から得ているのであろうか。それに対する答えが次の【表 44】である。

それによると、最も有効な情報源は、「役所の広報誌・パンフレット」で 37 人の方が利用しているのがわかる。その次は、「友人・知人・近所の人」で 35 名が選んでいる。これにより、公共の広報物が在日コリアン高齢者にとって最も役に立つ情報源として機能していたり、ある程度近所付き合いが維持されており、それによる情報の取得が一定程度機能していることが垣間見られる。

【表 44】福祉サービスの情報源

情報源	度数	%
役所の広報誌・パンフレット	37	28.9%
町内会や自治会などの広報誌・パンフレット	14	10.9%
民族団体の広報誌・パンフレット	6	4.7%
新聞	4	3.1%
ラジオ・テレビ	6	4.7%
インターネット	0	0.0%
家族や親戚	28	21.9%
友人・知人・近所の人	35	27.3%
民族団体の窓口（職員）	5	3.9%
市役所（福祉事務所や保険センターなどを含む） の窓口（職員）	15	11.7%
地域包括支援センターの職員	0	0.0%
民生委員	4	3.1%
医師	17	13.3%
病院の相談員（医療ソーシャルワーカー）	1	0.8%
介護支援専門員（ケアマネージャー）	9	7.0%
訪問介護員（ホームヘルパー）	5	3.9%
その他	8	6.3%
特になし	23	18.0%

4. まとめ

本章の結果をまとめると以下のとおりである。まず、本調査対象の在日コリアン高齢者も他の調査(李錦純、2007)と同様に、多くの方が家族介護志向を持っていることがわかった。その一方で、地域居住者の中に2世の割合が増えていくにつれ、日本人のヘルパーなどがサービスの提供のために自宅を訪ねて来ることへの抵抗感が少なく、全体の約6割の方が気にしないと答えていた。しかし、実際の介護保険という制度利用の側面についてみると、申請をされている方も少なく、制度そのものへの周知度もさほど高くない現実が浮き彫りにされた。実際に介護保険の認定申請を行った方は、8割弱がサービスを利用しており、制度への理解を高めていくことが実際のサービスへのアクセスを増やしていく方法にもなるのではないかと推察される。ただ、一定程度の方は保険料の負担を気にしており、これは全体的に在日コリアン高齢者の所得が低いことが影響していると思われる。介護サービスに対する不満点としても挙げられているように、サービス内容の周知が十分に成されていないことと、経済的な負担を感じている方が多くいることを考えるとそれらに対応する改善が求められると言えよう。さらに今後必要とされるサービス内容については、多くの方が在日高齢者を対象としたサークル活動や催し物を挙げており、「配食・会食サービス」に対するニーズも存在していることにも注意を要する。

最後に福祉サービスへの情報源として、公共による広報や近所の付き合いによる効果が一定程度有効に機能していることも確認できた。

第Ⅵ章 「住まいの現状と改修へのニーズ」

大阪市立大学 都市研究プラザ 黒木宏一

1. 本章の目的

本章では、西成区北西部で暮らす在日コリアン高齢者（以下、在日高齢者とする）の「住まい」の現状と課題を把握すると共に、今後の高齢者の暮らしを支える「住まい」のあり方や、必要な支援・サポートへと繋がる知見を見出すことを目的とする。

2. 住まいの現状

1) 住宅の所有形態（図1）

住宅に関する基本的な要素である住宅の所有形態について、下記の地域を比較対象として挙げ、西成区北西部の在日高齢者の住まいの特性を分析する。比較対象地域は、全国(2005年)、全国的に持ち家率の高い富山県、大阪市、生野区(それぞれ 2006年10月31日公表の国勢調査データ「高齢者親族のいる世帯」を元

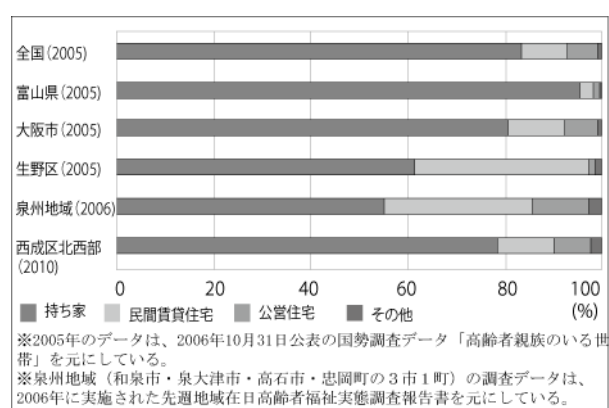


図1.住宅の所有形態

にしている。尚、ここでの高齢者は、65歳以上を対象としている。)、泉州地域(和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町の3市1町を対象に、2006年に実施された泉州地域在日高齢者福祉実態調査報告書を元にして)である。

全国的な傾向を見ると、65歳以上の高齢者親族がいる世帯では、持ち家率が83%と非常に高く、富山県で95%、大阪市でも81%と高い割合を示す。一方で、在日コリアンの集住地域である生野区では61%、泉州地域(在日コリアン高齢者世帯のみ)では、55%と低い割合を示す。これらと比べると、西成区北西部の在日高齢者世帯の持ち家率78%という値は、在日コリアン集住地域の中では、圧倒的に高い値といえる。

このように、西成区北西部における在日高齢者世帯の住まいの特性の一つとして、「持ち家率の高さ」が挙げられる。

2) 住宅の面積 (図2・表1)

西成区北西部在日高齢者世帯の住宅の面積について、「持ち家」・「民間賃貸住宅」・「公営住宅」の категорияでその特徴を見る。比較に用いるのは、2006年公表の国勢調査データ「高齢者親族のいる世帯」のうち、全国、大阪市、生野区のデータである。

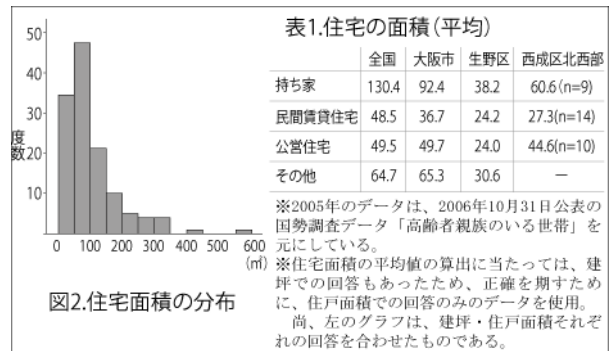


図2.住宅面積の分布

持ち家については、全国平均(2005年)の130.4 m²と比べて、調査対象地域の住宅面積は60.6 m²と、その規模は小さいものになっている。大阪市(2005年)の平均92.4 m²と比べても、その規模は狭小である。一方で、在日コリアン集住地域である生野区(38.2 m²)と比べると、1.5倍ほどの広さを有する。

民間賃貸住宅に関しては、全国平均(48.5 m²)、大阪市(36.7 m²)と比べると、調査対象地域の住宅面積27.3 m²は狭小なものであり、生野区(24.2 m²)と比べると同等の広さを有している。

調査対象地域の住宅面積の全体的な傾向(図2)としては、全体平均107.13 m²であり、50~100 m²の広さに集中している。

3) 居室数(図3)・居室数と世帯数との相関関係

居室数に関する全体的な傾向は、86%の世帯で3室以上の居室を有している。住まいの所有形態別にみると、持ち家では、3室を有する世帯が27%、4室を有する世帯が67%と、3部屋以上を有する世帯が9割を占める。公営住宅では、供給する世帯構成に合わせた標準設計が施されているため、2~3室の居室を有する世帯で占められている。民間賃貸住宅の世帯では、2室が40%、3室が33%、4室が20%と、公営住宅と同様に、2~3室を有する世帯が大半を占める。

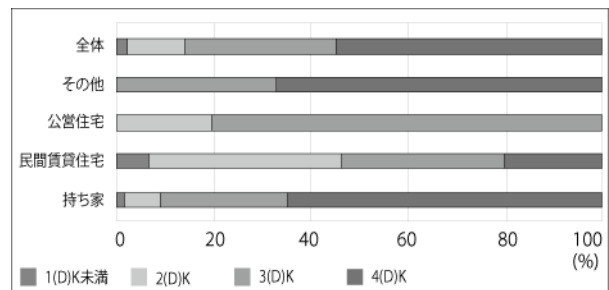


図3.居室数

以上を踏まえて、2-1で挙げた持ち家率の高さと共に、持ち家の世帯で86%が3室以上の居室を有することから、調査対象地域の在日高齢者世帯の居室数に関する全体的な特徴として、3室以上の居室数を有する傾向が伺える。

以上を踏まえて、2-1で挙げた持ち家率の高さと共に、持ち家の世帯で86%が3室以上の居室を有することから、調査対象地域の在日高齢者世帯の居室数に関する全体的な特徴として、3室以上の居室数を有する傾向が伺える。

居室数と世帯数との相関関係についてみる。調査対象地域の世帯構成（図4）は、一人暮らし世帯が32%、子供世帯と同居世帯が32%、夫婦二人暮らし世帯（共に65歳以上）が26%を占め、独居世帯、夫婦二人暮らしの割合が大半を占める。一方で子供世帯と同居の世帯の割合も高い。世帯構成と居室数の相関（図5）は、一人暮らしの世帯で8割以上が3室移乗の居室を有し、高齢者夫婦世帯でも同様の傾向が見られる。居室の余剰化・空室化が住まいの特徴の一つとして挙げる事ができる。

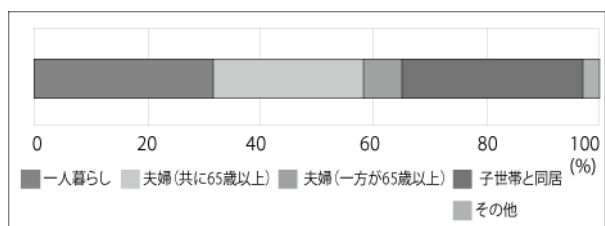


図4.世帯構成

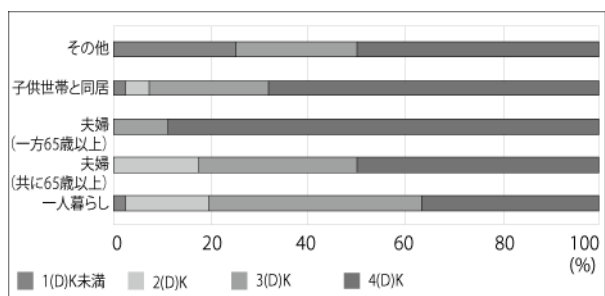


図5.世帯構成と居室数の相関

4) 住宅の設備（表2）

住宅の設備は、内風呂の世帯が全体の7割を占め、トイレ・台所は100%の世帯が完備している。調査設計の段階では、住宅の設備の不十分さを明らかにするために、風呂・トイレ・台所の水回りに関する項目を用意したが、実態としては、十分な設備を有した住まいであることが明らかとなった。

表2.住宅の設備

	実数	割合(N=129)
風呂(内風呂)	99	76.7%
トイレ	129	100.0%
台所	129	100.0%
共同風呂	0	0%
共同トイレ	0	0%
共同台所	0	0%

5) 住まいの居住年数（図6）

図6のグラフは、現在の住まいに、いつ頃から住み始めたかを示したものである。このグラフでは、1960年～1985年の間で現在の住まいへと移り住んでいる世帯が6割を占めている。また、80年以前に住み替えを行った世帯は全体の66%をしめ、調査時点で築年数30年を超過している。目視ではあるが、この地域の住宅は木造が殆どで、一般的に木造家屋の耐用年数は30年、法定耐用年数22年とされており、30年以上を経過した家屋が半数を占めているこの地域では、住宅の老朽化が進んでいることが考えられる。

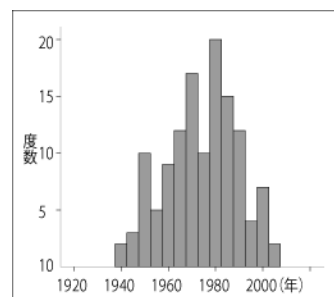


図6.居住年数

6) 住まいの特性

住まいに関する特性に関して、ここで整理する。西成区北西部の在日高齢者の住まいの特性として、下記のことが挙げられる。

(1) 持ち家率の高さ

全体の 78%の世帯が持ち家であり、2005 年時点での全国平均と比べても非常に高い割合を示している。また、在日コリアン集住地域である生野区、泉州地域と比較しても、持ち家率の高さは群を抜いている。

(2) 居室の余剰化・空室化

全世帯のうち、3 室以上の居室を持つ世帯が 8 割を占める。加えて、独居高齢者・夫婦世帯でも 8 割以上の世帯で 3 室以上の居室を有しており、居室が余る傾向が顕著である。

(3) 築年数の古さと老朽化の傾向

全世帯のうち 6 割の世帯が築 30 年以上もの家屋に住んでいることから、今後、住宅の老朽化が著しく進むことが考えられる。

(4) 住まいの維持管理の課題

持ち家が多いということと、使っていない部屋（余剰室）が多いという実態を踏まえて、今後さらに高齢となる世帯にとっては、住まいの維持・管理に多大な負担がかかることが予想される。

3. 住まいに対する満足度・課題

1) 住まいの満足度と定住志向

住まいの満足度（図 7）は、大いに満足（26.8%）、やや満足（46.3%）と、全体では7割以上が満足しているという評価をしている。その理由として、一つに定住意識の高さがある（図 8）。住み続けた

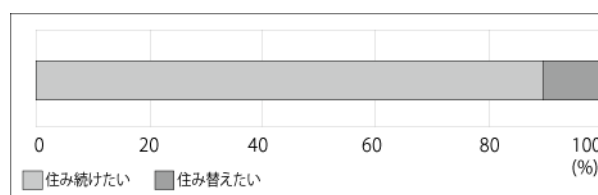


図8.定住の希求度

い理由（図 9）は、今の住まいに住み慣れているから（61 票）、商店や病院、駅などが近くにあり、便利だから（24 票）、知人や友人、親戚などが近くに住んでいるから（21 票）が高いポイントを示している。また、その他の意見では、「行くところがない」（その他 14 票のうち 6 票）という意見も多い。長年の住こなしによる「住まいへの慣れ」や利便性、知人、友人、親族の近居、また、そこから生まれるコミュニティの豊かさといった積極的な定住志向と共に、「行くところがない」といった、ここで暮らすしか為す術がないという現実も浮き彫りとなっている

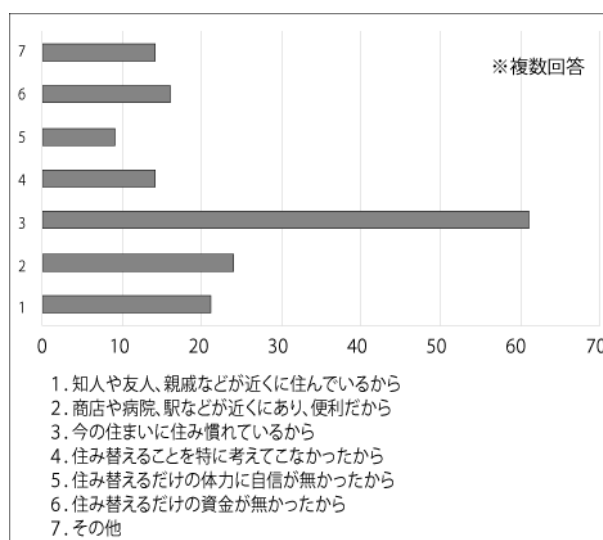


図9.住み続けたい理由

2) 住まいの課題と改修へのニーズ (図 10・11)

住宅の満足度や定住志向の高さの一方で、住まいの課題も存在している。

住まいに関して、不便を感じる箇所（複数回答）は、階段（21票）、敷居や玄関などの段差（8票）といった、住宅のバリアに対する不便さと共に、風呂（11票）、トイレ（8票）、台所・食堂（6票）といった水回りに対する課題も多い。調査対象地域の住宅のつくりは、2～3階建てが多く、訪問調査でアンケートに協力してもらった住宅の多くが、一階に工場や倉庫を有していることと、2階、3階に住居スペースを確保しているため、外出時の上り下りの際の身体的負担が大きい。また、水回りは、住宅をつくった当時の設備で生活しているため、浴室や浴槽、トイレの狭さといった不便さが生まれていることが考えられる。

不便さを感じている箇所と相まって、改修

したい箇所（図 11）は、トイレ、風呂、台所・食堂といった水回りに集中している。また、その他の意見の中には、「一階に住めるようにしたい」・「一階の店舗を住まいに変えたい」といった、居住スペース（階）を接地階に移したいといった要求もある。

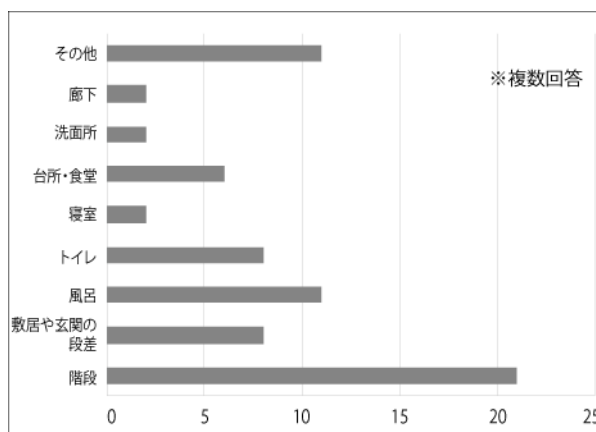


図10.不便を感じる箇所

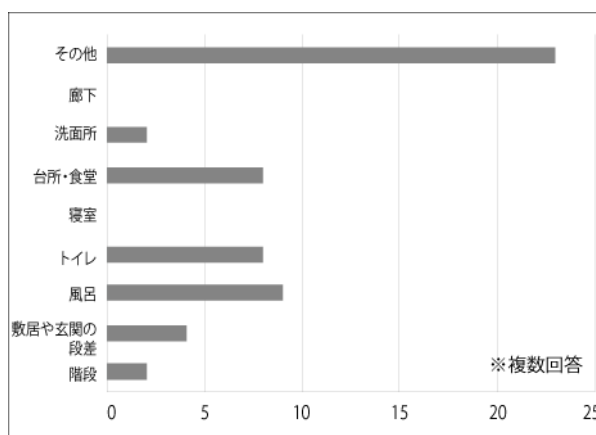


図11.改修したい箇所

住まいの改修に対するニーズ（図 12）は、改修を望んでいる世帯が 31.8%、望まない世帯が 65.7%と、後者が大半を占めている。その理由（図 13・複数回答）としては、住まいの設備・広さに不満がない（29 票）、すでに改修している（23 票）、改修する資金がない（21 票）であり、住まいへの満足度と、すでに改修しているという要因が大きい一方で、改修を望んでいるものの、改修する資金がないという現状も伺える。また、その他の意見としては、「改修するぐらいなら施設に入所する」・「住むのに不自由が出てくれば、売却してマンションを買う」・「小さくても便利なマンションに移りたい」といった、住み替えの要求や、「改修しても先が短いから」といった消極的な意見も見られる。

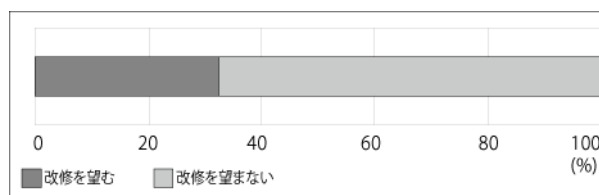


図12.改修へのニーズ

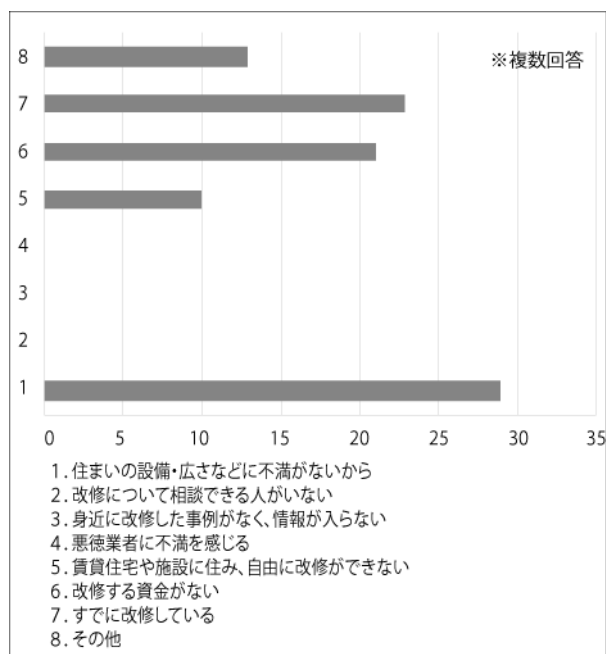


図13.改修を望まない理由

4. 居住者の要介護度・身体状況と住宅内事故との関係

高齢者世帯の要介護度・身体レベルの現状と、住宅内の事故との相関関係を明らかにすることで、より高齢者の暮らしに合わせた住宅のあり方を検討する。

1) 高齢者の要介護度の現状

高齢者世帯の要介護申請の状況は、申請を行っている世帯（34%）、行っていない世帯（73.6%）と、要介護度の申請を行っていない世帯が圧倒的に多い。そうした中で、申請を行った世帯での要介護度の状況は、要支援1・2が21.5%、要介護度1が21.4%、要介護度2が21.4%と、比較的軽度の高齢者世帯が大半である。調査項目になぜ要介護申請を行わなかったのか、といった設問を用意してはいなかったものの、申請した世帯の殆どが比較的自立していることから、申請の必要がないと判断した世帯が全体の多くを占めているものと思われる。

高齢者世帯の身体状況（図14）は、介護度の状況と相まって、車椅子・杖は利用していないが91票と圧倒的に多く、次いで、杖を使用する（29票）、伝え歩きで歩行可能（8票）であり、基本的に自立歩行が可能な高齢者が殆どである。一方で、車椅子利用の高齢者も数は少ないものの存在している。

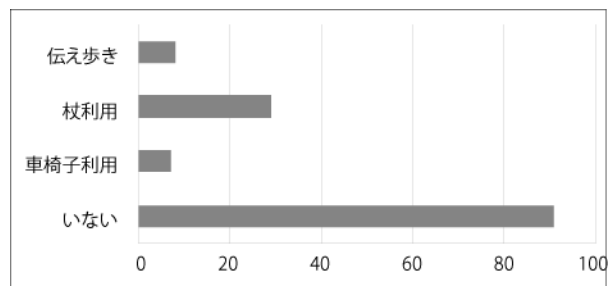


図14.高齢者の身体状況

2) 要介護度と自宅内事故の発生状況

表3は、要介護度と自宅内事故の発生状況を示したものである。全体的な傾向は、要介護度5の世帯（1世帯）や、要介護度3（2世帯）、要介護度1（5世帯）で比較的高い割合で事故が発生している。着目すべきは、要介護申請無しの世帯（95世帯）において、自宅内事故が22件、23%の割合で事故が発生している点である。前述した高齢者世帯の殆どは要介護度が軽く、身体状況も比較的自立しているのにも関わらず、自宅内事故は発生しているという点が非常に重要である。

表3.要介護度と事故の発生状況

	世帯数	事故数	発生割合(事故数/世帯数)
要介護申請なし	95	22	23%
要支援1	5	3	60%
要支援2	1	0	0%
要介護度1	6	3	50%
要介護度2	6	1	17%
要介護度3	2	1	50%
要介護度4	0	0	0%
要介護度5	1	1	100%
非該当	2	1	50%

自宅内の事故の発生場所（図 15）は、階段（12 件）、寝室（7 件）、段差（6 件）、風呂（5 件）、トイレ（4 件）の順に多く、階段での事故が圧倒的に多い。その他では、ベランダ・庭といった外部空間での転倒事故も数件確認できる。階段も合わせて事故の発生箇所を着目すると、不便を感じる箇所、改修ニーズの高い箇所との関連性がうかがえる。

身体状況が比較的自立している現状でさえ、自宅内事故が発生していること、また、不便を感じる箇所、改修ニーズの箇所と、事故の発生箇所との一致を考えると、今後一層体力や身体機能が落ちて行くであろう高齢者世帯の住まいを考える上で、改修ニーズに合わせた住宅改修のあり方、及びその支援を探る必要がある。

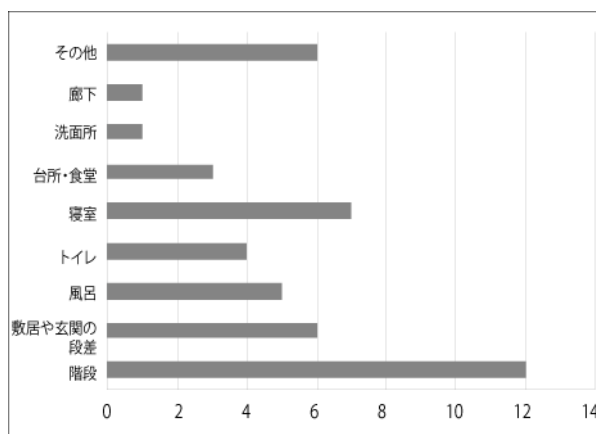


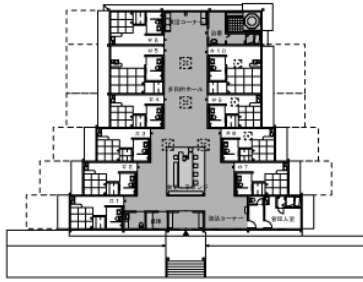
図15.事故の発生箇所

5. 在宅で暮らしていく上での「住まい」に関するサポートのあり方

西成区北西部の在日高齢者の住まいへのニーズとして、家族や親戚、知人友人との関わり・コミュニティの中で暮らしていきたいという定住志向の強さと共に、2～3階建ての住まいの中で、高齢者の住まいのスペースが上層階にあることでの、上下階の移動による身体的負担、転倒の危険性などのハードの課題が浮き彫りになっている。こうした課題に対しての住宅改修の経済的サポート・技術的サポートのあり方と共に、加齢に伴う在宅での暮らしの継続という難しさも今後直面していくであろう。こうした場合の一つの「居住サポート」のあり方として、どのようなことが考えられるのであろうか。

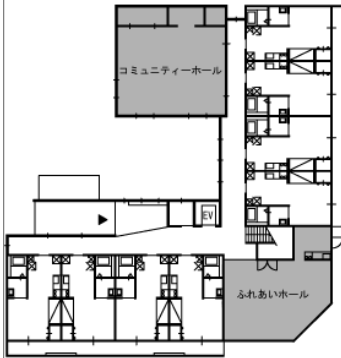
一つに、在日高齢者同士の「コレクティブリビング」に向けた住まいの模索である。顔なじみ・同胞の高齢者同士が、それぞれ自立した暮らしを組み立てつつ、住み慣れた地域で高齢者同士の支え合い・密なコミュニティの中で共同生活を送る姿である。コレクティブリビングに近い高齢者の居住環境としては、高齢者優良賃貸住宅（高優賃）が一つの事例として挙げられる。高優賃の場合では、高齢者の暮らしをサポートする LSA（Life Support Adviser）や管理人が常駐して、高齢者の健康や生活の相談、さらには食事サービスなどを行う事例（図 16）もあり、高齢者の身体的な不安や、健康上の不安の解消と共に、生活全般のサポート、いざとなったときの対応も可能となっている。加えて、在宅での暮らしが難しくなった場合でも、ホームヘルパーの活用などにより、ぎりぎりまで在宅での暮らしを支えることが可能である。現在の住まいでの暮らしの限界が来た際に、生活のサポートを受けつつ高齢者同士が共同生活を送れる居住環境の整備が、住み慣れた地域での生活を延長させる手がかりとなりうる。

高優質 Be (熊本県)



- ・各住戸はシャワー室・トイレが設置してあり、入浴は共同浴室で行う。
- ・食事は各自で自炊する世帯もあるが、食堂で配食を居住者同士と一緒に取る世帯が殆ど。
- ・誕生会、おやつ作りなどを居住者同士で行っている。

高優質 Ip (熊本県)



- ・各住戸に浴室・トイレが完備されている。
- ・一階に娯楽室（コミュニティホール）、食堂（ふれあいホール）が設けられている。
- ・エントランス（玄関）で靴を脱ぎ、各住戸へは上履きで出入りする。
- ・階段ホールや廊下では、居住者同士がソファに座りおしゃべりをしながら気軽に交流している。

図 16. コレクティブリビングに近似した高優質の例

6. まとめ

本調査では、西成区北西部で生活している在日高齢者の「住まい」に関する下記の実態が明らかとなった。

持ち家率が、在日コリアン居住者が密集している他地域と比べても非常に高い割合を示していること、家族世帯の人数に比べて空き室が目立つこと、築年数が古く、老朽化の傾向が強いこと、以上の住まいの特性から、今後の住宅の維持・管理に高齢者にとっては多大な負担が予想される。

一方で、住み慣れた地域で今後も暮らしていきたいという高齢者の定住意識も高く、住宅の中で、特に水回り（浴室やトイレ・台所・食堂）の改修のニーズや、自宅内事故箇所との関連も考えると、今後も居住者が高齢化し、身体能力が低下していく中で、改修ニーズに合わせた適切なサポートが急務であるといえる。

また、今後起こりえる自宅での暮らしの限界にも目を向けつつ、住み慣れた地域での生活を延長させる方策を検討する必要がある。短絡的に特別養護老人ホームのような「施設」での暮らし・入所暮らしありきではなく、その直前までの居住を担保する、在日高齢者の自宅の延長としての在宅のあり方を模索することにより、さまざまな苦労を経験しながら暮らしを地域に根付かせてきた在日高齢者の、今後のよりよい暮らしの方向性を見出すことが可能となると考える。

第Ⅶ章 地元コミュニティ（民団西成）の取り組みと地域再生の課題

岩山春夫・^{キムチュンジャ}金春子

1.はじめに

西成区における韓国・朝鮮籍人口（外国人登録者数 2010 年）は 5,357 人であり、そのうちの 65 歳以上の高齢者数は約 1,100 人である。この人達に対して地元の在日コミュニティである民団西成支部が、人権の擁護や地域のニーズに応えるべく様々な取り組みを行ってきた。本稿においては、その民団西成支部の具体的取組みと意義、及びその中心的活動の 1 つである通所介護施設デイサービス・サランバンの活動と意義の検討を通じて、地域再生のひとつの方向を明らかにすることを目指した。このことは、今後のこの地域でのコミュニティ再生の具体的活動の一助になるであろうと考える。

2.民団西成の取り組み

1) 歴史

西成支部は、もともと 1945 年 9 月 12 日、朝連西成分会として設置された。その後民族学校の方針をめぐる朝連本部と対立、1947 年 9 月 25 日に民団西成支部として結成された。1948 年から支部の下に 7 分団（天下茶屋、玉出、出城、旭梅、長橋、山王、鶴見橋）を置き、中でも天下茶屋地区は戦後、水石嶮で財を成した同胞が多く、支部財政を支える分団となった。1965 年 1 月には、鉄筋 3 階建の新会館を竣工した。（『大阪韓国人百年史—民団大阪 60 年の歩み—』）現在 30 代目の団長である。民団は 1994 年に在日本大韓民国居留民団から在日本大韓民国民団へと組織改組を行うことにより、本国へ帰るための組織から在日を生きるための運動体への変更を行った。組織的には地域活動を重視して、地域が地方を形成し、地方が中央を形成するというボトムアップの組織体制を形成している。これは一方の民族団体である朝鮮総連のボトムダウンの組織形成と比べて特徴的である。

2) 民団西成支部の活動

大きく 3 つの活動分野に分けることが出来る。それは、第一に日常活動分野であり、第二に民団の季節行事の分野、第三に民団の生活支援活動分野である。

【表 1】民団西成支部の取り組み

日常活動分野	ハングル講座、DVD 貸し出し、介護予防体操、テコンドー
季節行事の分野	新年会、成人式案内、桜の花見会、西成区民祭りへの参加、敬老行事
生活支援活動分野	生活相談、高齢者介護

第一の日常活動分野には、ハングル講座、DVD の貸し出し、介護予防の体操、テコンドーがある。これらは地域貢献的性格が強い。まずはハングル講座であるが、入門・初級・中級・上級のコースがあり、現在の利用者数は 35 名である。参加にあたって国籍や性別は問われない。水曜日の午前・午後に行われ、先生は 4 名（内日本人が 2 名）で、2004 年から今の形になった。しかし、教室は以前からやっていた。もともと民族団体による母国語教育は、戦後の帰国運動の中で祖国に帰った時に読み書き会話に不自由しないために行われたものであるから、その歴史は長い。しかし現在は多くの日本人が参加しており、また様々な分野の人たちが年代を超えて参加して来ており、さながらハングルを軸にした多文化コミュニティを形成している。次に、DVD の貸し出しサービスである。これは、2006 年に韓国語の教材として始めたものであるが、現在では地域の日本人も良く借りに来るようになった。DVD を通じて、韓国の歴史や文化を知ることになり、日本の文化や歴史の相対化に役立っている。次が介護予防の体操である。2006 年より大阪市の委託事業として始まる。要支援・要介護になる前の特定高齢者が対象であり、週 1 回（土）開催する。参加者は、現在 7 名（内 5 名が日本人で、沖縄の人も来ている）であり、指導は在日の方が行っている。そして最後がテコンドーである。これは直接的な民団の活動ではなく、テコンドーの団体に二階のスペースを貸しているものである。しかし韓国にルーツを持つテコンドーを習いに、地域の日本の子供達がこれまで多く練習に来ており、地域への貢献は大きい。現在参加者は 15 人ほどで、その対象は少 1 から社会人までである。

第二に民団の季節行事の分野には、新年会、桜の花見会、西成区民祭りへの参加、敬老行事、成人式の案内がある。新年会は婦人部が中心になって行われるが、今年は 50 人ほどの参加で、例年より少なかった。参加者の 3 分の 2 が女性である。食事、歌、踊り、お酒が振る舞われ、歌や踊りでは女性たちが軽やかにステップを踏んだ。男性はいつの間にか別の部屋へ移り宴会を始めた。4 月の桜の花見会は、ワールドカップの後より朝鮮総連

との合同でやってきた。今年は地震災害があったので花見そのものを自粛した。西成区民まつりへの参加は朝鮮総連と1年交代で行っており、従って2年に1回おこなう。昨年民団は屋台を出した。さらに70歳以上の方に記念品を贈る敬老行事も行っている。また、成人式は韓国式でやる本部サイドの行事の案内を行っている。

第三に民団の生活支援活動分野には生活相談と高齢者介護がある。この2つは活動の中心である。生活相談は団員との関係において最も重要な活動である。婚姻、出生、死亡、国籍変更、旅券申請、帰化申請、高齢者給付金、相続などの翻訳および手続きに関する相談がある。さらに行政や団員からの通訳の依頼などもある。この生活相談業務が地域の在日コミュニティネットワークに果たしている役割について事例を挙げて説明する。

・ 在日コミュニティ・ネットワークの事例（職員への聞き取り：2011年5月27日）

* Kさん。男性。在日一世。大邱（テグ）出身。単身。生保。

故郷に帰って来たいとKさんが民団事務所を訪れてきた。韓国に帰る当日、南港から釜山への乗船手続きにも行ってやり、居合わせた学生にも船の中での面倒を見てくれるよう頼んでやった。一世なので昔の言葉しか知らなかったけれど、無事に釜山から大邱までたどり着き、親類から大歓迎を受けて喜んで帰ってきた。彼は単身で生活しており、他者とのつながりもなかった。帰ってきてから、情報センターの在日高齢者相談員のところに、国際電話の掛け方などを教わりに頼って来ていて、相談員も自宅に赴いたりして親身にお世話していた。彼を情報センターにつないだのは、これも在日のケースワーカーで、信頼できる情報センターに頼んだものと思われる。Kさんはその後亡くなった。体が弱かったので病死と思われる。また、相談員の母も在日高齢者介護をやっているところに行きたいということで、デイサービス・サランバンを3年間利用された。その後機能低下されて、お風呂のあるところへと移られ、現在は体調を崩して入院されている。

このように、行政、行政的組織、民族団体における在日コリアンコミュニティネットワークは健在である。わざわざ南港まで出かけて行って乗船手続きをしてやる、自宅に赴いて必要なお世話をしてあげる、最も信頼の置けるところにつなげる。これらは、住民のニーズに親身に応えていこうとする本当の意味でのソーシャルワーカーの役割をそれぞれが果たしているから出来ている事である。生活相談業務はこのように人情味あふれるきめ細かな対応として行われており、地域コミュニティと結合している。

次に民団の生活支援活動分野のもう一つの柱である、在日コリアン高齢者介護施設デイサービス・サランバンの運営を見してみる。

3.通所介護施設デイサービス・サランバン

デイサービス・サランバンは民団事務所に併設してあり、長い歴史を持った運動体の中心的活動のもう一つの柱である。地域とのつながりは密であり、お年寄り達は遊び場のように利用している。

【表 2】 デイサービス・サランバンのプログラム<利用日：月・火・木・金>

9 : 30-----12 : 00-----16 : 30									
・ 来 所	・ バ イ タ ル チ ェ ッ ク	・ 日 常 動 作 訓 練	・ 生 活 相 談	・ 昼 食 (韓 国 食)	・ 時 節 柄 の 話 (誕 生 会)	・ (月 行 事)	・ レ ク レ ー シ ョ ン	・ 退 所	※

運営母体は社会福祉法人であり、在日高齢者の独居・閉じこもり対策を目的に開設された。2003年ふれあいデイ、同年デイサービス認可、2005年社会福祉法人へ事業委譲。定員10名、職員5名、韓国食が「自慢の一つ」(利用案内)である。車による送迎はなく、お風呂介護もない。現在(2011.02)登録利用者数15名で一日の平均利用者数は7名である。しかし、かつては登録利用者30名(2003年～2007年)で毎日定員一杯の利用者で賑やかに運営されていた。

デイサービス・サランバン利用者の平均年齢は81.6歳で、その内一世が10名で平均年齢は84.3歳、二世が5名で平均年齢は76.2歳である。一世対二世の割合は約7対3である。コミュニティ全体では平均年齢は75歳で、一世と二世の割合は3:7で、デイサービス利用者とは逆になる。この様にデイサービスはサランバンに限らず一世が圧倒的に多数であり、「一世のために」という発想もそこに起因していたと見る事が出来る。

【表3】 デイサービスサランバン利用者への聞き取り（2010年8月12～24日）

質問項目	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	
基本属性	①年齢	89歳	78歳	88歳	87歳	82歳
	②性別	女	女	女	女	女
	③渡航年代	1928年 (9歳)		1941年 (20歳)		1948年 (19歳)
	④出生地	韓国	日本	韓国	日本	韓国
	⑤世帯構成	単身	単身	単身	単身	娘孫と同居
	⑥家族構成	娘、息子	子供3人	娘2息子1	娘1息子1	子供6人
デイ利用契機・通所方法	⑦サランバンを何処で知ったか		娘が、友達のお母さんが行っているからと紹介してくれた	管内の民族団体だから始めから来ている	思い出せない	家が近いから良く知っている
	⑧なぜ選んだのか		ご飯がおいしかったから			一番近いから
	⑨他のデイは検討しなかったのか	別の日本のデイに行っている。食べ物が違うが皆親切だ	他にもデイがあるのは知っている	ここに来る前は月に1回日本のところに行っていた。ここが出来たからここに来たけれど、違いは特に無い。食事も70年間日本の食事を食べているのだから気にならない。		
	⑩通所手段	自転車、出来るだけ歩くようにしている	徒歩	自転車（1k離れた所から）	自転車	徒歩
デイへの要望	⑪送迎はあった方がいいか			いいと思う。送迎と風呂がないから他所に利用者を取られてしまっている		
	⑫お風呂はない方がいいか		お風呂はなくてもいい。事情は分かっているから	お風呂があった方がいい。家ではいるが月に1～2度は銭湯に行く	銭湯に行っている	

質問項目		Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん
デイの意義	⑬ サランバンはあなたにとっとうすか	ここに来て人に会えて楽しい。家に一人であるよりずっといい。		いいところだよ	ここに来ると、皆と話が出来たりテレビが見れたりして楽しい	花札をしたり、ご飯を食べたり、皆とおしゃべりしたり、家にいるのと一緒なところがいい。ここに来るのが楽しみ
今後の暮らし	⑮ 将来、動けなくなったらどうしますか	今では韓国で暮らせない。帰ることも無い。言葉がわからないし。		老人ホームもなかなか入れない。どんなに良い所でも家にはかないと思う。出来れば家にいて、あの世に行きたいな	息子と娘が何とかしてくれる	

・ Eさんは渡日の経緯やお仕事など、Bさんは二世としての生き立ちや生活のライフストーリーを、Dさんは少しお忘れのところが有った。質問事項に対する空白が出てきたのはお話が無かったのではなく、質問に対する回答に該当しなかったからである。

次に、高齢化した利用者にとってデイサービス・サランバンは生活の中でどういう意義があるのかを質問調査した。それをまとめたのが表 3 である。ここでは、5 名の方達に対して 15 項目の質問をした。

そこではほぼ全員が「ここに来て人に会えるのが楽しい」「家に一人であるよりずっといい」と、通ってくるのを楽しみにしている。お風呂がないことについては「なくてもいい、事情はわかっているから」と運営に理解を示しつつ、自宅のお風呂や銭湯を利用している。しかし、一方で不満もある。利用者の多くはサランバンの近くに居住している人達であるから、徒歩や自転車を通所手段にしているが、少し離れたところから来ている方は車での送迎を「あったほうがいい」と希望している。運営側からは、サービスが限られている（送迎やお風呂がない）事が、利用者が他所の施設を利用する理由として挙げられている。明らかに、車による送迎がないことが利用者減少の理由の一つである。

また 5 名のうち 2 名の方が「日本のデイサービスに行っている」ないしは「行っていた」と回答した。そこでは「食べ物が違うがみんな親切だ」「違いは特にない」ともいう。特にデイサービスが重要視し特徴にしている食事（韓国食）に対しても、「食事も 70 年間日本の食事を食べているのだから気にならない」とも回答している。「西成・在日コリアン高齢者の生活と居住サポート調査」における「在日外国人向けサービスができた場合、利用したいサービスはどれか」（複数回答）の質問に対して、「特にない」が 68%を超えているのを見ると、民族性を強調した介護へのニーズは減少してきていると考えられる。これらのことから、在日高齢者が日本のデイサービスに行っても、それなりにうまくやれているという推測が成り立つ。そのことは、在日高齢者と日本の高齢者が一緒にやっていける可能性を示していると言う事でもあり、在日高齢者と日本人高齢者を一緒に介護する多文化共生介護の必要性が出てきているという事でもある。このことがサランバンの利用者が減少してきていることの、もう一つの理由である。

多文化共生介護とは、元々行政が打ち出したものであり、在日と日本人を平等に扱う必要に迫られて出てきた発想である。多文化共生介護を掲げる京都にある特別養護老人ホームの担当者は、「制度(市町村入所基準)は、利用者の自己選択と公平性が基準であり、在日だけが利用すると言う事が出来なくなった。この様な社会状況の変化によって、現実を解釈しなおす必要が生まれてきて、多文化共生介護という概念が出て来た」と言う。しかしこの行政の意図とは別に、このことは日本の中で互いを認める介護、わかり合いからする介護が必要になっている事を意味するのである。

4. 地域再生の課題

民団西成支部の活動には内向きのもの（季節行事の分野）と外向きのもの（日常活動分野）とがある事を見てきたが、外向きの活動に勢いと拡大の可能性が見受けられる。高齢者介護の活動も多文化共生介護の方向であり、共に地域との接点の拡大、深まりが必然である。一方日本の社会は、閉塞的、孤立化が進んでいて、内に向かった競争と戦いに明け暮れており、そこでの敗北は人生の敗北を意味し、若者達の生きがたさを増幅させている。それは民族・文化を超えて、若者達が一応に突き当たっている現実である。そこで、地域コミュニティ（民団西成）の外へ向かう動き、すなわち地域に向かうエネルギーを受け止めて地域再生に活用していくことが考えられる。これは、労働運動の再生について言われているところの、“「まちがいなく多民族化、多文化化」することによるエネルギーと「どう取り組めるか」が問われている（鳥井一平・全統一労組書記長）”、とする視点と近いものがある。分野を違えても、おそらく同じような課題が現れてきているのだ。民団西成支部の地域に開かれた活動は、多民族、多文化が混住する西成における地域再生の拠点になる可能性を秘めているものであると考えられる。

1. 調査結果の要約

以上の調査結果をまとめてみると以下のとおりである。

まず、調査対象者の基本属性をみると、一人暮らしの高齢者が3割を超えている。高齢者の地域集中も見られ、65歳以上が10%を超えている地域が3つあり(旭3丁目、長橋3丁目、鶴見橋3丁目)、中でも鶴見橋3丁目は最も高い割合を示している。

世代は、1世より2世の割合が多い。1世の場合、日本への渡航年代は早い方で1926年に渡航している。一方、1988年に来日した新来定住者(=ニューカマー)もいる。出身地からは、市内の在日コリアン人口の集住する地域間で人の往来があったことが推察できた。学歴は全体の42.2%が中卒未満となっており、厳しい生活状況の中で基礎学力を身に付けることが非常に困難であったことが推察される。民族教育への関心はだんだん薄くなっているものの、母国語取得への意欲は強いことが見てとれた。識字能力に関しては日本語の読み書きができない方も2割ほどいることが指摘された。子ども世帯は比較的近くに居住している場合が多いようであるが、交流頻度はそれほど高くない。世帯収入は1カ月の収入が10万円未満の世帯が4割弱と厳しい状況にあり、「健康」問題の他に最も困っている点として指摘されている。

西成地区コリアンコミュニティの形成に関しては、1930年代には西成区北部に朝鮮人経営の各種サービス業が盛んに営まれていた。西成への移住、定住に関しては、同郷者ネットワークが重要な役割を果たしており、同郷集団による産業及び集住地域の形成にも影響を及ぼしていたことがわかった。また「教会」という宗教施設も、同胞同士の交流や持ちつ持たれつの生活基盤形成において重要な役割を果たしてきたことも注目し得る。日本人との関係については、定住が進むにつれ同胞や同郷にこだわらなくなる傾向も見られた。一方、女性の場合、定住化における複合差別の存在も見受けられた。そして地域産業の地盤沈下が進む中、若年層の流出と住民の高齢化が進み、なかんずく無年金状態にいる高齢者の経済的な困窮がひっ迫した状況にあることがうかがえた。

高齢者の行動範囲は「買い物」や「通院」による場合が多く、その他、自宅に風呂設備がないことも影響していると思われるが、交流などコミュニティ活動の一環として「銭湯」を訪問する高齢者も多くいることが報告された。全体的に高齢者の行動を阻害する要因は

地域内に少なく、交通の利便性などにより高齢者の行動には多様性が見られる。一方、地域内に位置する民族団体である民団支部を日常的に訪れる方は少数にとどまっていることが見受けられた。

介護に関連しては多くの方が家族介護志向を持っていることが分かった。その一方、地域居住者の中で2世の割合が増えていることもあり、日本人のヘルパーなどへの抵抗感は少ない。

介護保険に関しては、制度そのものへの周知度がそれほど高くないことが分かった。一方、介護保険の認定申請を行った場合は、8割弱が実際にサービスを利用しており、制度への理解を高めることが実際のサービスへのアクセスを増やしていく方法にもなることが推察される。ただ、保険料の負担を気にしている方もおり、全体的に在日コリアン高齢者の所得が低いことが影響していることと思われる。介護サービスに対する不満点としては、サービス内容の周知が十分にされていないことや、経済的な負担が多いことが挙げられた。今後必要とされるサービス内容としては在日高齢者を対象としたサークル活動や催し物が挙げられた。また、「配食・会食サービス」に対するニーズが存在していることにも注意を要する。

最後に福祉サービスへの情報源として、公共による広報や近所の付き合いによる効果が一定程度有効に機能していることが確認できた。

住まいに関してみると、持ち家率が、在日コリアン居住者が密集している他地域と比べても非常に高い割合を示しており、家族世帯の人数に比べて空き室が目立っている傾向が見られた。また築年数が古く、老朽化の傾向が強いことから、今後の住宅の維持・管理に多大な負担がかかるであろう点が憂慮される。

一方、住み慣れた地域で住み続けたいという高齢者の定住意識も高い。住宅改修については、特に水回り（浴室やトイレ・台所・食堂）の改修のニーズが高いことが指摘された。

民団西成支部による地域での取り組みは、「日常活動」、「季節行事活動」、「生活支援活動」の3つに大きく分けられる。また、通所介護施設(デイサービス)としてサランバンを運営しており、地域とのつながりを始め高齢者の団欒の場となっており、今後も地域の拠点として有効であると考えられる。

2. 地域再生に向けた課題と提言

以上、2010年6月～7月に亘って行ってきた調査結果を基に、2010年9月18日（土）にこりあんコミュニティ研究会主催で「多文化福祉に基づいたコリアンコミュニティの地域再生に関するワークショップ」を開催した。本ワークショップでは、今回の調査と共に2009年より本研究会の共同調査事業で行ってきた和歌山県下の在日コリアンコミュニティ調査の中間報告をベースにして、両地区に加え、大阪市生野区や京都市東九条、京都府宇治市ウトロ地区といった関西各地の在日コリアン集住地区にてまちづくり活動を実践している方々から、それぞれの地域の実態と各地の地域再生に向けた独自の取り組みについて報告が行われた。各地区の経験を共有することで、相対的な視点が生み出され、コリアンコミュニティの共通の課題や地区間の違いを認識できる機会となった。その後、ワークショップという形で報告者と参加者全員が円座となり、それぞれが発言する場を設けた。そこでは、高齢者福祉などコリアンコミュニティが直面する課題への対処として、世代間および周囲の地域との「つながり」の構築の仕方に議論が及び、質問紙による実態調査だけではなく、多様な記憶の記録化や地域間の連携促進や交流など、今回の調査を踏まえ、今後本研究会が行なうべき新たな実践課題も明確となった。

以上、今回の調査を通じて分かった知見を基に西成北西部に居住する在日コリアン高齢者の生活や住まい、そして当該地域の再生という側面で行くつかの課題と提言を提示したい。

第一に、第I章で指摘したように、高齢居住者の多くは一人暮らしであることから、通所介護や施設を中心とした対応以外にも自宅で生活している高齢者の見守り及び安否確認のような支援活動、あるいはサービスが必要であると考えられる。

第二に、日本語の識字能力が低い高齢者がいること、そして行政による広報から情報を得ている方が多くいることから、言語バリアを克服できる取り組みが幅広い側面から行われるべきであると考えられる。現在、介護保険制度等については、例えばハンゲルの案内マニュアルを配布したりしているが、その他の生活関連サービス(情報)についても同様のアプローチが模索されるべきであり、さらに居住者が多く集まるところなどに出かけて生活関連情報の周知を行うなど、より積極的な対応が求められよう。また社会福祉など担当窓口でも多言語対応が可能な人材の配置などを講ずるべきと考える。

第三に、持ち家率が高いが、ほとんどの住宅は老朽化が進んでおり、それによる新たなスラム化の恐れも憂慮される。また、家族世帯の人数に比べ空き室が目立っているなど、今後住宅管理や改修に関するサービスへのニーズが高まってくることが予想されるため、それに向けた対応が早急に求められている。なお、民族団体や、その活動への低いアクセス（15.5%のみが民族団体の活動に参加している）の現状から、今後は地域組織の強化やそれを通じたサービスデリバリの新たな手法の工夫も必要と考えられる。さらに、先述し

た住宅改修や管理などについては、新たなコミュニティビジネスのアイテムとしてこれらを活用して行く視点が必要ではないかと考えられる。

さらに付け加えれば、今回の調査地域には、在日コリアン居住者の他にもエスニックコミュニティが存在しており、例えば、沖縄からの移民コミュニティの場合は、民団西成支部の近所に「沖縄県人会」という拠点施設も有している。その他に地域内の韓国系新来定住者や住民の需要を狙った衛生放送支店の事務室が本調査地域の近所である鶴見橋商店街の界隈に設けられている。また地域に広く分布する廉価のアパート等には中国系の新来定住者の居住も見られ、そのようなエスニックグループ間の相互連携や、それらを資源化することによる地域再生実践の模索も必要と考えられる。既に100年を超える旧来定住者としての在日の経験は、何らかの理由により日本に新しい定住の場を求めてきた新来定住者にとっては、先験的な経験知として大切な資源であると言えよう。したがって、新旧来の経験が交錯する、あるいはそれを媒介させることは、様々な形で存在する定住化に伴う生活面での困難や適応の問題をクリアすることにもつながるのではと考えられる。以上は、本研究の限界でもあり、課題でもあることを最後に指摘しておきたい。今回の調査を踏まえて、今後の研究課題として当該地域に居住する在日コリアンをはじめとする他のエスニックコミュニティに対しても生活現状や課題についての調査を行い、エスニックコミュニティ間、そして新旧来の経験知が交錯できるプラットフォームの構築を通じて、人や資源を地域に呼び寄せるための新たな地域再生のプランを模索していくことが考えられる。

【参考文献】

大阪市外国籍住民施策検討に係る生活意識等調査実行委員会、2009、『外国籍住民のコミュニティ生活意識実態調査・外国籍住民との共生社会実現のための意識調査報告書』、大阪市

大阪市学務部社会課（1934）、「在阪朝鮮人の生活状態」、近現代資料刊行会企画編集（2006）、『日本近代都市社会調査資料集成 9 大阪市・府社会調査報告書 39』近現代資料刊行会

大阪市社会部労働課（1933）、「朝鮮人労働者の近況」、朴慶植編（1976）、『在日朝鮮人関係資料集成第 5 巻』、三一書房

大阪市役所（1954～2010）、『大阪市統計書』第 41 回（昭和 28 年版）～第 98 回（平成 22 年版）

大阪府警察部（1933）、『大阪府警察統計書 昭和 8 年』

大阪府警察部（1938）、『大阪府警察統計書 昭和 13 年』

川端直正、『西成区史』、西成区市域編入四〇周年記念事業委員会、1968

金賛汀（1985）、『異邦人は君が代丸に乗って－朝鮮人猪飼野の形成史－』、岩波新書
工藤由貴子・平野順子・袖井孝子（1998）、「高齢者と都市の生活環境(第 1 報)：地域特性と生活行動」、日本家政学会誌 49(11)、1199-1208 頁。

佐々木信彰（1996）、「1920 年代における在阪朝鮮人の労働＝生活過程－東成・集住地区を中心に」、杉原薫・玉井金五編（1996）、『増補版 大正・大阪・スラム』、新評論

慎和枝、『西成区在日コリアン人権意識調査報告書』、ヒューマンライツ教育財団、1998
篠田紀行・松本真澄・谷口僚一・上野淳（2007）、「京都心下町地域における在宅高齢者の地域生活様態と外出行動に関する調査：千代田区神田地域のケーススタディー」
日本建築学会技術報告集 13(26)、673-678 頁。

杉原達（1998）、『越境する民：近代大阪の朝鮮人史研究』、新幹社

杉原薫・玉井金五編（1996）、『増補版 大正・大阪・スラム』、新評論

鈴木広、1986『都市化の研究：社会変動とコミュニティ』、恒星社厚生閣、1986

高野昭雄（2009）、『近代都市の形成と在日朝鮮人』、人文書院

竹嶋祥夫（1995）、「既成市街地における老人の外出行動について：立地条件の違いによる高齢者の生活行動に関する研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集・E-2、建築計画 II、住居・住宅地・農村計画・教育、225-226 頁。

谷富夫、1996、「ライフ・ヒストリーとは何か」、谷富夫編、ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために、世界思想社、1996

谷富夫編著（2002）、『民族関係における結合と分離：社会的メカニズムを解明する』、ミネルヴァ書房

- 外村大 (2004)、『在日朝鮮人社会の歴史学的研究：形成・構造・変容』、緑蔭書房
- 西成田豊 (1997)、『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』、東京大学出版会
- 河明生 (1997)、『韓人日本移民社会経済史：戦前篇』、明石書店
- 平野・長友・平木、2008、「福岡市における在日コリアン高齢者の生活と福祉サービスの利用に関する調査」、『Sai』 Vol.59, pp.4-6、KMJ(社)大阪国際理解教育研究センター
- 部落解放同盟大阪府連組織局部落解放研究所編集部 (1974.3)、『部落解放第 52 号』
- 新井 信幸、2007、「川崎・戸手四丁目河川敷地区の経年的住環境運営に関する研究」、『住宅総合研究財団研究論文集』 (34), pp. 101-112
- 島村恭則、2010、『<生きる方法>の民俗誌：朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究』、関西学院大学出版会
- 泉州地域在日高齢者福祉実態調査実行委員会(社会福祉調査研究会代表中山徹)、2007、『泉州地域在日高齢者福祉実態調査』
- 入管協会、2010、『在留外国人統計 (平成22年版)』
- 韓 勝旭、2007、「権利関係から見た在日コリアンが集住する長屋ブロックの空間変容」、『日本建築学会計画系論文集』 (619)、pp. 93-99、日本建築学会
- 平山他、1990、「在日韓国朝鮮人の居住実態とその集住地域の動態」、『日本都市計画学会学術研究論文集』 pp.145-150、日本都市計画学会
- 福本拓、2004、「1920年代から1950年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷」、『人文地理』、pp.42-57
- 三輪嘉男、1983、「在日朝鮮人集住地区の類型と立地特性」、『在日朝鮮人研究』 11. pp. 54-69
- 本岡 拓哉、2006、「神戸市長田区「大橋の朝鮮人部落」の形成--解消過程」、『在日朝鮮人史研究』 (36)、pp. 207-230、緑蔭書房
- 吉田他、1995、「社会資本整備過程から見る在日韓国・朝鮮人集住環境の特性」、『日本都市計画学会学術研究論文集』 pp.145-150、日本都市計画学会
- 李度潤、2010、「日本の都市における外国人集住地区のまちづくりとそのコミュニティに関する研究：オールドカマーズ・在日コリアンを事例として」、『コリアンコミュニティ研究』、こりあんコミュニティ研究会、pp.51-58
- Atkinson, R. and K. Kintrea, 2001, 'Disentangling Area Effects: Evidence from Deprived and Non-deprived Neighbourhoods,' *Urban Studies*, Vol. 38, No. 12, pp.2277-2298.
- Bertaux, D.: *LES R'ECITS DE VIE : PERSPECTIVE ETHNOSOCIOLOGIQUE*, Paris: NATHAN.(小林多寿子訳：ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティヴ、ミネルヴァ書房、2003)
- Somerville, P. 1998, 'Explanations of Social Exclusion: Where Does Housing Fit in?,' *Housing Studies*, Vol.13, No.6, pp.761-780.
- Walker, A. and C. Walker eds., 1997, *Britain Divided: The growth of social exclusion in the 1980s and 1990s*, London: CPAG.

付 録

1. 調査協力をお願い(事前調査案内チラシ)



「多文化福祉のまちづくり」 のための調査協力をお願い

ヒューマンライツ教育財団

5月より西成在日コリアン高齢者(65歳以上)の 生活と居住実態に関する調査が始まります。

本調査は、在日コリアン高齢者のみなさまの生活と居住の現状を把握し、今後この地域で進めていく「多文化福祉のまちづくり」に反映させていくことを目的としています。「ヒューマンライツ教育財団」を調査母体とし、「こりあんコミュニティ研究会・西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会」が調査を受託、民団西成支部と朝鮮総連西大阪支部のご協力を得て実施いたします。

調査の進め方は、在日コリアン高齢者のみなさまに、福祉サービスの利用状況や、利用のご意向、さらに現在の住環境、及び多文化福祉のまちづくりに関連した要望などを中心に、ご自宅を訪問し、簡単なお話をうかがう聞き取り調査(記入は調査員が行います)となります。また、ご協力の了承をいただいた方には、もう少し詳しくお話をうかがう調査を行いたいと思います。

本格的なご自宅への訪問調査は、5月の連休明けをめどに進めていく予定です。
みなさまのご協力をお願い申し上げます。

本調査に関するお問い合わせ

① (有) 地域・研究アシスト事務所 (四井 恵介)

Tel : 06-6624-1127

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町 1-50-16 月岡ビル 505

② こりあんコミュニティ研究会・西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会 (全 弘産 じゅん・ほんぎゅ)

Tel : 06-6605-3448

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 大阪市立大学都市研究プラザ気付

※1 本調査でうかがった内容は、すべて慎重に統計処理を行うので、お答えいただいた内容が漏洩したり、本調査以外の目的で使用することは一切ありません。また、個人が特定できる名前やプライバシーに関連した内容が漏れることも絶対ありませんのでご安心ください。

※2 本調査は、在日コリアン高齢者のみなさまのご協力を得て実施させていただくものです。答えたくない質問に対しては、ご回答いただかなくても結構です。その他、本調査に関するご意見・ご質問などございましたら、上記の問い合わせ先までご連絡ください。

平成 22 年 5 月 吉日

各 位

在日高齢者アンケート調査のお知らせとお願い

拝啓 薫風の候 皆様方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は、何かと当支部事業にご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。4月25日、支部定期（任期）大会が開催され新旧の支団長が交代となり、新たに 私、車齊喆が支団長に選出されました。ここに紹介をさせていただくとともに、相変わらぬご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

さて、このたび大阪市大の全弘奎准教授による、在日高齢者の生活環境問題と居住状態を調査することとなりました。地域社会に根づいているとはいえ、在日の置かれた立場はさまざまです。

この調査は、よりよい福祉のまちづくりを目指し、また在日の現況を把握するよき機会であり、支部においても全面的に応援をしたいと考えています。また、支部管内の在日高齢者の状況を、詳細に把握することはとても大変です。このことを有意義な調査ととらえています。

つきましては、上記の趣旨をご理解いただき、調査の際には、ぜひご協力の程よろしくお願い申し上げます。

なお、調査等に関する不明な点、ご質問がございましたら、支部までご一報ください。

敬具

韓 国 民 団 西 成 支 部
支 団 長 車 齊 喆

* お問い合わせ先

民団西成支部 電話 06-6651-4777 担当 金チュンジャ

3. 関連記事の紹介

<http://www.mindan.org/front/newsDetail.php?category=0&newsid=13116>

在日福祉現況調査 大学研究者が高齢者 750 人対象に

【大阪】「こりあんコミュニティ研究会」西成担当調査部会（全泓奎運営委員長）は、民団西成支部管内に在住する 65 歳以上の同胞高齢者 750 人を対象に、生活実態と居住の現状についてアンケート調査に入った。今回の調査には大阪市立大をはじめとする各大学から研究者や講師クラスの有志が加わっている。

主な項目は福祉サービスの利用状況や医療、食生活など。民団西成支部（車齊喆支団長）の協力を得て、1 軒ずつ聞き取り調査を行っている。調査・研究の成果は、今後の「多文化福祉のまちづくり」の実現に向けた基礎資料としていく。

調査に加わったある日本人講師は、「当時、日本社会に受け入れてもらえなかった 1 世の苦しい生きざまや、その思いがせきを切ったように吐き出され、胸が痛かった」と述べた。同支部でデイサービスを担当している金春子さんは、「支部でもなかなか把握できていなかったお年寄りの現状を知ることができた」と喜んでいる。

全運営委員長は「在日の生々しい生活の歴史を聞いて、それに対してどう対応していくのかが今後の課題。在日のコミュニティについて真剣に取り組まねば」と語った。

（2010.7.28 民団新聞）

西成・在日コリアン高齢者の生活と居住サポート調査

調査協力をお願い

本調査は、西成在住の在日コリアン高齢者の生活と居住実態を把握し今後この地域を対象に進めていこうとする多文化福祉のまちづくりにそれぞれのニーズを反映させていくために、民団西成支部、総連西大阪支部の協力を得て実施するものであります。

本調査では、在日コリアン高齢者の皆さんに福祉サービスの利用状況や利用意向、さらに現在の住環境、及びまちづくりに関連した要望などを中心に、聞き取りをさせていただきます。

本調査でうかがった内容は、すべて慎重に統計処理を行うので、お答えいただいた内容の漏洩や、本調査以外の目的で使用することは一切ありません。また、個人が特定できるお名前やプライバシーに関連した内容が漏れることも絶対ありませんのでご安心ください。

本調査は、在日コリアン高齢者皆さんのご協力を得て実施させていただくものです。答えたくない質問に対しては、お答えいただかなくても結構です。その他、本調査に関連して何かご意見・ご質問などございましたら、下記事務局までご連絡ください。それでは、どうぞよろしく願いいたします。

調査委託：財団法人ヒューマンライツ教育財団

調査主体：こりあんコミュニティ研究会

西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会

調査協力：民団西成支部、朝鮮総連西大阪支部

大阪市立大学都市研究プラザ社会包摂ユニット

本調査に関するお問い合わせ

(有) 地域・研究アシスト事務所 (四井 恵介)

Tel : 06-6624-1127 / 〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町 1-50-16 月岡ビル 505
こりあんコミュニティ研究会・西成在日コリアン高齢者の生活と居住サポート研究部会 (全泓奎 じょん・ほんぎゅ)

Tel : 06-6605-3448 / 〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3 - 3 - 138 大阪市立大学都市研究プラザ気付

調査員の方へ（留意事項）

調査票の調査項目に沿って調査対象者に質問し、回答内容に該当すると思われる回答番号に 印を付けてください。

調査票への記入は必ず鉛筆で行い、回答者の話された内容はできるだけそのまま詳しく記入してください。質問内容に外れた回答であっても、問題点に関連したり、重要と思われる話は、欄外などに記入しておいてください。

回答者の話を一方的に中断せず、話の腰を折らないように、できるだけ具体的な話に沿って質問を進めてください。

回答者が質問内容に疑問を持たれた場合には、質問の趣旨・内容を十分に説明して理解を得るように努めてください。

回答者が答えたくないと言われた質問項目については無理に聞かないようにお願いします。その際には、回答欄に「回答拒否」と記入し、拒否された時の理由や状況などを可能な範囲で記載しておいてください。

調査員の判断で質問内容を勝手に変更することのないようにお願いします。

調査を終了する前には調査票全体をチェックし、聞き漏れがないか、確認をお願いします。

回答者に対して、調査に長時間ご協力いただいたことについてのお礼を伝えてください。

聞き取り調査終了後は、調査票は回答を記入したその日のうちに調査員が清書し、必ずその日のうちに事務局（（有）地域・研究アシスト事務所（四井 恵介））に提出してチェックを受けてください（基本的に事務局には午後 10 時まで人が詰めている予定ですが、調査員の方が夜に聞き取りをした場合、事務局に誰か詰めているか確認したほうが確実かと思えます）。

聞き取り調査を実施している中で調査員が感じた調査対象者の印象や特記事項について、調査票最終ページのケース記録にできるだけ詳しく記入をお願いします。

調査日時		調査員名		調査票整理番号	
居住者の住所	大阪市西成区 丁目 番地				
性別	男 女	生年月日	19 年 月 日	（ 歳）	
世帯構成	一人暮らし 夫婦二人暮らし（どちらも 6 5 歳以上） 夫婦二人暮らし（どちらかが 6 5 歳以上） 子供や孫と同居（本人との関係： ） その他（ ）				

西成・在日コリアン高齢者の生活と居住サポート調査

【地域での暮らし・コミュニティ】

問1) あなたの出生地についてお答えください。

- 1. 日本 (問1 - 1へ)
- 2. 韓国・朝鮮 (問1 - 2・1 - 3へ)
- 3. その他 ()

問1 - 1) 日本国内の出身地を具体的に教えてください。

都・道・府・県 郡・市 区・町・村

問1 - 2) 韓国内の出身地を具体的に教えてください。

道 市

問1 - 3) 日本への渡航年代を教えてください。(最初)

年頃

問2) あなたが、普段から出かけるところを、別紙の地図上にシールで貼ってください。

問3) 一緒に住んでいる家族以外の人と、普段どのようなことをされますか。

から について、その頻度を5段階でお答えください。

よくある ときどきある まれにある ほぼない 全くない

おしゃべりをする。				
お惣菜などを分け合う。				
お金の貸し借りをする。				
買い物に出かける。				
散歩などに出かける。				
民族団体の活動に参加する。				
地域活動(町内会イベント、ふれあい喫茶、老人会など)の活動に参加する。				

問4) 健康・介護の不安や、生活に困った際に、誰に相談しますか。

(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 家族や親族
2. 友人・知人・近所の人
3. 民族団体の相談窓口(職員)
4. 市役所(福祉事務所や保健センターなども含む)の窓口(職員)
5. 地域包括支援センターの職員
6. 民生委員
7. 医師
8. 病院の相談員(医療ソーシャルワーカー)
9. 介護支援専門員(ケアマネージャー)
10. 訪問介護員(ホームヘルパー)
11. 訪問看護師
12. 相談相手がいない
13. その他()

【健康・医療】

問5) 健康保険に加入していますか。

1. はい(問5 - 1へ)
2. いいえ(問5 - 2へ)

問5 - 1) 加入されている健康保険の種類について教えてください。

1. 国民健康保険
2. 勤務先健康保険
3. その他の医療保険

問5 - 2) 加入されない理由は何ですか。

1. 加入方法がわからない。
2. 保険料が高い。
3. 健康なので、必要ない。
4. その他()

問6) かかりつけの病院はありますか。

1. ある(問6-1へ)
2. ない(問6-2へ)

問6-1) かかりつけの病院がある場合、その施設名と所在地を教えてください。

施設名() 所在地()

問6-2) かかりつけの病院や医者がない場合、その理由は何ですか。

(当てはまるもの全てに をつけてください。)

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 健康だから | 6. 医師の話が難しいから |
| 2. 近所がないから | 7. 薬局等で薬を購入し、対応しているから |
| 3. 医療費が高く感じるから | 8. 通院するのが面倒だから |
| 4. 保険料を滞納しているから | 9. その他() |
| 5. まわりが日本人ばかりで利用しにくいから | |

【介護保険・サービスの利用状況・意志】

問7) 家族が介護することは当然のことと思いますか。

1. とてもそう思う。
2. ある程度そう思う。
3. あまりそう思わない。
4. まったくそう思わない。

問8) 日本人のヘルパーが介護のため自宅を訪ねてくるのは気になりますか。

1. 気になる。
2. どちらかと言えば気になる。
3. どちらかと言えば気にならない。
4. まったく気にならない。

問9 - 5) 介護保険の要介護認定申請をしていない理由はなんですか。

(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 今は何とか自分でやっているので、介護サービスの必要がないため
2. 家族や親戚が介護をしてくれるため
3. 介護保険サービス以外の福祉サービスが充分なため
4. 他人の世話になりたくないため
5. 行政に頼りたくないため
6. 介護保険制度を知らないため
7. 制度がわかりにくい(申請方法がわからない、など)
8. 介護サービスの利用料の支払いを負担に感じるため
9. サービスの内容が在日コリアンに配慮されたものになっていないため
10. その他()

問10) [全ての方にお聞きします] 介護サービスについて、不満に思う点はなんですか。

(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. どのようなサービスがあるのかよく分からない。
2. サービスの内容が不十分である。
3. 利用方法がわかりにくい。
4. 利用料が高く感じられる。
5. 介護保険料が高く感じられる。
6. 言葉が通じない。(もしくは通じにくい。)
7. 事業者や施設の職員との関係がうまくいかない。(もしくはうまくいか不安である。)
8. サービス内容が在日コリアンに配慮されたものになっていない。
9. 在日コリアンが運営している事業者や施設サービスを利用したい。
10. 特に不満はない。

【介護保険サービス以外の利用実態】

問11) 介護保険サービス以外の保健福祉サービスを受けた事がありますか。(最近3年間)

1. ある(問11 - 1へ)
2. ない(問11 - 2へ)

問11 - 1) 具体的にはどういったサービスですか。

(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 配食サービス
2. 会食サービス
3. その他()

問 1 1 - 2) 介護保険以外の保健福祉サービスを利用していない理由は何ですか。

(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 今はサービスを必要としていないため
2. 家族や親戚が介護してくれるため
3. 他人の世話にはなりたくないため
4. サービスがある事を知らなかったため
5. サービス利用の手続きが分からないため
6. サービスの内容が分からないため
7. 利用料の支払いに負担を感じるため
8. 近所にサービスを提供する施設がないため
9. その他 ()

問 1 2) [全ての方にお聞きします] 介護保険以外の保健福祉サービスで、今後、利用したいサービスはありますか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 配食サービス 2. 会食サービス 3. 特にない
4. その他 ()

【在日外国人向けサービスに関する意見】

問 1 3) 下記のような在日外国人向けサービス (介護保険サービス・介護保険外サービスいづれも) ができた場合、利用したいサービスはどれですか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 配食・会食サービス
2. 韓国・朝鮮語でも対応可能な緊急通報装置システム
3. 在日高齢者のための催し物 (祭り・音楽祭など)
4. 在日高齢者のためのサークル活動 (民族舞踊・識字教室・教養講座)
5. 韓国・朝鮮語がわかるヘルパーの派遣
6. 韓国・朝鮮語がわかる職員のいる通所・入所施設
7. その他 ()
8. 特にない

【福祉サービスの情報源】

問14) 介護保険をはじめとする高齢者福祉サービスに関する情報を誰(どこ)から得ていますか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)

1. 役所の広報誌・パンフレット
2. 町内会や自治会などの広報誌・パンフレット
3. 民族団体の広報誌・パンフレット
4. 新聞
5. ラジオ・テレビ
6. インターネット
7. 家族や親戚
8. 友人・知人・近所の人
9. 民族団体の窓口(職員)
10. 市役所(福祉事務所や保険センターなどを含む)の窓口(職員)
11. 地域包括支援センターの職員
12. 民生委員
13. 医師
14. 病院の相談員(医療ソーシャルワーカー)
15. 介護支援専門員(ケアマネージャー)
16. 訪問介護員(ホームヘルパー)
17. その他()
18. 特にない

【学歴】

問15) 最終学歴について、お答えください。

1. 未就学
2. 小学校卒業(国民学校、その他の小学校に準ずるような教育機関を含む)
3. 小学校中退
4. 中学校
5. 中学校中退
6. 高等学校
7. 高校中退
8. 大学以上(短大・専門学校・高専を含む)

問16) 民族学校に通われたことはありますか。

1. ある
2. ない

【識字状況】

問17) 日本語の読み・書き・会話は、どの程度できますか。また、それらが困難な場合は、具体的な程度をご記入ください。

1. 読み	できる()	できない()
2. 書き	できる()	できない()
3. 会話	できる()	できない()

問18) 韓国・朝鮮語の読み・書き・会話は、どの程度できますか。また、それらが困難な場合は、具体的な程度をご記入ください。

1. 読み	できる()	できない()
2. 書き	できる()	できない()
3. 会話	できる()	できない()

【世帯収入の現状】

問19) あなたの世帯(家)の収入の種類はどれですか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)また、 の場合は、その種類に をつけてください。

1. 自分の公的年金 [1-1. 国民年金() ・ 1-2. 厚生年金() ・ 1-3. 共済年金()]
2. 配偶者の公的年金 [2-1. 国民年金() ・ 2-2. 厚生年金() ・ 2-3. 共済年金()]
3. 私的年金 (郵便局・生命保険会社など)
4. 自分の貯蓄や株の配当金
5. 配偶者の貯蓄や株の配当金
6. 不動産などの財産収入
7. 自分で働いて得ている収入
8. 配偶者が働いて得ている収入
9. 子供や孫からの金銭的支援
10. 生活保護
11. 在日外国人無年金高齢者に対する給付金
12. その他 ()

問20) あなたの世帯(家)の一ヶ月の平均収入はどれくらいですか。

1. 5万円未満	2. 5-10万円未満	3. 10-15万円未満
4. 15-20万円未満	5. 20-25万円未満	6. 25-30万円未満
7. 30-40万円未満	8. 40-50万円未満	9. 50-70万円未満
10. 70万円以上	11. わからない	

【食生活】

問24) 普段の食事はどうされていますか。最も当てはまるもの1つに をつけてください。

- | |
|----------------------|
| 1. 自炊をしている。 |
| 2. 店で売っているお惣菜を買ってくる。 |
| 3. 外食をしている。 |
| 4. 出前(店屋物)をとっている。 |
| 5. 家族に作ってもらっている。 |
| 6. もらいものなどで済ましている。 |
| 7. 配食サービスを受けている。 |
| 8. その他() |

【住まいについて】

問25) 住まいの種類、居住地、そこで暮らした期間をお聞かせください。現在と、その直前、今までに最も長く暮らしていた住まいについてお答えください。住まいの種類は下記の欄 1 からお選びください。

【記入例】

[最も長く暮らしていた住まいについて]

暮らした期間	1973年 4月頃から 2002年 10月頃まで
居住地(住所)	大阪市生野区桃谷3丁目
住まいの種類 1	

1: 下記の選択肢から選んでください。

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 民間賃貸住宅(アパートや長屋、文化住宅など) | 公営住宅(市営住宅、府営住宅) |
| 持ち家(戸建て住宅や分譲マンションなど) | 社宅・寮・飯場 |
| 高齢者入所施設(老人ホームなど) | その他 |

【現在の住まいについて】

暮らした期間	年 月頃から現在まで
住まいの種類 1	

【直前(現在の住まいの前)の住まいについて】

暮らした期間	年 月頃から 年 月頃まで
居住地(住所)	
住まいの種類 1	

【最も長く暮らした住まいについて】

暮らした期間	年 月頃から	年 月頃まで
居住地		
住まいの種類 1		

問26) 現在の住まいは、どのようなルートで見つけましたか。(当てはまるもの全てにをつけてください。)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 韓国朝鮮語のできる不動産屋を通じて。 2. 一般的な不動産屋を通じて。 3. 知人・親類等を通じて。 4. 大家から直接。 5. 公的機関や相談窓口等を通じて。 6. 民族団体等を通じて。 7. その他 () |
|--|

問27) 現在、住まいの部屋数は、どれくらいですか。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 1(D)K 未満 2. 2(D)K 3. 3(D)K 4. 4(D)K 以上 |
|--|

問28) 現在、住まいの広さは、どれくらいですか。

() 畳) あるいは() m²)

問29) 現在、住まいには、どのような設備がありますか。

(当てはまるもの全てにをつけてください。)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 風呂 2. トイレ 3. 台所 4. 共同風呂 5. 共同トイレ 6. 共同台所 |
|--|

問30) 家の中での主な楽しみは何ですか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 家族・友人との会話や食事 | 2. 庭や軒先での園芸 |
| 3. ペットとのふれあい | 4. テレビ・ラジオの鑑賞 |
| 5. 読書や裁縫など趣味 | 6. 特にない |
| 7. その他 () | |

問31) 現在、住まいの満足度は、どの程度ですか。

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. おおいに満足 | 2. やや満足 |
| 3. やや不満 | 4. おおいに不満 |

問32) 日常生活において、ご自身、及びご家族・同居人に、車いすや杖を使用している方はいますか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)

- | |
|-----------------------------|
| 1. いない。 |
| 2. 車いす生活者がいる。 |
| 3. 杖使用者がいる。 |
| 4. 車いす、杖は使用しないが、つたえ歩きをしている。 |
| 5. その他 () |

問33) 現在の住まいで、ご自身やご家族、同居人が、転倒・転落事故が起きたことはあります。

1. ある(問33-1へ)
2. ない(問33-2へ)

問33-1) 転倒・転落事故が起きた場所(箇所)はどこですか。(当てはまるもの全てに をつけてください。)

- | | |
|--------|------------------|
| 1. 階段 | 2. 敷居や、玄関などの段差 |
| 3. 風呂 | 4. トイレ |
| 5. 寝室 | 6. 台所・食堂 |
| 7. 洗面所 | 8. 廊下 9. その他 () |

問33-2) 住まいの中で、ヒヤッとしたことはありますか。

- | |
|-------|
| 1. ある |
| 2. ない |

問34) 住まいの中で、不都合や不便を感じる場所(箇所)はありますか。

1. ある(問34-1へ)
2. ない(問34-2へ)

問34-1) 現在、最も不都合や不便を感じる場所(箇所)はどこですか。

- | | |
|-----------|----------------|
| 1. 階段 | 2. 敷居や、玄関などの段差 |
| 3. 風呂 | 4. トイレ |
| 5. 寝室 | 6. 台所・食堂 |
| 7. 洗面所 | 8. 廊下 |
| 9. その他() | |

問34-2) 現在の住まいはバリアフリーになっていますか。

- | |
|--------|
| 1. はい |
| 2. いいえ |

問35) 現在の住まいに住み続けたいと思いますか。

1. はい(問35-1へ)
2. いいえ(問35-2へ)

問35-1) 住み続けたい理由は、何ですか。

- | |
|---------------------------|
| 1. 知人や友人、親戚などが近くに住んでいるから。 |
| 2. 商店や病院、駅などが近くにあり、便利だから。 |
| 3. 今の住まいに住み慣れているから。 |
| 4. 住み替えることを特に考えてこなかったから。 |
| 5. 住み替えるだけの体力に自信がないから。 |
| 6. 住み替えるだけの資金がないから。 |
| 7. その他() |

問35-2) 住み続けたくない理由は、何ですか。

1. 住まいの設備に不満があるから。
2. 住まいの広さに不満があるから。
3. 健康に不安をかかえるようになったから。
4. 知人や友人、親戚が近隣にいないから。
5. 商店や病院、駅が近隣にないから。
6. すでに住み替える予定があるから。
7. その他 ()

問36) 現在の住まいを改修したいと思いますか。

1. はい(問36-1へ)
2. いいえ(問36-2へ)

問36-1) 住まいのどこの場所(箇所)を改修したいですか。

1. 階段
2. 敷居や、玄関などの段差
3. 風呂
4. トイレ
5. 寝室
6. 台所・食堂
7. 洗面所
8. 廊下
9. その他 ()

問36-2) 改修したいと思わない理由は何ですか。

1. 住まいの設備・広さ等、特に不満がないから。
2. 改修について、相談できる人がいないから。
3. 身近に改修した事例もなく、情報が入らないから。
4. 悪徳業者などに不安を感じるから。
5. 賃貸住宅や施設などで、自由に改修できないから。
6. 改修するだけの資金がないから。
7. 既に改修しているから。
8. その他 ()

以上で、聞き取り調査は終わりです。ご協力ありがとうございました。

引き続きもう少し詳しくお話しを聞かせていただけますか。 (はい いいえ)

その際は調査員が再度訪問させていただきますので、ご協力お願いいたします。

5. 単純集計表

基本属性

世帯構成

	度数	%	有効%	累積%
有効 一人暮らし	41	31.8	31.8	31.8
子供や孫と同居	41	31.8	31.8	63.6
夫婦二人 (どちらも65歳以上)	34	26.4	26.4	89.9
夫婦二人 (どちらかが65歳以上)	9	7.0	7.0	96.9
その他	4	3.1	3.1	100.0
合計	129	100.0	100.0	

性別・年齢・住所

		年齢(階層別)							
		65歳以上 75歳未満		75歳以上 85歳未満		85歳以上		合計	
		性別		性別		性別		性別	
		男	女	男	女	男	女	男	女
		度数	度数	度数	度数	度数	度数	度数	度数
住所	旭 3	3	3	1	3	1	2	5	8
	花園南 1	0	0	1	1	0	0	1	1
	橋 3	0	1	0	1	0	1	0	3
	山王 1	0	0	0	1	0	0	0	1
	出城 3	0	2	1	2	0	0	1	4
	松 3	1	0	0	0	0	0	1	0
	千本北 2	1	2	1	0	0	2	2	4
	中開 3	0	1	1	0	1	1	2	2
	潮路 1	0	1	0	0	0	0	0	1
	長橋 1	0	1	0	0	0	0	0	1
	長橋 3	1	4	3	4	0	1	4	9
	津守 3	2	0	0	0	0	1	2	1
	鶴見 2	0	0	0	1	0	0	0	1
	鶴見橋 1	3	3	4	2	0	0	7	5
	鶴見橋 2	4	5	1	0	1	0	6	5
	鶴見橋 3	5	2	0	1	1	5	6	8
	天下茶屋東 1	1	0	0	1	0	0	1	1
	南開 1	0	0	1	0	0	0	1	0
	南津守 3	1	1	1	1	1	0	3	2
	南津守 4	1	2	1	3	0	0	2	5
梅南 2	0	2	0	0	0	0	0	2	
梅南 3	4	4	1	1	0	0	5	5	
北開 2	0	0	0	0	0	1	0	1	
北津守 2	0	2	0	0	0	0	0	2	
北津守 4	3	4	1	0	0	0	4	4	
合計	30	40	18	22	5	14	53	76	
	計	70	計	40	計	19	計 (総数)	129	

問 1) あなたの出生地についてお答えください。

	度数	%	有効%	累積%
有効 日本	90	69.8	69.8	69.8
韓国, 朝鮮	39	30.2	30.2	100.0
合計	129	100.0	100.0	

問 1-1) 日本国内出身地 都道府県

	度数	%	有効%	累積%
有効 大阪	54	41.9	61.4	61.4
兵庫	8	6.2	9.1	70.5
京都	4	3.1	4.5	75.0
広島	3	2.3	3.4	78.4
東京	3	2.3	3.4	81.8
愛知	2	1.6	2.3	84.1
静岡	2	1.6	2.3	86.4
岡山	1	0.8	1.1	87.5
宮崎	1	0.8	1.1	88.6
埼玉	1	0.8	1.1	89.8
三重	1	0.8	1.1	90.9
山口	1	0.8	1.1	92.0
滋賀	1	0.8	1.1	93.2
秋田	1	0.8	1.1	94.3
新潟	1	0.8	1.1	95.5
奈良	1	0.8	1.1	96.6
福井	1	0.8	1.1	97.7
福岡	1	0.8	1.1	98.9
和歌山	1	0.8	1.1	100.0
合計	88	68.2	100.0	
欠損値 非該当	39	30.2		
未回答・不正回答	2	1.6		
合計	41	31.8		
合計	129	100.0		

問 1-2) 韓国朝鮮出身地 (道)

		度数	%	有効%	累積%
有効	京畿道	4	3.1	10.3	10.3
	慶尚南道	8	6.2	20.5	30.8
	慶尚北道	7	5.4	17.9	48.7
	済州道	10	7.8	25.6	74.4
	全羅南道	8	6.2	20.5	94.9
	忠清北道	2	1.6	5.1	100.0
	合計	39	30.2	100.0	
欠損値	非該当	90	69.8		
合計		129	100.0		

問 1-3) 日本への渡航年代を教えてください。

		度数	%	有効%	累積%
有効	1926-1940年	18	14.0	51.4	51.4
	1941-1945年	10	7.8	28.6	80.0
	1946-1960年	5	3.9	14.3	94.3
	1961年-	2	1.6	5.7	100.0
	合計	35	27.1	100.0	
欠損値	無回答	2	1.6		
	非該当	92	71.3		
	合計	94	72.9		
合計		129	100.0		

問 3) 一緒に住んでいる家族以外の人と、普段どのようなことをされますか。①から⑦について、その頻度を5段階でお答えください。

	全くない	ほぼ ない	まれに ある	ときどき ある	よく ある	合計
①おしゃべり	40	9	15	16	49	129
	31.0%	7.0%	11.6%	12.4%	38.0%	100.0%
②惣菜などを分け合う	102	2	7	7	11	129
	79.1%	1.6%	5.4%	5.4%	8.5%	100.0%
③金銭の貸し借り	128	1				129
	99.2%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
④買い物	103	3	7	9	7	129
	79.8%	2.3%	5.4%	7.0%	5.4%	100.0%
⑤散歩	99	6	6	7	11	129
	76.7%	4.7%	4.7%	5.4%	8.5%	100.0%
⑥民族団体の活動	98	11	4	8	8	129
	76.0%	8.5%	3.1%	6.2%	6.2%	100.0%
⑦地域活動	82	8	12	10	17	129
	63.6%	6.2%	9.3%	7.8%	13.2%	100.0%

問 4) 健康・介護の不安や、生活に困った最に誰に相談しますか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—家族や親族	94	72.9%
—友人・知人・近所の人	7	5.4%
—民族団体の相談窓口	1	0.8%
—市役所（福祉事務所や保健センターなども含む） 窓口（職員）	12	9.3%
—地域包括支援センターの職員	0	0.0%
—民生委員	1	0.8%
—医師	29	22.5%
—病院の相談員（医療ソーシャルワーカー）	1	0.8%
—介護支援専門員（ホームヘルパー）	6	4.7%
—訪問介護員（ホームヘルパー）	4	3.1%
—訪問看護師	1	0.8%
—相談相手がない	11	8.5%
—その他	10	7.8%

健康・医療

問 5) 健康保険に加入していますか

		度数	%	有効%	累積%
有効	はい	110	85.3	85.3	85.3
	いいえ	19	14.7	14.7	100.0
	合計	129	100.0	100.0	

問 5-1) 加入されている健康保険の種類について教えてください

		度数	%	有効%	累積%
有効	国民健康保険	103	79.8	93.6	93.6
	勤務先健康保険	4	3.1	3.6	97.3
	その他の医療保険	3	2.3	2.7	100.0
	合計	110	85.3	100.0	
欠損値	非該当	19	14.7		
合計		129	100.0		

問 5-2) 加入されない理由は何ですか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	その他	19	14.7	100.0	100.0
	合計	19	14.7	100.0	
欠損値	非該当	110	85.3		
合計		129	100.0		

※その他の理由は全て「生活保護」であった。

問 6) かかりつけの病院はありますか

		度数	%	有効%	累積%
有効	ある	119	92.2	92.2	92.2
	ない	10	7.8	7.8	100.0
	合計	129	100.0	100.0	

問 6-1) かかりつけの病院がある場合、その施設名と所在地を教えてください
回答は本文参照

問 6-2) かかりつけの病院や医者がない場合、その理由はなんですか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—健康だから	6	85.7%
—近所がないから	0	0.0%
—医療費が高く感じるから	0	0.0%
—保険料を滞納しているから	0	0.0%
—まわりが日本人ばかりで利用しにくいから	0	0.0%
—医師の話が難しいから	0	0.0%
—薬局等で薬を購入し、対応しているから	0	0.0%
—通院するのが面倒だから	0	0.0%
—その他	1	14.3%

介護保険・サービスの利用状況・意思

問 7) 家族が介護することは当然のことと思いますか。

	度数	%	有効%	累積%
有効				
とともそう思う。	40	31.0	31.7	31.7
ある程度そう思う。	32	24.8	25.4	57.1
あまりそう思わない。	32	24.8	25.4	82.5
まったくそう思わない	22	17.1	17.5	100.0
合計	126	97.7	100.0	
欠損値				
無回答	3	2.3		
合計	129	100.0		

問 8) 日本人のヘルパーが介護のため自宅を訪ねてくるのは気になりますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	気になる。	23	17.8	18.4	18.4
	どちらかと言えば気になる。	20	15.5	16.0	34.4
	どちらかと言えばきにならない。	21	16.3	16.8	51.2
	まったく気にならない。	61	47.3	48.8	100.0
	合計	125	96.9	100.0	
欠損値	無回答	4	3.1		
合計		129	100.0		

問 9) 介護保険受給に際して、要介護認定申請を行った事がありますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	ない	95	73.6	73.6	73.6
	ある	34	26.4	26.4	100.0
	合計	129	100.0	100.0	

問 9-1) 申請時期を教えてください。(年)

		度数	%	有効%	累積%
有効	2000	3	2.3	9.7	9.7
	2003	2	1.6	6.5	16.1
	2004	1	0.8	3.2	19.4
	2005	6	4.7	19.4	38.7
	2006	3	2.3	9.7	48.4
	2007	7	5.4	22.6	71.0
	2008	1	0.8	3.2	74.2
	2009	4	3.1	12.9	87.1
	2010	4	3.1	12.9	100.0
	合計	31	24.0	100.0	
	欠損値	無回答	3	2.3	
非該当		95	73.6		
合計		98	76.0		
合計		129	100.0		

問 9-2) 要介護認定申請を行った方に対して、認定結果はどうでしたか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	非該当	2	1.6	7.1	7.1
	要支援1	5	3.9	17.9	25.0
	要支援2	1	0.8	3.6	28.6
	要介護1	6	4.7	21.4	50.0
	要介護2	6	4.7	21.4	71.4
	要介護3	2	1.6	7.1	78.6
	要介護5	1	0.8	3.6	82.1
	分からない	5	3.9	17.9	100.0
	合計	28	21.7	100.0	
欠損値	無回答	5	3.9		
	非該当	96	74.4		
	合計	101	78.3		
合計		129	100.0		

問 9-3) 介護保険での在宅サービス・施設サービスを利用したことがありますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	ある	23	17.8	74.2	74.2
	ない	8	6.2	25.8	100.0
	合計	31	24.0	100.0	
欠損値	非該当	97	75.2		
	無回答	1	0.8		
	合計	98	76.0		
合計		129	100.0		

問 9-4) 介護保険サービスの中で、あなたが利用したことがある、もしくは利用しているサービスはどれですか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—訪問介護	17	63.0%
—訪問入浴介護	0	0.0%
—訪問看護	6	22.2%
—訪問リハビリテーション	0	0.0%
—通所介護	10	37.0%
—通所リハビリテーション	0	0.0%
—短期入所生活介護	0	0.0%
—短期入所療養介護	0	0.0%
—福祉用具の貸与など	5	18.5%
—住宅改修費の支給	11	40.7%
—居宅療養管理指導	1	3.7%
—その他	0	0.0%

問 9-5) 介護保険の要介護認定申請をしていない理由はなんですか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—今は何とか自分でやっていけるので、 介護サービスの必要がないため	82	87.2%
—家族や親戚が介護をしてくれるため	6	6.4%
—介護保険サービス以外の福祉サービスが充分なため	0	0.0%
—他人の世話になりたくないため	3	3.2%
—行政に頼りたくないため	0	0.0%
—介護保険制度を知らないため	2	2.1%
—制度がわかりにくい(申請方法がわからない、など)	5	5.3%
—介護サービスの利用料の支払いを負担に感じるため	1	1.1%
—サービスの内容が在日コリアンに配慮されたものにな っていないため	0	0.0%
—その他	8	8.5%

問 10) 介護サービスについて、不満に思う点はなんですか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—どのようなサービスがあるのかよく分からない。	45	36.6%
—サービスの内容が不十分である。	3	2.4%
—利用方法がわかりにくい。	6	4.9%
—利用料が高く感じられる。	8	6.5%
—介護保険料が高く感じられる。	13	10.6%
—言葉が通じない。(もしくは通じにくい。)	0	0.0%
—事業者や施設の職員との関係がうまくいかない。 (もしくはうまくいくか不安である。)	2	1.6%
—サービス内容が在日コリアンに配慮されたものになっていない。	1	0.8%
—在日コリアンが運営している事業者や施設サービスを利用したい。	7	5.7%
—特に不満はない。	53	43.1%

問 11) 介護保険サービス以外の保健福祉サービスを受けた事がありますか。

	度数	%	有効%	累積%
有効	いいえ	118	91.5	92.2
	はい	10	7.8	100.0
	合計	128	99.2	100.0
欠損値	無回答	1	0.8	
合計		129	100.0	

問 11-1) 具体的にはどういったサービスですか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—配食サービス	0	0.0%
—会食サービス	7	87.5%
—その他	1	12.5%

問 11-2) 介護保険以外の保健福祉サービスを利用していない理由は何ですか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—今はサービスを必要としていないため	85	78.7%
—家族や親戚が介護してくれるため	11	10.2%
—他人の世話にはなりたくないため	2	1.9%
—サービスがある事を知らなかったため	3	2.8%
—サービス利用の手続きが分からないため	1	0.9%
—サービスの内容が分からないため	3	2.8%
—利用料の支払いに負担を感じるため	5	4.6%
—近所にサービスを提供する施設がないため	0	0.0%
—その他	8	7.4%

問 12) 介護保険以外の保健福祉サービスで、今後、利用したいサービスはありますか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)

	度数	列の N %
— 配食サービス	5	3.9%
—会食サービス	6	4.7%
—特にない	117	91.4%
—その他	3	2.3%

在日外国人向けサービスに関する意見

問 13) 在日外国人向けサービス（介護保険サービス・介護保険外サービスいずれも）ができた場合、利用したいサービスはどれですか。（当てはまるものすべてに○をつけてください。）

	度数	列の N %
— 配食・会食サービス	15	12.2%
— 韓国・朝鮮語でも対応可能な緊急通報装置システム	0	0.0%
— 在日高齢者のための催し物（祭り・音楽祭など）	15	12.2%
— 在日高齢者のためのサークル活動 （民族舞踊・識字教室・教養講座）	16	13.0%
— 韓国・朝鮮語がわかるヘルパーの派遣	4	3.3%
— 韓国・朝鮮語がわかる職員のいる通所・入所施設	8	6.5%
— その他	8	6.5%
— 特にない	84	68.3%

福祉サービスの情報源

問 14) 介護保険をはじめとする高齢者福祉サービスに関する情報を誰（どこ）から得ていますか。（当てはまるものすべてに○をつけてください。）

	度数	列の N %
— 役所の広報誌・パンフレット	37	28.9%
— 町内会や自治会などの広報誌・パンフレット	14	10.9%
— 民族団体の広報誌・パンフレット	6	4.7%
— 新聞	4	3.1%
— ラジオ・テレビ	6	4.7%
— インターネット	0	0.0%
— 家族や親戚	28	21.9%
— 友人・知人・近所の人	35	27.3%
— 民族団体の窓口（職員）	5	3.9%
— 市役所（福祉事務所や保険センターなどを含む） の窓口（職員）	15	11.7%
— 地域包括支援センターの職員	0	0.0%
— 民生委員	4	3.1%
— 医師	17	13.3%
— 病院の相談員（医療ソーシャルワーカー）	1	0.8%
— 介護支援専門員（ケアマネージャー）	9	7.0%
— 訪問介護員（ホームヘルパー）	5	3.9%
— その他	8	6.3%
— 特にない	23	18.0%

学歴

問 15) 最終学歴について、お答えください。

		度数	%	有効%	累積%
有効	未就学	19	14.7	14.8	14.8
	小学校卒業（国民学校など小学校に順ずるような教育機関含む）	13	10.1	10.2	25.0
	小学校中退	16	12.4	12.5	37.5
	中学校	42	32.6	32.8	70.3
	中学校中退	6	4.7	4.7	75.0
	高等学校	22	17.1	17.2	92.2
	高校中退	5	3.9	3.9	96.1
	大学以上 （短大・専門学校・高専含む）	5	3.9	3.9	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
	欠損値	無回答	1	0.8	
合計		129	100.0		

問 16) 民族学校に通われたことはありますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	ある	22	17.1	17.6	17.6
	ない	103	79.8	82.4	100.0
	合計	125	96.9	100.0	
欠損値	無回答	3	2.3		
	非該当	1	0.8		
	合計	4	3.1		
合計		129	100.0		

識字状況

問 17) 日本語の読み・書き・会話は、どの程度できますか。また、それらが困難な場合は、具体的な程度をご記入ください。

問 18) 朝鮮語の読み・書き・会話は、どの程度できますか。また、それらが困難な場合は、具体的な程度をご記入ください。

問 17-1 日本語の読み

	度数	%	有効%
できる	108	83.7	83.7
できない	21	16.3	16.3
合計	129	100.0	100.0

問 18-1 韓国・朝鮮語の読み

	度数	%	有効%
できる	41	31.8	31.8
できない	88	68.2	68.2
合計	129	100.0	100.0

問 17-2 日本語の書き

	度数	%	有効%
できる	99	76.7	76.7
できない	30	23.3	23.3
合計	129	100.0	100.0

問 18-2 韓国・朝鮮語の書き

	度数	%	有効%
できる	31	24.0	24.0
できない	98	76.0	76.0
合計	129	100.0	100.0

問 17-3 日本語の会話

	度数	%	有効%
できる	128	99.2	99.2
できない	1	0.8	0.8
合計	129	100.0	100.0

問 18-3 韓国・朝鮮語の会話

	度数	%	有効%
できる	64	49.6	49.6
できない	65	50.4	50.4
合計	129	100.0	100.0

世帯収入の現状

問 19) あなたの世帯（家）の収入の種類はどれですか。（当てはまるものすべてに○をつけてください。）また、①・②の場合は、その種類に○をつけてください。

	度数	列の N %
—自分の公的年金	30	24.2%
—配偶者の公的年金	14	11.3%
—私的年金（郵便局・生命保険など）	5	4.0%
—自分の貯蓄や株の配当金	18	14.5%
—配偶者の貯蓄や株の配当金	0	0.0%
—不動産などの財産収入	9	7.3%
—自分が働いて得ている収入	36	29.0%
—配偶者が働いて得ている収入	9	7.3%
—子供や孫からの金銭的支援	29	23.4%
—生活保護	19	15.3%
—在日外国人無年金高齢者に対する給付金	2	1.6%
—その他	3	2.4%

問 20) あなたの世帯（家）の一ヶ月の平均収入はどれくらいですか。

	度数	%	有効%	累積%
有効				
5万円未満	14	10.9	12.5	12.5
5万円以上10万円未満	27	20.9	24.1	36.6
10万円以上15万円未満	20	15.5	17.9	54.5
15万円以上20万円未満	20	15.5	17.9	72.3
20万円以上25万円未満	7	5.4	6.3	78.6
25万円以上30万円未満	10	7.8	8.9	87.5
30万円以上40万円未満	1	0.8	0.9	88.4
40万円以上50万円未満	2	1.6	1.8	90.2
50万円以上70万円未満	2	1.6	1.8	92.0
わからない	9	7.0	8.0	100.0
合計	112	86.8	100.0	
欠損値				
無回答	17	13.2		
合計	129	100.0		

家族との関係

問 21) お子様とは連絡をとっていますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	とっている	107	82.9	84.3	84.3
	とっていない	6	4.7	4.7	89.0
	子供がいない	6	4.7	4.7	93.7
	別居している子供がいない	8	6.2	6.3	100.0
	合計	127	98.4	100.0	
欠損値	無回答	2	1.6		
合計		129	100.0		

問 21-1) お子様のお住まいはどちらですか。都道府県

		度数	%	有効%	累積%
有効	山口	1	0.8	0.9	0.9
	神奈川	1	0.8	0.9	1.9
	大阪	100	77.5	94.3	96.2
	東京	1	0.8	0.9	97.2
	富山	1	0.8	0.9	98.1
	兵庫	2	1.6	1.9	100.0
	合計	106	82.2	100.0	
欠損値	無回答	2	1.6		
	非該当	21	16.3		
	合計	23	17.8		
合計		129	100.0		

問 21-2) お子様は月に何回くらい来られますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	全くなし	9	7.0	9.3	9.3
	年に数回	15	11.6	15.5	24.7
	1回以上3回未満	24	18.6	24.7	49.5
	3回以上5回未満	24	18.6	24.7	74.2
	5回以上10回未満	4	3.1	4.1	78.4
	10回以上20回未満	3	2.3	3.1	81.4
	20回以上	18	14.0	18.6	100.0
	合計	97	75.2	100.0	
欠損値	無回答	11	8.5		
	非該当	21	16.3		
	合計	32	24.8		
合計		129	100.0		

問 21-3) お子様の家には月に何回くらい行きますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	全くなし	49	38.0	55.7	55.7
	年に数回	13	10.1	14.8	70.5
	1回以上3回未満	13	10.1	14.8	85.2
	3回以上5回未満	7	5.4	8.0	93.2
	10回以上20回未満	3	2.3	3.4	96.6
	20回以上	3	2.3	3.4	100.0
		合計	88	68.2	100.0
欠損値	無回答	20	15.5		
	非該当	21	16.3		
	合計	41	31.8		
合計		129	100.0		

暮らし向き

問 22) 現在の暮らし向きについて、どうお感じですか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	よい	9	7.0	7.3	7.3
	ややよい	37	28.7	29.8	37.1
	やや苦しい	33	25.6	26.6	63.7
	苦しい	45	34.9	36.3	100.0
	合計	124	96.1	100.0	
欠損値	無回答	5	3.9		
合計		129	100.0		

問 23) 現在、最も困っていることは何ですか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	本人や配偶者の健康のこと	45	34.9	37.2	37.2
	経済的なこと	35	27.1	28.9	66.1
	頼れる人がいないこと	1	0.8	0.8	66.9
	何もない	32	24.8	26.4	93.4
	その他	8	6.2	6.6	100.0
	合計	121	93.8	100.0	
欠損値	無回答	8	6.2		
合計		129	100.0		

食生活

問 24) 普段の食事はどうされていますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	自炊をしている。	87	67.4	68.0	68.0
	店で売っているお惣菜を買ってく。	7	5.4	5.5	73.4
	外食をしている。	2	1.6	1.6	75.0
	家族に作ってもらっている。	32	24.8	25.0	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
欠損値	無回答	1	0.8		
合計		129	100.0		

住まいについて

問 25) 住まいの種類、居住地、そこで暮らした期間をお聞かせください。現在と、その直前、今までに最も長く暮らしていた住まいについてお答えください。住まいの種類は下記の欄からお選びください。

現在の住まいの種類

	度数	%	有効%	累積%
有効 持ち家 (戸建て住宅や分譲マンションなど)	101	78.3	78.3	78.3
民間賃貸住宅	15	11.6	11.6	89.9
公営住宅	10	7.8	7.8	97.7
その他	3	2.3	2.3	100.0
合計	129	100.0	100.0	

現在の住まいの居住開始年

	度数	%	有効%	累積%
有効 -1945	4	3.1	3.1	3.1
1946-1965	35	27.1	27.3	30.5
1966-1975	25	19.4	19.5	50.0
1976-1985	37	28.7	28.9	78.9
1986-	27	20.9	21.1	100.0
合計	128	99.2	100.0	
欠損値 無回答	1	0.8		
合計	129	100.0		

直前の住まいの種類

		度数	%	有効%	累積%
有効	民間賃貸住宅	63	48.8	55.8	55.8
	持ち家(戸建て住宅や分譲マンションなど)	41	31.8	36.3	92.0
	社宅・寮・飯場	4	3.1	3.5	95.6
	その他	3	2.3	2.7	98.2
	公営住宅	2	1.6	1.8	100.0
	合計	113	87.6	100.0	
欠損値	無回答	12	9.3		
	非該当	4	3.1		
	合計	16	12.4		
合計		129	100.0		

直前の住まいの居住地 (集計省略)

直前の住まいの居住開始年

		度数	%	有効%	累積%
有効	-1945	18	14.0	17.1	17.1
	1946-1955	21	14.0	20.0	37.1
	1956-1965	17	13.2	16.2	53.3
	1966-1975	25	19.4	23.8	77.1
	1976-1985	16	12.4	15.2	92.4
	1986-	8	6.2	7.6	100.0
	合計	105	81.4	100.0	
欠損値	無回答	22	17.1		
	非該当	2	1.6		
	合計	24	18.6		
合計		129	100.0		

最も長く暮らした住まいの種類

		度数	%	有効%	累積%
有効	持ち家(戸建て住宅や分譲マンションなど)	99	76.7	77.3	77.3
	民間賃貸住宅	18	14.0	14.1	91.4
	公営住宅	6	4.7	4.7	96.1
	その他	3	2.3	2.3	98.4
	社宅・寮・飯場	2	1.6	1.6	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
欠損値	無回答	1	0.8		
合計		129	100.0		

最も長く暮らした住まい(居住地)

		度数	%	有効%	累積%
有効	現住地	112	86.8	87.5	87.5
	住吉区粉浜	1	0.8	0.8	88.3
	西成区長橋	1	0.8	0.8	89.1
	西成区長橋3	1	0.8	0.8	89.8
	西成区南開	2	1.6	1.6	91.4
	大正区	2	1.6	1.6	93.0
	直前	9	7.0	7.0	100.0
	合計	128	99.2	100.0	
欠損値	-1	1	0.8		
合計		129	100		

最も長く暮らした住まいの居住期間

		度数	%	有効%	累積%
有効	-25年	27	20.9	21.6	21.6
	26-35年	34	26.4	27.2	48.8
	36-45年	29	22.5	23.2	72.0
	46-55年	20	15.5	16.0	88.0
	56年-	15	11.6	12.0	100.0
	合計	125	96.9	100.0	
欠損値	無回答	4	3.1		
合計		129	100.0		

問 26) 現在の住まいは、どのようなルートで見つけましたか。(当てはまるもの全てに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—韓国朝鮮語のできる不動産屋を通じて。	0	0.0%
—一般的な不動産屋を通じて。	37	30.3%
—知人・親類等を通じて。	44	36.1%
—大家から直接。	14	11.5%
—公的機関や相談窓口等を通じて。	7	5.7%
—民族団体等を通じて。	1	0.8%
—その他	26	21.3%

問 27) 現在、住まいの部屋数は、どれくらいですか。

	度数	%	有効%	累積%
有効 1(D)K以下	3	2.3	2.3	2.3
2(D)K	15	11.6	11.6	14.0
3(D)K	41	31.8	31.8	45.7
4(D)K以上	70	54.3	54.3	100.0
合計	129	100.0	100.0	

問 28) 現在、住まいの広さは、どのくらいですか。(平米換算)

	度数	%	有効%	累積%
有効 -50	34	26.4	26.8	26.8
50-100	48	37.2	37.8	64.6
100-200	30	23.3	23.6	88.2
200-300	11	8.5	8.7	96.9
300-	4	3.1	3.1	100.0
合計	127	98.4	100.0	
欠損値 無回答	2	1.6		
合計	129	100.0		

問 29) 現在、住まいには、どのような設備がありますか。(当てはまるもの全てに○をつけてください。)

	度数	列の N %
風呂	99	76.7%
トイレ	129	100.0%
台所	129	100.0%
共同風呂	0	0.0%
共同トイレ	0	0.0%
共同台所	0	0.0%

問 30) 家の中での主な楽しみは何ですか。(当てはまるもの全てに○をつけてください。)

	度数	列の N %
— 家族・友人との会話や食事	29	22.8%
— 庭や軒先での園芸	13	10.2%
— ペットとのふれあい	6	4.7%
— テレビ・ラジオの鑑賞	94	74.0%
— 読書や裁縫など趣味	18	14.2%
— 特にない	12	9.4%
— その他	14	11.0%

問 31) 現在、住まいの満足度は、どの程度ですか。

	度数	%	有効%	累積%
有効				
おおいに満足	33	25.6	26.8	26.8
やや満足	57	44.2	46.3	73.2
やや不満	22	17.1	17.9	91.1
おおいに不満	11	8.5	8.9	100.0
合計	123	95.3	100.0	
欠損値				
無回答	6	4.7		
合計	129	100.0		

問 32) 日常生活において、ご自身、及びご家族・同居人に、車いすや杖を使用している方はいますか。（当てはまるもの全てに○をつけてください。）

	度数	列の N %
いない。	91	71.1%
車いす生活者がいる。	7	5.5%
杖使用者がいる。	29	22.7%
車いす、杖は使用しないが、つたえ歩きをしている。	8	6.3%
その他	0	0.0%

問 33) 現在の住まいで、ご自身やご家族、同居人が、転倒・転落事故が起きたことはありますか。

	度数	%	有効%	累積%
有効 ある	38	29.5	29.7	29.7
ない	90	69.8	70.3	100.0
合計	128	99.2	100.0	
欠損値 無回答	1	0.8		
合計	129	100.0		

問 33-1) 転倒・転落事故が起きた場所（箇所）はどこですか。（当てはまるもの全てに○をつけてください。）

	度数	列の N %
—階段	12	35.3%
—敷居や、玄関などの段差	6	17.6%
—風呂	5	14.7%
—トイレ	4	11.8%
—寝室	7	20.6%
—台所・食堂	3	8.8%
—洗面所	1	2.9%
—廊下	1	2.9%
—その他	6	17.6%

問 33-2) 住まいの中で、ヒヤッとしたことはありますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	ある	23	17.8	26.4	26.4
	ない	64	49.6	73.6	100.0
	合計	87	67.4	100.0	
欠損値	無回答	6	4.7		
	非該当	36	27.9		
	合計	42	32.6		
合計		129	100.0		

問 34-1) 現在、最も不都合や不便を感じる場所（箇所）はどこですか。（当てはまるもの全てに○をつけてください。）

	度数	列の N %
—階段	21	43.8%
—敷居や玄関などの段差	8	16.7%
—風呂	11	22.9%
—トイレ	8	16.7%
—寝室	2	4.2%
—台所・食堂	6	12.5%
—洗面所	2	4.2%
—廊下	2	4.2%
—その他	11	22.9%

問 34-2) 現在の住まいはバリアフリーになっていますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	はい	18	14.0	22.2	22.2
	いいえ	63	48.8	77.8	100.0
	合計	81	62.8	100.0	
欠損値	無回答	1	0.8		
	非該当	47	36.4		
	合計	48	37.2		
合計		129	100.0		

問 35-1) 現在の住まいに住み続けたいと思いますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	はい	111	86.0	88.8	88.8
	いいえ	14	10.9	11.2	100.0
	合計	125	96.9	100.0	
欠損値	無回答	4	3.1		
合計		129	100.0		

問 35-1)住み続けたい理由は、何ですか。(当てはまるもの全てに○をつけてください。)

	度数	列の N %
—知人や友人，親戚などが近くに住んでいるから。	21	20.0%
—商店や病院，駅などが近くにあり，便利だから。	24	22.9%
—今の住まいに住み慣れているから。	61	58.1%
—住み替えることを特に考えてこなかったから。	14	13.3%
—住み替えるだけの体力に自信がないから。	9	8.6%
—住み替えるだけの資金がないから。	16	15.2%
—その他	14	13.3%

問 35-2) 住み続けたくない理由は何ですか

	度数	列の N %
—住まいの設備に不満があるから。	5	41.7%
—住まいの広さに不満があるから。	2	16.7%
—健康に不安をかかえるようになったから。	2	16.7%
—知人や友人，親戚が近隣にいないから。	0	0.0%
—商店や病院，駅が近隣にないから。	0	0.0%
—すでに住み替える予定があるから。	0	0.0%
—その他	6	50.0%

問 36)) 現在の住まいを改修したいと思いますか。

		度数	%	有効%	累積%
有効	はい	41	31.8	32.5	32.5
	いいえ	85	65.9	67.5	100.0
	合計	126	97.7	100.0	
欠損値	無回答	3	2.3		
合計		129	100.0		

問 36-1) 住まいのどこの場所（箇所）を改修したいですか。

	度数	列の N %
—階段	2	5.1%
—敷居や玄関などの段差	4	10.3%
—風呂	9	23.1%
—トイレ	8	20.5%
—寝室	0	0.0%
—台所・食堂	8	20.5%
—洗面所	2	5.1%
—廊下	0	0.0%
—その他	23	59.0%

問 36-2) 改修したいと思わない理由は何ですか。

	度数	列の N %
—住まいの設備・広さ等、特に不満がないから。	29	34.1%
—改修について、相談できる人がいないから。	0	0.0%
—身近に改修した事例もなく、情報が入らないから。	0	0.0%
—悪徳業者などに不安を感じるから	0	0.0%
—賃貸住宅や施設などで、自由に改修できないから	10	11.8%
—改修するだけの資金がないから。	21	24.7%
—既に改修しているから。	23	27.1%
—その他	13	15.3%

6. 調査員及び研究協力者(敬称略)

稲垣 吉裕、岩山 春夫、川本 綾、金 菊花、金 稔万、金 銀静、金 春子、倉持 香苗
黒木 宏一、全 泓奎、綱島 洋之、趙 文基、中山 徹、平川 隆啓、玄 善允、
藤井 幸之助、藤川 真衣、堀 久仁子、本岡 拓哉、森部 富美子、水内 俊雄、梁 賢哲
柳 美利、四井 恵介

7. こりあんコミュニティ研究会案内



こりあんコミュニティ研究会へのお誘い

こりあんコミュニティ研究会は、国内外のコリアンコミュニティを始めとするエスニックコミュニティに関心を持つ研究者や学生、市民による情報・知識の共有、交換ならびに調査研究を目的とした組織として、2009年に発足しました。具体的な活動としては、①定例研究会（フィールドワーク）の実施、②メーリングリストによる情報や知識の共有・交換、③共同調査・研究の実施、④ニューズレター（年4回）、論文集（年1回）の発行があります。

研究会への入会を希望される場合

- 1)別紙申し込み用紙を、郵送・Eメール・Faxのいずれかの方法でこりあんコミュニティ研究会事務局に送付ください。
- 2)会員の種類による所定の会費を研究会の振替口座に納めてください。

会員になると、

- 研究会のメーリングリストに登録。
- 定例研究会と共同調査・研究へのお誘い。
- ニューズレターの送付。
- 雑誌「コリアンコミュニティ研究」の配布。

年会費：一般 3,000 円 学生 1,000 円 賛助会員(1口 5,000 円)

ご質問・お問い合わせなどありましたら、以下の連絡先をお願いします。

こりあんコミュニティ研究会事務局

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 大阪市立大学都市研究プラザ
Tel & Fax: 06-6605-3447 E-mail: kocoken2009@gmail.com

こりあんコミュニティ研究会代表

中山徹（大阪府立大学）・水内俊雄（大阪市立大学）

こりあんコミュニティ研究会運営委員

全泓奎（事務局長）・新井信幸・石川久仁子
岩山春夫・黒木宏一・柴田剛・中西雄二
藤井幸之助・宮下良子・本岡拓哉
谷富夫（監事・正）・福本拓（監事・副）

こりあんコミュニティ研究会

koco-ken

코리안 커뮤니티 연구회 since 2009

本研究は財団法人ヒューマンライツ教育財団による研究委託を受けて実施したものであり、2009年度財団法人住宅総合研究財団による研究助成「社会的な不利地域における共生型まちづくりに関する研究－在日コリアンコミュニティの地域再生と居住支援－」（研究主査：全泓奎）の一部及び「ITACOによる新しい地誌学の創生と地域の人縁生成に関する試行研究（代表：若松司）」（研究課題番号：21200024）による助成を得たものである。

2011年8月1日

発行元：

大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL：06-6605-2071

FAX：06-6605-2069

